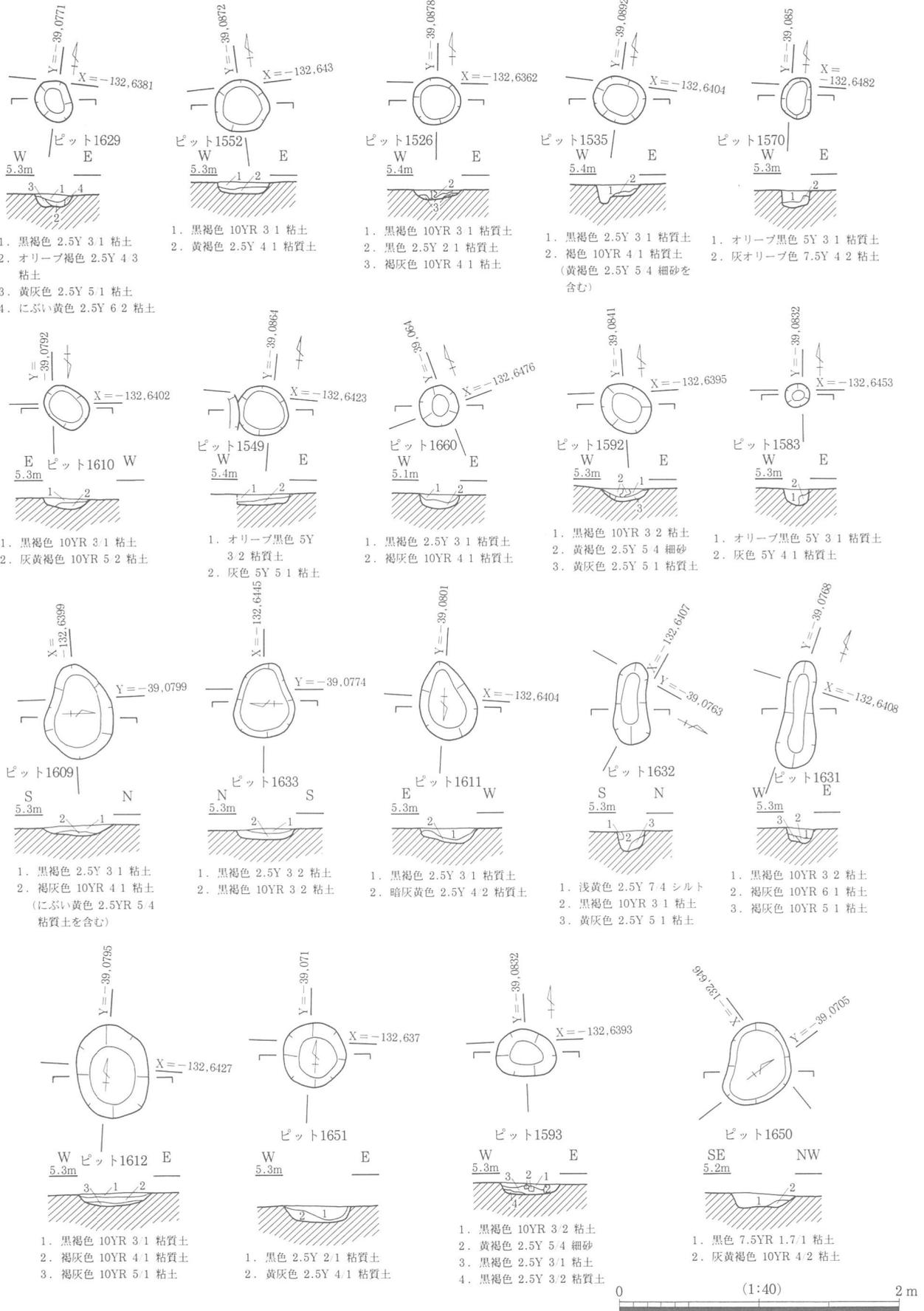
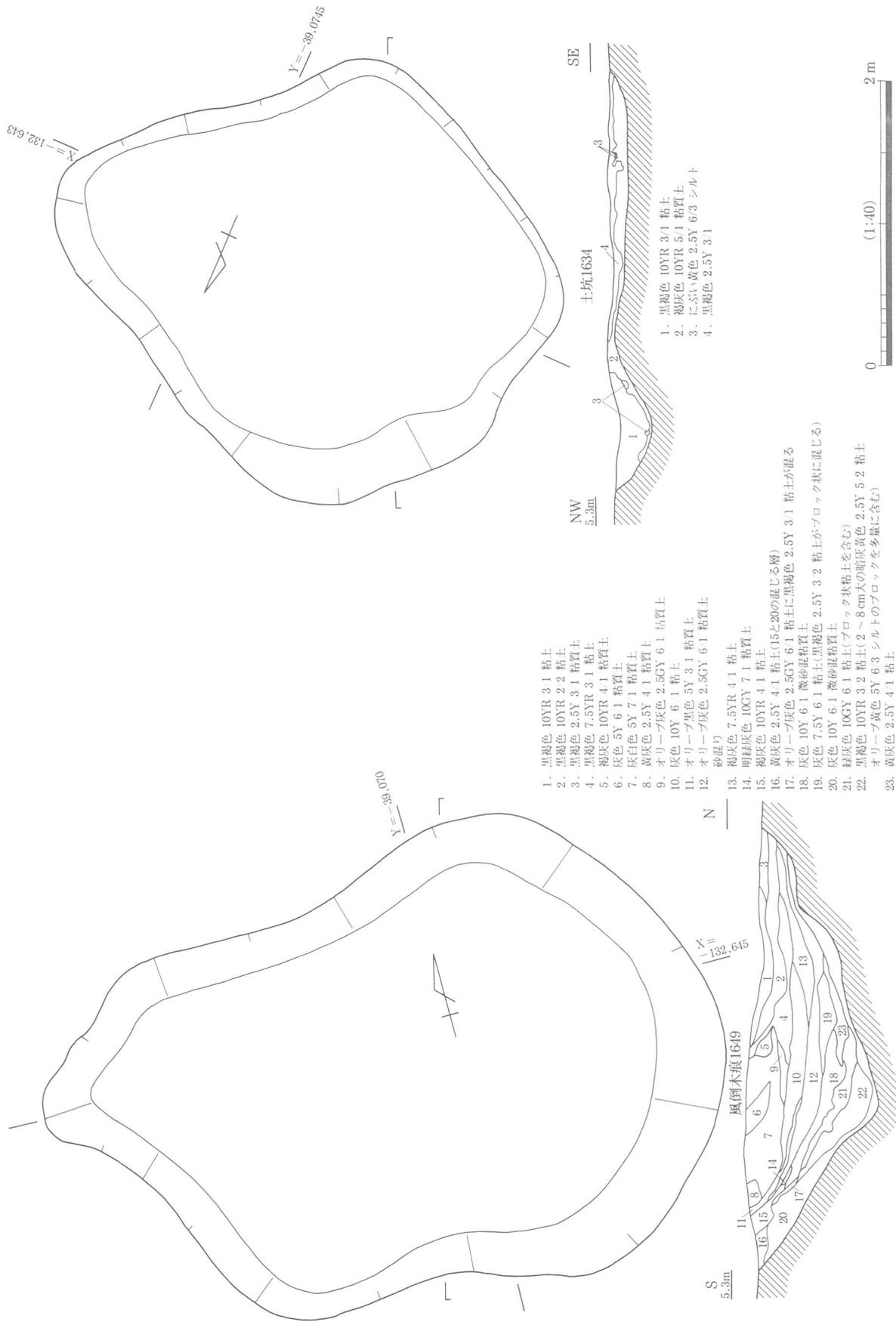


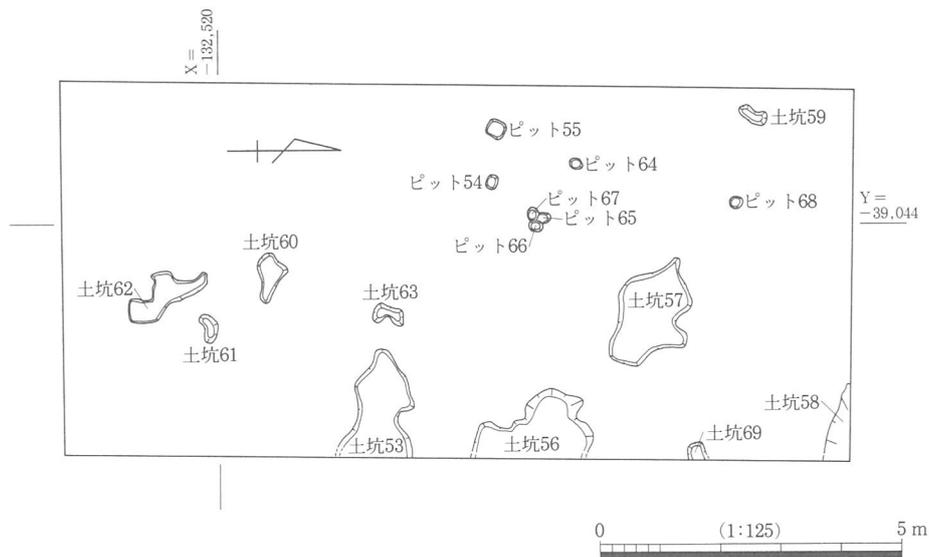
挿図36 4 A トレンチ V層上面 弥生 I 土坑 平面・断面図



挿図37 4 A トレンチ V層上面 弥生 I ピット 平面・断面図



挿図38 4 A トレンチ V層上面 弥生 I 土坑 風倒木痕 平面・断面図



挿図39 5 Aトレンチ V層上面 弥生I 遺構 平面図

集落を取りまく地域に位置して、土坑が散在している。

土坑53（挿図39, 40）

土坑はトレンチ東端やや中央よりに位置する。遺構は不定形である。遺構は調査区東側に延びる。土坑の埋土は上層が黒色粘土、下層が暗灰黄色粘土である。

土坑56（挿図39, 40、図版15-e）

土坑はトレンチ東端に位置して中央寄りにある。遺構は不定形である。遺構の埋土は上層が黒色粘土、黄褐色シルトである。

土坑58（挿図39）

土坑はトレンチ北東隅にある。遺構の埋土は黒色粘土である。遺構の壁面は急な傾斜を示している。底部は検出できなかった。1994年度に調査された中に自然流路がある。流路は幅が広くて緩やかな傾斜で底面に至る。流路は北西から南東方向に流れている。自然流路の延長上の位置に土坑58がある。しかも土坑は流路と方向が合致している。しかし土坑58の壁面は急な傾斜を示している。自然流路の形状と違っているので別の遺構の可能性が高い。

土坑60（挿図39, 40）

土坑はトレンチ南側中央に位置している。形状は不定形である。埋土は上層から黄灰色粘土、暗灰黄色粘土、黒褐色粘土を示す。

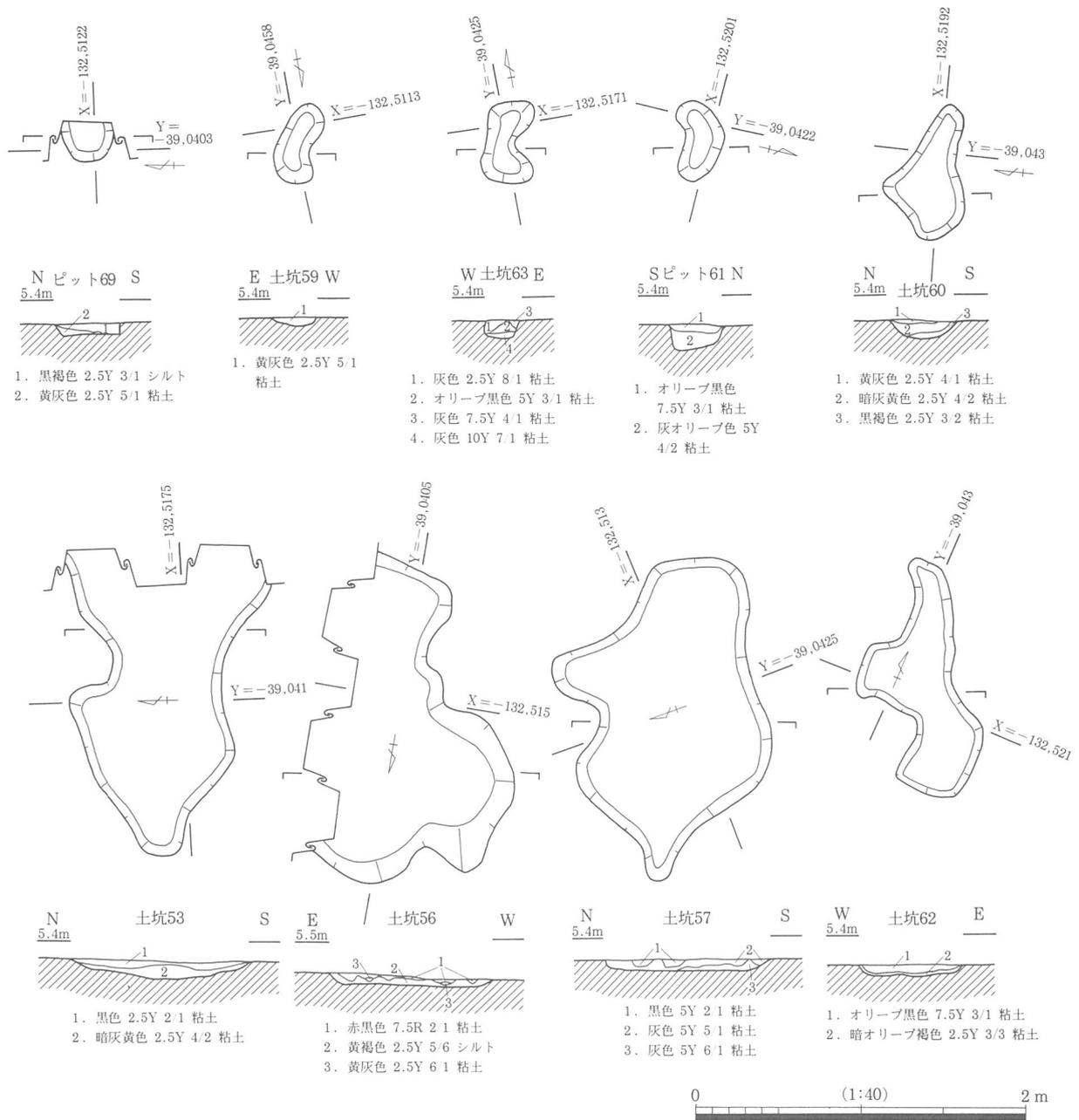
2) ピット（挿図41、図版15-d）

調査したピットは組み合わせて掘立柱建物に復元できなかった。ピットは埋土の色調の違いによって5種類に分けられる。

Aタイプは埋土が黒色を示すもので、ピット64、ピット68がある。

Bタイプは黒褐色を示すもので、ピット69がある。

Cタイプはオリーブ黒の少し薄くなった色調を示すもので、ピット54、ピット61、ピット66、ピット67がある。



挿図40 5 Aトレンチ V層上面 弥生I 土坑 ピット 平面・断面図

Dタイプは埋土が灰色粘土で、ピット65がある。

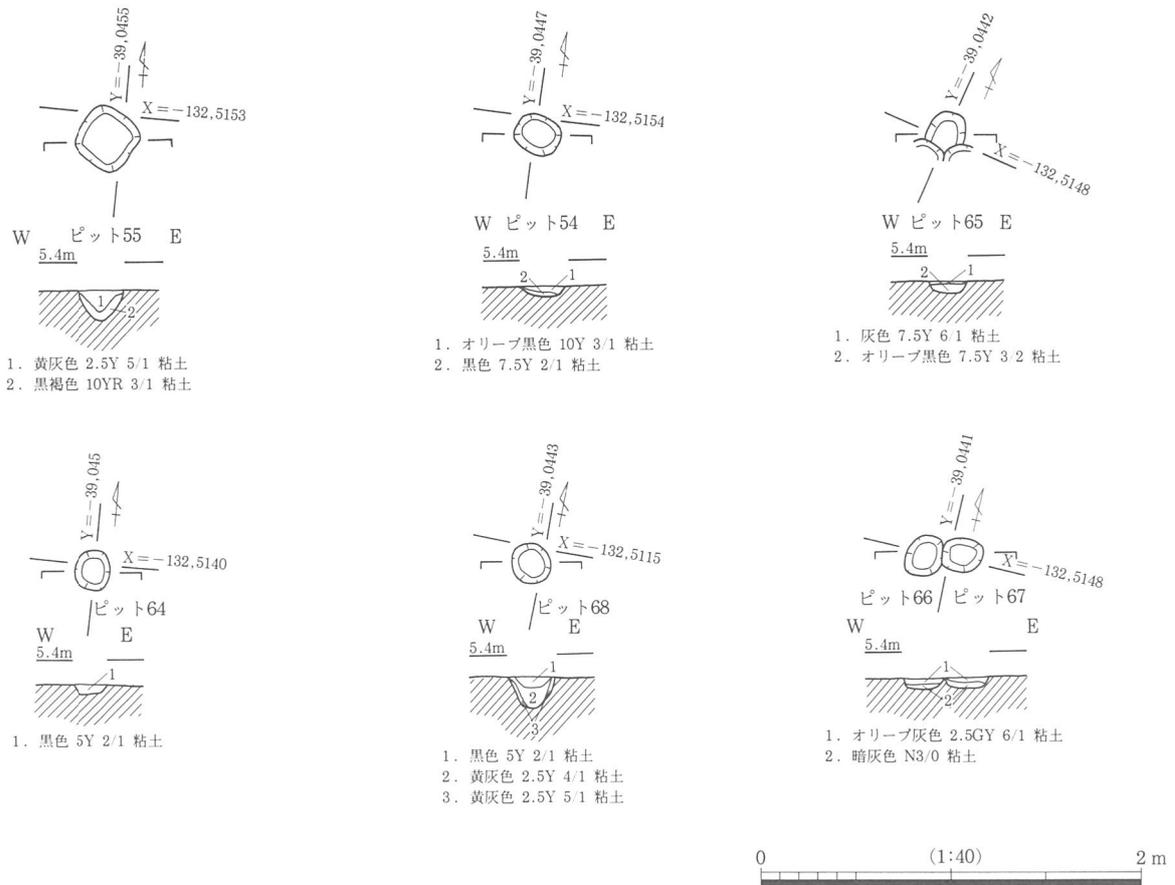
Eタイプは黄灰色粘土を示すもので、ピット55、ピット59がある。

DタイプやEタイプには埋土上層は薄い色調が堆積しても下層に黒色系が堆積するピットもある。ピット54、ピット65、ピット55などがそうである。これらは埋め戻されたためにこのような堆積状況を示すと考えられる。

(7) 弥生時代 後期

弥生時代後期は遺構、遺物とも検出された数は非常に少ない。これらはIV様式期の盛況がうそのように思える状況の急激な変化を示している。

1 AトレンチIV層からV様式に似た叩き甕が出土している(挿図74-25)。



挿図41 5 A トレンチ V層上面 弥生I ピット 平面・断面図

3 古墳時代

古墳時代の遺構は数少ない。しかし古墳時代の遺物は5世紀代、6世紀代、7世紀代と途切れる事なく、出土数は少ないが継続してIV層上面から出土している。古墳時代では前期、中期、後期と分けて記述するほどの遺構や遺物が検出されていないので、各時期をとりまとめてトレンチのみ分けて記述する。

(1) 1 A トレンチ

この時代に該当する遺構は見られない。上層堆積層のIII-2層から須恵器坏身、坏蓋が出土している(挿図83-1, 2)。

(2) 2 A トレンチ

ピット1070(挿図16、図版5-b)

遺構はV層上面弥生Iで検出した。このピット上層にはIV層が堆積していない。遺構はトレンチ南東側に位置する。ピットはやや大型で直径62.5cmを測り、深さ37.5cmを測る。土坑の埋土は黒色粘土層である。遺構から布留式土器の口縁部破片が出土している(挿図62-11)。土器は比較的大きな破片で、土坑内に上層から踏まれて偶然入り込むような大きさではない。土坑は他にも弥生時代後期頃に似た叩き成形の甕底部破片が出土している(挿図62-6)。この甕は古墳時代前期である可能性が高い(挿図74-25)。

ピット714(挿図16、図版5-a)

ピットは2 A トレンチ中央北寄りにあり建物10を構成する。ピットは風倒木痕682に接している。ピットの埋土は灰黄褐色砂質土を示している。ピットは内部が段を作って深くなる。遺構から須恵器坏身が

出土した。須恵器は中村編年のII型式5段階と思われる破片である。他に無文の壺破片が出土している。弥生時代の遺構から須恵器が出土するのは踏み込み等の理由が考えられる。

土坑306（挿図17、図版5-b）

土坑はIV層上面弥生IIで検出した。遺構はトレンチ北東隅に位置している。土坑は直径1.2mを測る円形に近い形である。土坑の埋土は黒色粘土、灰黄色粘土である。土坑から土師器小型甕が出土している。底部を欠損しているが体部上半はそろっている（挿図65-2）。この他に時期不明の土器破片が15片出土している。

上層堆積層出土遺物ではIV層から須恵器高杯、坏身などが出土している（挿図78-1,2,4,5,7）。III-2、IV層から須恵器 坏身、短脚高杯、大甕、須恵器 坏身、坏蓋、甕が出土している（挿図85-10,11,12,13,15）。III-1、III層から須恵器 坏身が出土している（挿図91-12）。

（3）3 A トレンチ（挿図42、図版16-a）

このトレンチはIV層上面やその上層堆積層から古墳時代の遺構や遺物は検出されなかった。しかし3 A トレンチ南側中央付近が最も高い箇所と比較して60cmほど低く窪んでいる（挿図42）。下層に弥生時代の溝944があり柔らかい下層の堆積状況とは言え、これほど窪んでいる状況は不自然である。この部分はIV層が堆積せず、III-2層が直接V層上面に堆積している。この状況は南側壁面図を観察しても不自然である。古墳時代から平安時代の間いずれかの時期にこの部分を掘削する作業を行った可能性がある。

（4）4 A トレンチ、5 A トレンチ

これらのトレンチから古墳時代と思われる遺構はIV層上面になく、また上層堆積層からもこの時期に該当する遺物は出土していない。

古墳時代の遺構は非常に少ない。

4 古代

古代の遺物を出土している遺構は認められなかった。古代の遺物は上層の堆積層から少量出土している。この時期の遺物の出土量は古墳時代より一層減少する。

（1）1 A トレンチ



挿図42 3 A トレンチ IV層上面 平面図

このトレンチ内の遺構から遺物は出土していない。Ⅳ層出土で須恵器高台付坏身がある（挿図75-9）。口縁部は垂直に近い角度で立ち上がり奈良時代後半期である。Ⅲ-2層出土で弥生時代か土師器か識別しがたいが坏口縁部がある（挿図82-11）。土師器の碗口縁部（挿図83-3）がある。また、甕口縁部（挿図83-8）が出土している。平安時代と思われる遺物は土師器碗の高台部分（挿図83-4,5）が出土している。

（2）2 A トレンチ

このトレンチでは土坑781が認められる。

土坑781（挿図16、図版7-a b）

トレンチ西端中央に検出している。不定形な形状で東部が円形の深い窪みを作っている。この遺構内から須恵器坏身が出土している（挿図68-10）。この遺構の時期は7世紀後半から8世紀前半が考えられる。弥生時代の遺構に新しい時代の遺構が重複していた可能性がある。

（3）3 A トレンチ

このトレンチでは遺構、遺物とも出土していない。

（4）4 A トレンチ

このトレンチで遺構内からは遺物は全く出土していない。Ⅲ-2層から須恵器坏身高台部分、坏蓋で摘み付きの形態、土師器甕も出土している。

（5）5 A トレンチ

このトレンチでは遺構内から遺物は出土せず、Ⅲ-2層から須恵器坏蓋でつまみが欠損したものと、土師器坏身口縁部が出土している。

5 中世

中世は土器で言えば瓦器碗で示される。しかし瓦器碗の出現期はこれまでの中世土器研究で鎌倉時代から平安時代に少しさかのぼる時期が考えられている。瓦器碗出現期頃の遺構は本来ならば古代の項目で述べなければならないが、本報告書では瓦器碗出現以降に水田経営が継続することを考えて、中世の項に含めて述べている。

中世を境として当遺跡の今回の調査地周辺はこれまでになかった大きな変動が始まった。それはⅢ-2層がこれまで植物が繁茂してⅣ層を形成していた上層に堆積し始めたことである。下層にⅢ-2層が、上層にⅢ-1層が堆積する。これら二つの堆積層はこの調査地周辺が河川の後背湿地へと変化した事を示している。これらⅢ層の堆積層の上面に1 Aから5 A トレンチではⅢ-1層上面とⅡ-2層上面に水田面が検出されている。そしてそのⅡ-1層上面にも水田面があり限られたトレンチで調査を実施している。各トレンチ共通する遺構面の呼び方ではⅢ-1層上面の水田面を中世Ⅰ遺構面、Ⅱ-2層上面の水田面を中世Ⅱ遺構面としている。これらの遺構面は各トレンチに共通する遺構面と認識している。そして層の途中に現れた狭い範囲で検出された水田は中世Ⅱ-2などと枝番号を付けて表している。それより上面では部分的に調査を実施したトレンチがあり、それぞれ中世Ⅲ等の水田と呼んでいる。

（1）Ⅲ層

1）Ⅲ-2層堆積層（図版16-b d）

この層の上面ではⅢ-1層と入り混じったまだら模様がすべて調査したトレンチで検出された。しかし遺構は全く認められなかった。まだら模様の凹凸はⅣ層まで達している場合がある。Ⅳ層上面から牛と

思われる偶蹄目類の足跡が数カ所から検出されている（図版52-c d、55-a b）。このまだら模様が生じた原因は偶蹄目類が歩き回った跡と理解される。III-2層から出土した土器は黒色土器口縁部や瓦器碗である。IV層出土の瓦器碗が1点あるがどうも混入の可能性がありそうだ。付章で述べる自然科学的分析ではプラント・オパールが検出されている。

2) III-1層堆積層

この堆積層上面は砂層に覆われて中世Iの水田面に使用されている。III-1層の上面は人や牛の足跡が無数に検出されている。そして砂層に覆われる機会が多くなる。調査地は洪水を受けやすい環境に変化した事を物語っている。

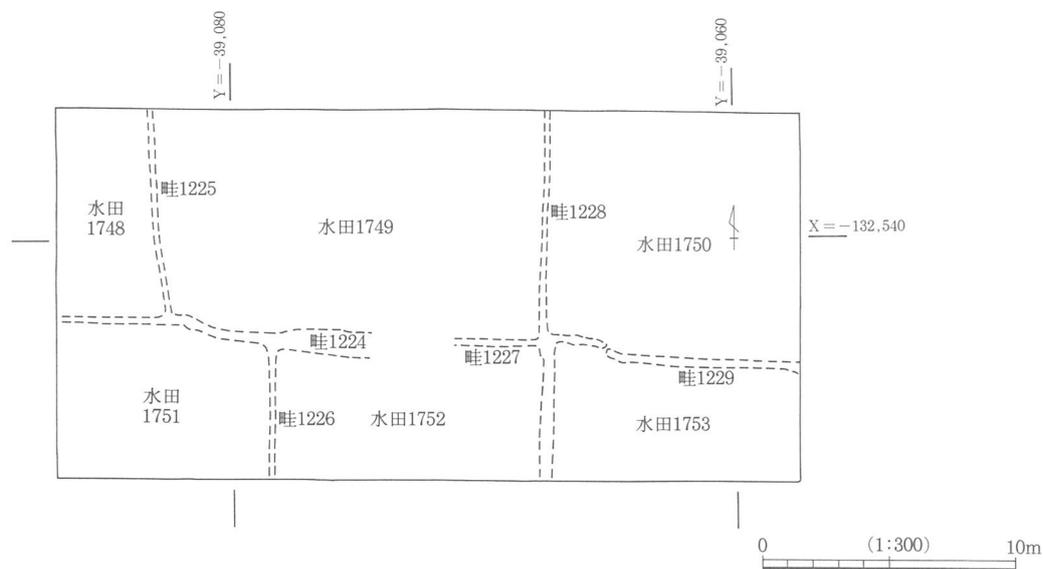
6 中世I

この項ではIII-1層上面の中世I遺構面の水田遺構について述べる。

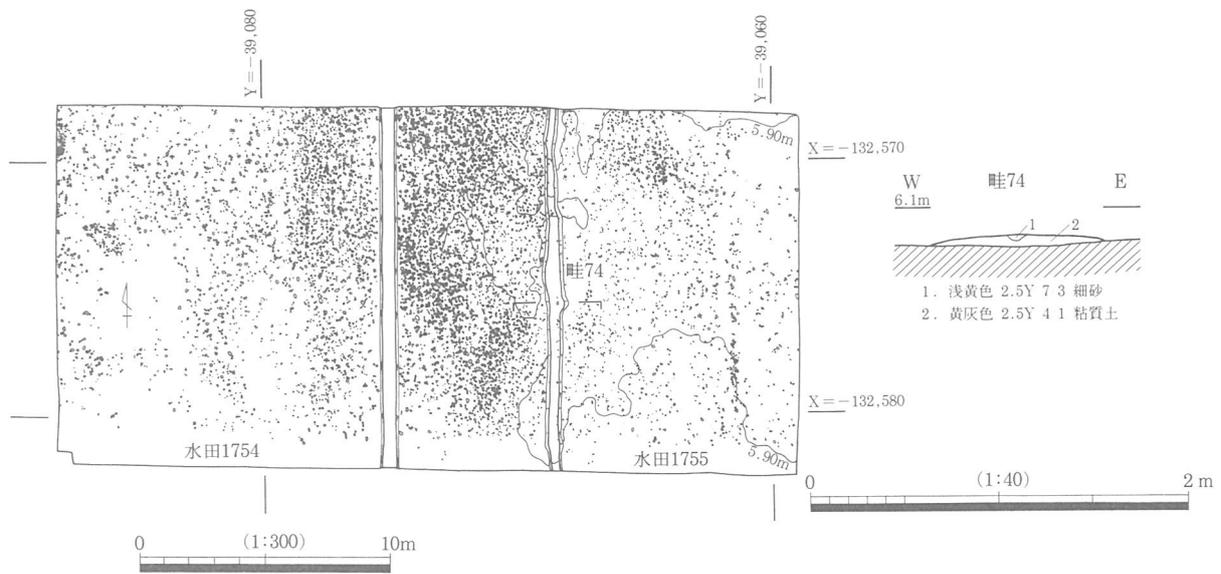
(1) 1Aトレンチ（挿図43、図版17-a）

水田は東西方向の畦の跡1条と南北方向の畦の跡2条を調査している。畦はふくらみが検出できなかった。しかしIII-1層上面を精査すると微妙な色調の違いが現れた。しかも東西方向、南北方向で幅が畦の幅が似ることや水田区画とよく似た形で現れる事から畦の痕跡と理解した。畦の跡は色調が濃青緑色を示し、周囲の水田面は青緑色であった。東西方向の畦はトレンチ中央部分で色調が薄くなり中央西側が分からない。そしてトレンチ中央部分で再び検出している。畦は直線状にならず、少し段違いに曲がったり、途切れたりしている。東西方向の畦の北側と南側は伸びる畦の接続箇所が約5mがずれている。

水田区画の高さは水田1748は5.95mを測る。水田1749は低い箇所では5.89m、高い箇所では5.94mを測る。長さ15mほどあるがほとんど変わらない。水田1750は低い箇所では5.89m、高い箇所では5.95mを測る。水田1751は少し低く水田面は5.84mから5.92mを測る。水田1752は5.88mから5.91mを測る。水田1753は5.87mから5.89mを測る。水田区画の高さは北側の水田から南側の水田へわずかであるが標高が低くなっている。西側の水田と東側の水田では西側が高い。水田面は全体的に見ればほとんど平坦であり高さの差が無いと推測される。畦1224は少し南側に屈曲している。畦1225は西側に少し屈曲している。畦1229は水田区画からの西端から2mほど離れた箇所ですぐ途切れて、東



挿図43 1Aトレンチ III-1層上面 中世I 遺構 平面図

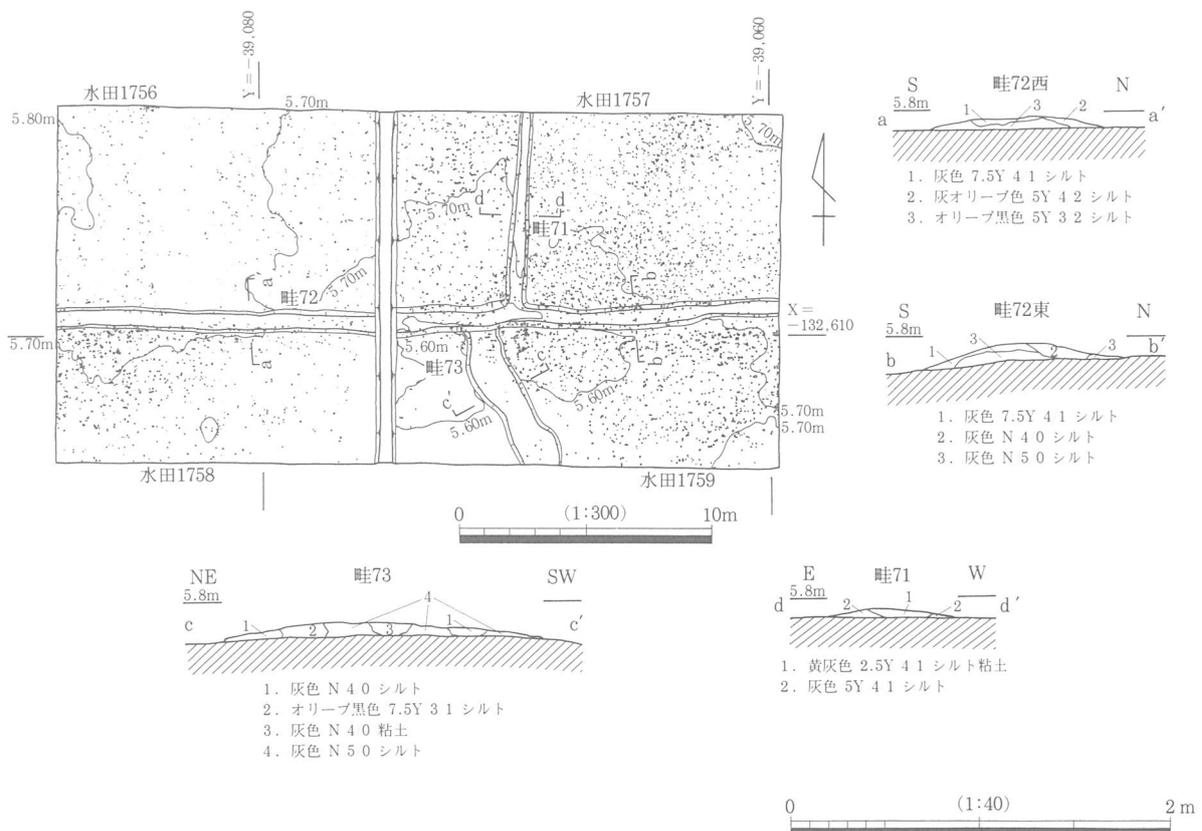


挿図44 2 Aトレンチ III-1層上面 中世 I 遺構 平面・断面図

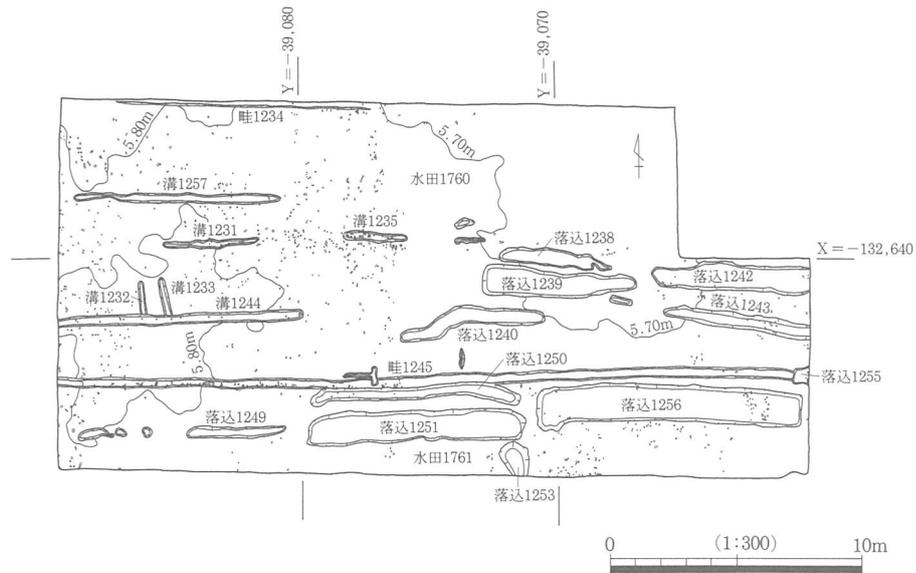
側の畦が少し南側に位置している。この途切れた箇所は水口の可能性がある。水田面の足跡は非常に少なくまばらに検出する。畦1288の通る南北ラインは、復元条里の坪境に位置にあたる。

(2) 2 Aトレンチ (挿図44、図版18-a b c d)

北側に隣接した1 Aトレンチと違い、非常に簡素な遺構検出状況である。水田は中央やや東側に南北方向の畦を1条検出した。水田1754は標高5.89mから5.97mまでで平均の高さ5.95m以上の範囲が約半



挿図45 3 Aトレンチ III-1層上面 中世 I 遺構 平面・断面図

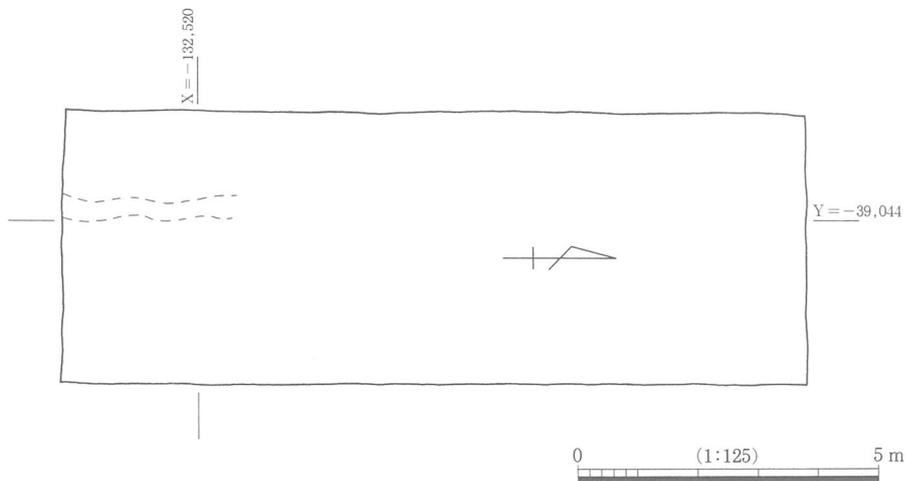


挿図46 4 A トレンチ III-1層上面 中世 I 遺構 平面図

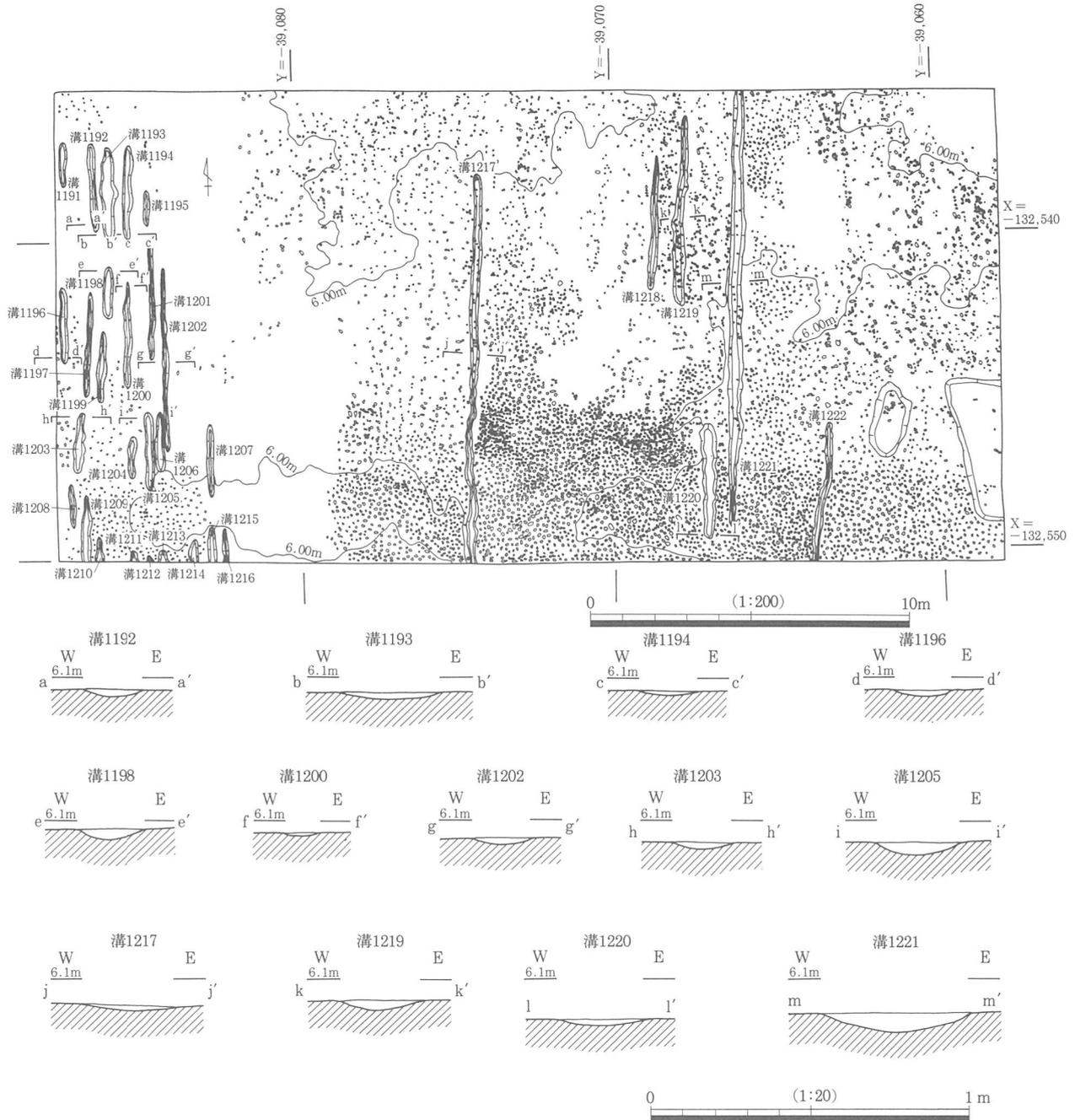
分の面積を占めている。水田1755は標高5.88mから5.95mを測っており、平均的な高さは5.92mを測っている。水田1754と水田1755の標高は東側が約3cmほど低い。畦74は南北方向の畦である。畦は南北方向に伸びて条里制の方向に合っている。畦の太さは太い箇所0.9m、細い箇所0.35mを測る。畦の高さは2～3cmを測り、低い扁平な形状である。元の畦は扁平でなく少し高い台形状を示していたと考えられる。後世の2m以上の堆積層の重みで圧縮されたと考えられる。畦の土色は暗青灰色を示す。水田1754の足跡は畦74の西側に隣接する約10mの範囲に密集している。西側のトレンチ西端側は足跡が相当数減っている。畦74の東側も足跡の検出量が減少している。東端から3.5m付近に足跡が南北方向に密集している。足跡の検出状況は南北方向に並んでいる。畦74と平行する方向に水田耕作時の作業方向が認められる。畦74も復元条里の坪境に位置している。

(3) 3 A トレンチ (挿図45、図版19-a b c d)

水田は中央より南に寄った位置に東西方向の畦72がある。トレンチの中央やや東寄りに北に延びた畦71と南東方向に蛇行した畦73がある。トレンチは畦で4分割されている。畦は(図版19-a b d)低く扁平である。畦71は北側に直線状に延びている。高さは約5cmで扁平な形状を示している。畦72は東西方向に少し屈曲しているが直線状に延びている。高さは約10cmで比較的高く残っている。畦73は北西か



挿図47 5 A トレンチ III-1層上面 中世 I 遺構 略図

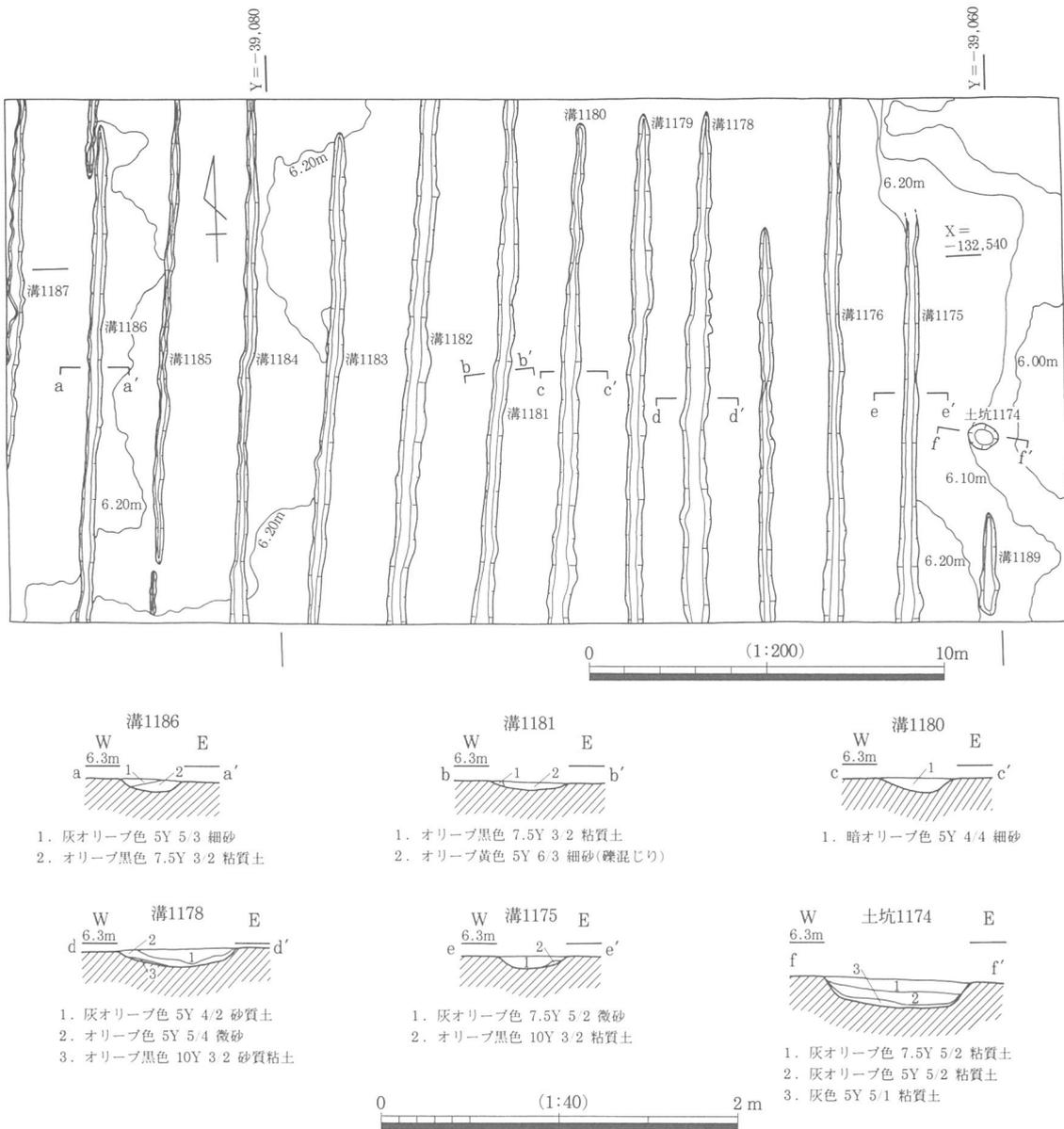


挿図48 1 A トレンチ II-2層中 中世II-1 遺構 平面・断面図

ら南東方向に屈曲している。畦73の幅は畦71、畦72と比較すると広く、広い箇所ので約1.4mを測る。高さは約8cmで薄い形状である。水田1756の標高は北西側が5.65mを測り南東側が5.82mを測る。水田1757は北西側が5.74mから南西側が5.62mを測る。水田1758は北西側が5.74mを測り北東側が5.58mを測る。水田1759は北東側が5.59mを測り南東側が5.70mを測る。足跡は(図版19-b c d) トレンチ全体に散らばって検出している。水田1757の足跡は比較的密集しているが、水田1756の足跡は比較的粗く検出される。

(4) 4 A トレンチ (挿図46、図版20-a b c)

このトレンチは中央から少し南に寄った東西方向の畦とトレンチ北端の2条の畔が検出された。畦に



挿図49 1 A トレンチ II-2層上面 中世II-2 遺構 平面・断面図

沿って平行に掘られた溝が幾つか検出されている。水田区画は非常に大きいようだ。水田1760は標高5.60m～5.82mを測る。水田1761は標高5.71m～5.81mを測る。畦1245はトレンチのやや南側中央を東西方向にほぼ直線状に延びている。東端で落込1255に切られている。畦の高さは1cmほどでわずかに盛り上がった形状である。畦1234(図版19-bc)はトレンチ北西側で側溝に沿って検出した。北側半分は側溝掘削時に削られている。東側は上層の砂層堆積時に削られたのか畦の盛り上がりや色調が変わった箇所を認める事ができなかった。高さは約1cmで畦1245と同様に低い形態である。遺構は(図版19-bc)東側に幅が1.5m～2.5mを測る落込が幾つか掘られている。これらは落込1238、落込1239、落込1240、落込1242、落込1243、落込1249、落込1250、落込1251、落込1253、落込1255、落込1256である。これらの落込は畦1245と平行に東西方向を示している。落込1250の中には畦1245を削っているものがある。従ってこの落込は水田の埋没直前に掘られた可能性が高い。これらの落込の埋土は灰白色粗砂である。落込は東西方向に長さがすべて違っている。また蛇行したものが少し存在する。トレンチ西側は落

込が存在しない。落込の底部は足跡が見られて凸凹がある。溝はトレンチ西側に検出された幅の狭い溝である。溝1232、溝1233は南北方向に近い方向を示している。また溝1231、溝1235、溝1244、溝1257は東西方向を示している。これらは幅が狭くて浅い形状で、埋土は灰白色シルトを示している。これらの溝は農耕具で水田面を荒起こした痕跡と思われる。水田1760から西側に小さな足跡の痕跡が散在している。東側の落込の近くは足跡はほとんど検出できなかった。水田1761は東側に足跡が比較的集まって検出している。

(5) 5 A トレンチ (挿図47、図版20-d)

このトレンチは畦、溝が検出できなかった。足跡はこの面ではほとんど検出できなかった。トレンチ南側中央付近に南北方向に色調が帯状に変わっている箇所を長さ4～5 m分検出した。畦の痕跡と推測したが、断面観察をした結果、色調や埋土が周囲と違っていなかった。またふくらみも認められなかった。

7 中世 II

1 A トレンチから 5 A トレンチまで各トレンチで調査をおこなった。この遺構面でも水田を調査し足跡や畦、溝を検出した。大半の遺構は条里制に規制された方位を示している。

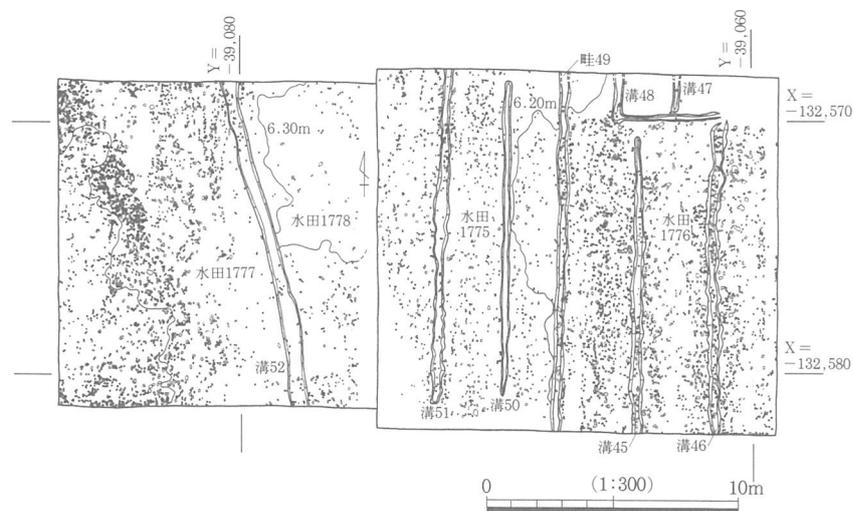
(1) 1 A トレンチ

このトレンチでは II-2層上面の水田と II-2層中の水田の合計 2 枚の水田を報告する。II-2層中の水田面は砂層が堆積して偶然検出された水田面である。この水田面は中世 II-1である。他のトレンチは本来この面に相当する水田面が存在していたはずであるが、砂層が上面に堆積しなかった事もあって分からなかった。II-2層上面の水田は中世 II-2である。

1) 中世 II-1 (挿図48、図版21-a b c)

層位は II-2層中で検出している。検出した遺構は水田である。東端に落込がある。

トレンチ全域が 1 枚の水田の中に入り畦が認められない。水田面の標高は溝1221より西側は5.98mから6.02mを測る。溝1221より東側の標高は5.94mから6.04mを測る。西側の遺構は南北方向の短く浅い溝である。溝は集中している。検出した溝の深さは 1～3 cm である。中央から東側の遺構は南北方向を示すやや深くて長い数条の溝である。中央東側の溝1221は他の溝より深い。溝の底面は足跡の凹凸が認



挿図50 2 A トレンチ II-2層上面 II-1層中 中世 II・III-1 遺構 平面図

められる。トレンチ東側の溝は底に足跡が認められるが西側の溝は底に足跡が認められない。

トレンチの西側の溝は埋土が灰白色系シルトである。溝は農耕具で耕した時に窪んだ痕と考えられる。遺構の性格は耕作痕と思われる。溝1191から溝1216が該当する。これらは牛による耕作痕とも考えられる。

東側で検出した溝は底が人や牛の足跡で凸凹している。溝の方向に平行した足跡が刻まれている。そして溝の形状も大きく見れば直線状であるが、細かく見ると岸の凹凸が極めて著しい。溝1217から1222がこの溝に該当する。溝の埋土は灰白色砂や黄灰色砂である。溝の中で溝1221が大きくて調査区の両端まで延びている。足跡は集中する箇所とほとんど認められない箇所がある。足跡は中央部南側に集中する。トレンチ東側は足跡が希薄になるが足跡は筋状に並んでいる。西側の足数は数少ない。

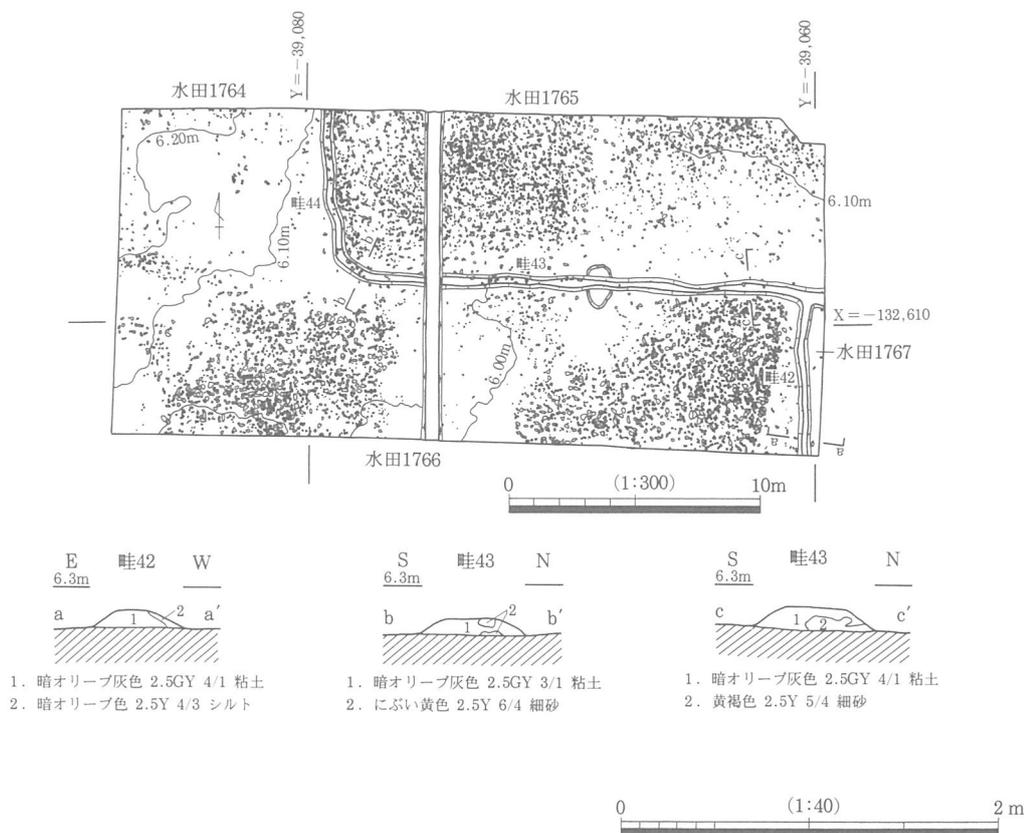
溝1221 (挿図48)

溝は深さが約6～9cmを測る。溝の底面には人や牛の足跡が数多く刻まれている。全体的に南北方向の直線を示すが、細かく見れば溝の岸の線の凹凸は著しい。溝の底部は凹凸が激しい。岸から粘土塊がブロック状に切り離されて溝の岸との間に砂が入っている箇所も見られる。牛が唐鋤を牽いていた痕跡とも考えられる。

2) 中世II-2 (挿図49、図版22-a c)

この遺構面はII-2層上面で水田と溝、土坑1174を検出した。

14条の溝が南北方向に間隔を開けて平行に検出している。溝の間隔は1.7m～2.3mを測り等間隔ではない。溝は子細に観察すると少し傾いて平行でない場合もある。溝の方向はほぼ南北を向いている。溝は途中で途切れたり、少し互い違いになっている場合がある。トレンチで検出した溝はお互い性格が似



挿図51 3 A トレンチ II-2層上面 中世II 遺構 平面・断面図

ている。溝は直線状を示す。溝の岸の線は細かく見れば凹凸が非常に激しい。溝の底に人や偶跡目類の足跡が多く刻まれている。検出した溝は下層のII-2層中の溝1221とよく似ている。従ってこのトレンチで検出した溝1175から溝1189はすべて同様な性格と考えられる。主要な溝は断面図を掲載している。溝1178から挿図59-26の青磁碗口縁部が出土している。足跡は数多く認められた。掲載したトレンチ平面図は足跡を図化していないが実際は無数の足跡が検出されている。

土坑1174 (挿図49)

土坑はトレンチ東端に溝が通るべき位置に掘られている。溝の延長上に土坑がある。溝と土坑は同時に存在したと考えられる。土坑1174は周囲に鋤溝が並んでいる中に一つだけ存在している。土坑は円形で埋土は灰オリープ粘質土、灰色粘質土である。土坑は深さが約17cmの浅い遺構ある。農耕に伴う何らかの機能を果たしていた跡と思われる。

(2) 2 A トレンチ (挿図50、図版22-b)

このトレンチは中央の土層観察用畦を挟んで東側と西側で調査を行った遺構面が違っている。東側はII-2層上面を調査し、中世IIの水田面である。西側は一面高い遺構面でII-1層中の中世III-1の水田面である。従って2つの遺構面の報告は分けて行う。II-1層中の中世III-1の記述は後の中世IIIで行う。

1) II-2層上面の遺構 (図版22-bの東側)

検出した遺構は水田と畦と溝である。水田上層は暗オリープ灰色粗砂が堆積している。水田面は東半部中央付近に南北方向の畦を1条検出した。

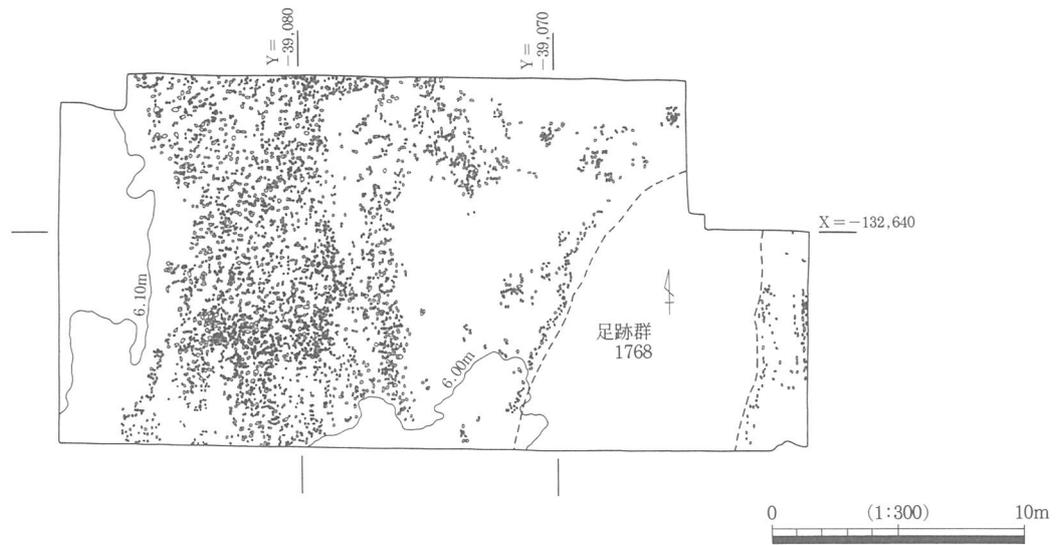
畦は周辺の条里制区画の方向と合致している。両側に畦と平行して溝が数条掘られている。溝相互の間隔や溝と畦の間隔は2.1m～2.9mを測る。トレンチ北東側に東西方向の溝が掘られている。北側から続く溝を東西溝が繋いでいる。畦の西側の水田1775の標高は6.15mから6.21mを測る。一方畦の東側の水田1776の標高は6.20mから6.21mを測る。東側の水田面は西側の水田面よりやや高い。両水田は畦49で区画されている(図版23-d)。畦は水田面から5～6cm高く盛り上がり台形状を示している。畦幅は約35cmから50cmである。畦には偶跡目類や人の足跡が数多く刻まれている。隣接している溝は深さ、形状、埋土が非常に良く似ている。溝45、溝46、溝47、溝48、溝50、溝51(図版22-b)は畦49と方向が一致してほぼ北を向いている。溝48の一部分は東西方向を向いている。検出した足跡は畦49の東側は溝の周囲に集中している。畦49の西側の足跡は東側より少ない。溝45、溝46の底部に足跡が相当数検出されている。

(3) 3 A トレンチ (挿図51、図版17-b c d e)

水田面は畦43によって南北に区切られて、南半分は畦42で東西に区切られている。北半部は屈曲した畦44で東西に分かれているようだ。

畦は3条検出した。東西方向に1本畦が通り、南北方向の畦は筋が通らずに互い違いに南北に延びている。畦の断面形状は3条とも台形である。畦42は畦43から南に伸びる。形態はほぼ直線である。畦の高さは4～8cmである。畦43は東西方向にほぼ直線状に延びている。畦44から西側が消失している。畦の高さは5～14cmである。畦43が畦44より西側に延長した部分を境として足跡の検出状況が違っている。畦43は西端で屈曲して北側の畦44に続く形で調査したが、本来の畦43は畦44より西側へ直線状に延びていたと考えられる。畦44は畦43に続いて屈曲した形に掘り出した。この形は誤りで本来は畦43にT字形に直交して繋がっていたと考えられる。畦の高さは5～9cmである(図版17-b c d)。

水田1764の標高は6.04mから6.21mを測る。水田1765は6.01mから6.09mを測る。水田1766は5.98m



挿図52 4 Aトレンチ II-2層上面 中世II 遺構 平面図

から6.14mを測る。北側の水田は南側水田より3～4 cm高い。

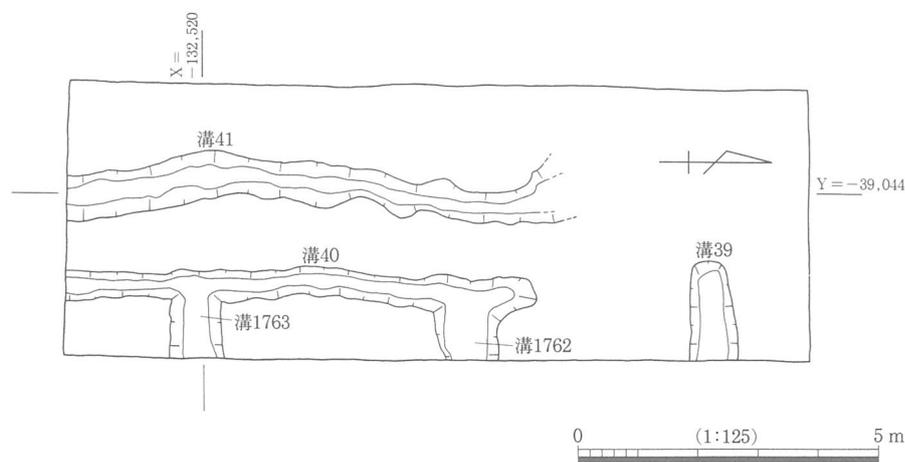
足跡は水田1765の中央付近で分布状況が変わる。水田の西側は足跡が集中している。水田の中央付近は足跡は非常に少ない。この付近に畦の有無を調べたが検出できなかった。水田1766の東側に足跡が集中している。水田1766中央付近は足跡が数少なくなっている。水田1766の西側に足跡が集中して検出している（図版17-e）。

(4) 4 A トレンチ（挿図52、図版24-a b c）

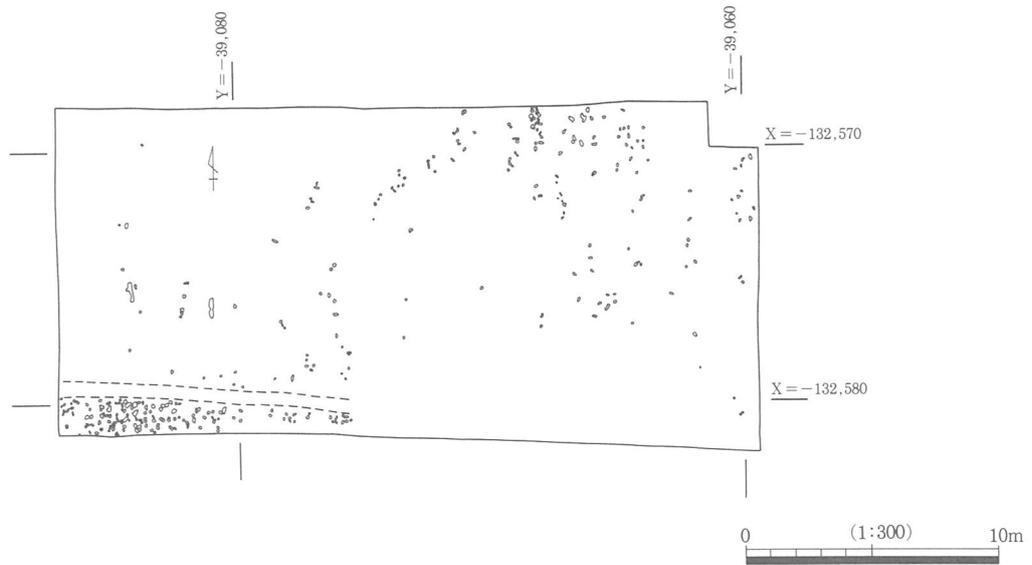
このトレンチは畦や溝が全く検出できなかった。検出したのは足跡である。足跡（図版24-c）はトレンチの中央より東側に足跡群1768で検出した。南から東へ曲線を描いていて条里制の方向と違っている。少し窪んでいた箇所に足跡が集中していた。足跡群の両端の線が明瞭に見えるので浅い窪みであったようだ。これを足跡群と称している。トレンチ西側には幅約10mで足跡が集中している箇所がある。足跡の分布は足跡が集中する箇所とほとんど足跡が無い箇所がある。

(5) 5 A トレンチ（挿図53、図版24-d）

このトレンチは東側から延びる溝を3条、溝39、溝1762、溝1763を検出した。これらの溝の内側から足跡は検出されなかった。南北方向に延びる溝を2条溝40、溝41を検出した。溝41は南から伸びて北端



挿図53 5 Aトレンチ II-2層上面 中世II 遺構 平面図



挿図54 2 Aトレンチ II-1層上面 中世III-2 遺構 平面図

が浅くなって消失している。溝40と溝41に挟まれた部分は足跡が多く認められる。2つの溝に挟まれた間は一見道状に見えるが道として使用されたのではなさそうだ。これらの溝の中で溝39、溝40、溝1762、溝1763は溝の底から足跡は全く見られない。一方溝41は溝の岸の線が不明瞭である。平面形も少し蛇行している。溝41は底面から多くの足跡が検出されている。溝41は先に述べた溝39、溝1762、溝1763と異なった性格を示している。溝41は自然流路的で洪水砂の流れの中心部分が削られ窪んで溝状になったと考えられる。先に述べた幾つかの溝39、溝40、溝1762、溝1763は掘り方も深く、壁面は急な傾斜を示している。これらの溝は人工的に掘削されているようだ。

このトレンチから足跡が数多く検出された。足跡は溝41の内側や溝41と溝40の間で多く検出している。また溝の間や水田面と思われる箇所から数多く検出している。

8 中世III-1、III-2

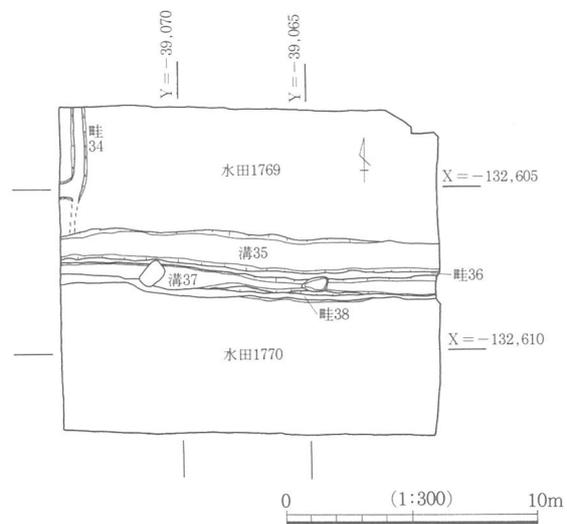
この時期は限られたトレンチで調査を実施した。調査は2 A、3 A、5 Aのトレンチで実施している。

各トレンチで遺構の検出状況に大きな違いがある。足跡と畦の痕跡だけのトレンチや、畦と溝を検出したトレンチ、溝が斜め方向に掘られているトレンチ、溝が数多く認められたトレンチなどがある。

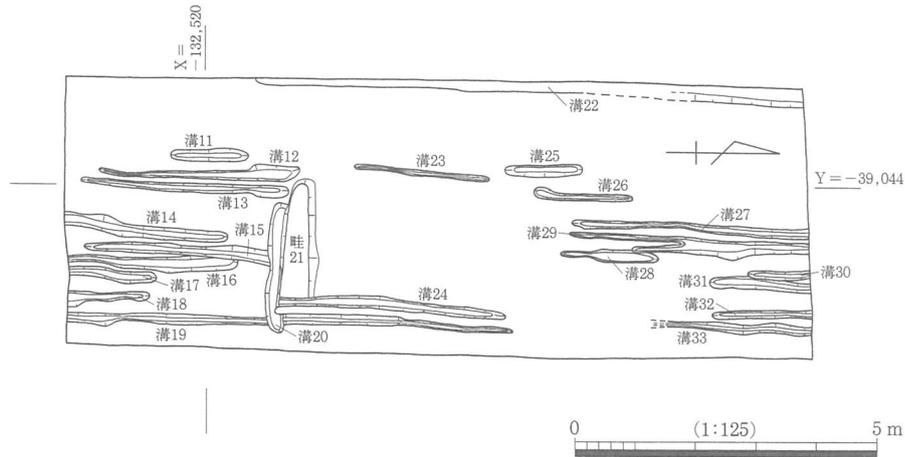
(1) 2 Aトレンチ

このトレンチではII-1層中の中世III-1の水田とII-1層上面の中世III-2の2枚の水田を調査した。この2つの遺構面の水田をこの項で報告する。

- 1) II-1層中の遺構 中世III-1 (挿図50の西側、図版22-b 西側)



挿図55 3 Aトレンチ II-1層上面 中世III-2 遺構 平面図



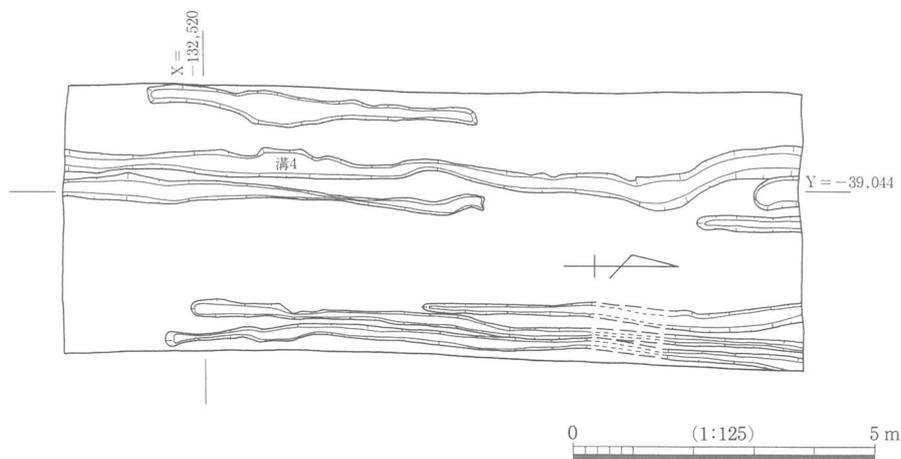
挿図56 5 Aトレンチ II-1層中 中世III-1 遺構 平面図

2 Aトレンチ中央より西側部分で検出した遺構面である。溝が1条検出されている他には足跡が多く認められている。遺構面の標高は6.27mから6.36mを測る。足跡は溝52と平行して集中している箇所がある。足跡も斜め方向に続いている。足跡群も条里制と違った方向を示している。この遺構面は水田なのか分からない。溝52は北西方向から南東方向に条里制の方向と違った傾いた角度で掘られている。溝の底部の高さはおおよそ6.27mを測る。溝底部には足跡が少し残っている。埋土はオリブ黄色砂質土で礫を含んでいる。溝は水路の機能を果たしていた可能性がある。

2) II-1上面の遺構 中世III-2 (挿図54、図版25-b c)

遺構面はII-1層上面で検出している。検出した遺構は溝と足跡と畦の痕跡である。足跡は検出した数が少なく散らばった状態である。その中で南西隅で検出した足跡は集中している。この足跡が集中した北側に带状に足跡が検出されない箇所がある。そして色調も緑灰色が濃い色調を示している。この部分は削られて失われた畦の跡と推測される。水田は南西隅に検出した畦の痕跡部分で区画されていたようである。しかし畦の痕跡も東側に延びる部分は検出できない。畦の痕跡は幅約60cmを測り、長さ約11.8m分検出している。畦の痕跡の南側に足跡が集中している。畦の痕跡は高まりが認められない。足跡は南西隅を除くと他には北東側に比較的集中している。足跡は南北方向に伸びる筋状に連続しているようだ。一方南西隅の足跡は不規則な方向と並びを示している。

(2) 3 Aトレンチ



挿図57 5 Aトレンチ II-1層上面 中世III-2 遺構 平面図

1) II-1層上面の遺構 中世III-2 (挿図55、図版25-a b)

3 A トレンチ東半分で検出した。東西方向の畦と溝、南北方向に畦を調査した。畦はトレンチ中央付近で東西方向の溝に挟まれて検出している。溝35に接して南側に溝37が平行に掘られている。溝35と溝37の間に畦36があり、溝37の南側に畦38がある。トレンチ中央に南北方向の畦34が伸びているが溝35の北側で西側に屈曲している。溝35と畦34に囲まれた水田1769と畦38の南側の水田1770がある。水田1769は標高6.50mから6.38mを測る。水田1770の標高は6.40mから6.47mを測る。畦34は幅約0.6mである。断面は台形状である。この畦はむしろ2つの溝の間の区切りで畦でないかも知れない。畦38は溝37の南側に1~2cm高くなっている。幅は狭くて広い箇所でも30cmを測る。溝35は東西方向に真っ直ぐである。溝底に足跡が並んでいる。溝37も東西方向に直線状に伸びている。溝の底部に砂層が堆積している。足跡は水田1769の北東側に集中している。水田の畦34に近接した所は足跡が見られない。足跡は南北方向に並んでいる。水田1770は足跡が全体的に散在している。その中で水田の南側の足跡は東西方向に並んでいる。2つの水田は耕した時の方向が東西と南北を示して異なっている。

(3) 5 A トレンチ

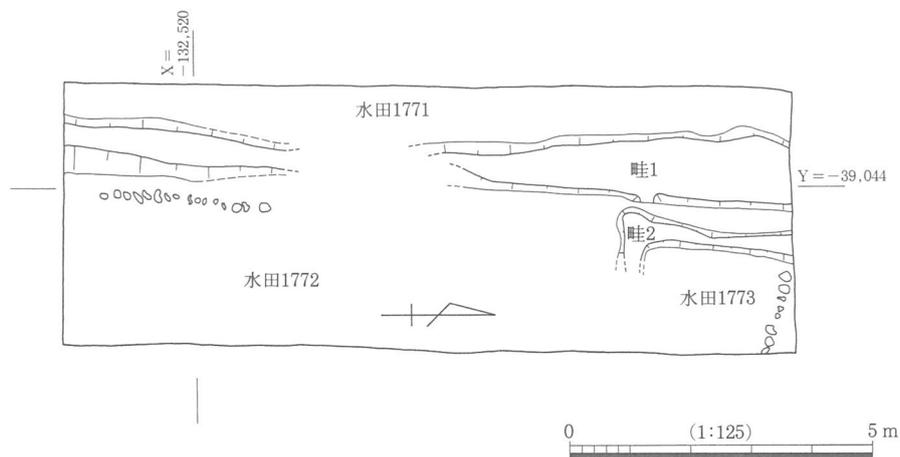
このトレンチではII-1層中の中世III-1遺構面とII-1層上面の中世III-2遺構面の2面を調査している。

1) II-1層中の遺構 中世III-1 (挿図56、図版24-d)

遺構面は東西方向の畦畔1条と南北方向の溝を検出している。畦21はトレンチ中央南側付近で検出した。東西方向に長さ約2m検出した。幅は60cmである。高さは約5cmである。しかしこの延長部分は検出できない。単なる高まりの可能性がある。溝は南北方向を示して蛇行しながら並んでいる。溝幅は10cmから30cmを測り、深さも5cm未満の浅い溝が多い。埋土は灰白色砂を示している。これらの溝は農耕具で耕した痕跡と思われる。幾つかの溝の底面は足跡が検出されている。足跡は溝の中や溝の間の部分で検出している。トレンチ西側には足跡がほとんど見られない。

2) II-1層上面の遺構 中世III-2 (挿図57、図版26-c)

この遺構面では南北方向の細い溝が数条検出された。溝4が南北方向にトレンチ全体を通して続いている。溝は大半が南北方向で途切れている。トレンチ東側の溝は細く、直線状である。西側の溝はやや太く蛇行している。東側の溝の幅は20~40cmを測り、深さは2~8cmを測る。西側の溝は溝幅20~60cmを測り少し太く、深さが4~12cmを測り東側の溝と比較して少し深い。足跡は溝の底面や溝の間の部分からわずかであるが検出している。



挿図58
5 A トレンチ
I層中 近世
遺構 平面図

9 近世

II層上層のI層は砂層堆積が急激に増加する。厚い砂層堆積の間に足跡によって窪んだ凹凸が認められる堆積層が幾つか認められる。このことはI層には水田面が数面存在して、水田が営まれていた事が断面から推測される。

近世の遺構面を調査したのは3Aトレンチと5Aトレンチである。

(1) 3Aトレンチ (図版26-c)

検出した遺構は畦である。東西方向に伸びている。

(2) 5Aトレンチ (挿図58、図版26-d)

畦を2本検出した。また鋤で掘り返した跡も検出した。このトレンチ西側に太い畦1が南北方向に通っている。畦1の北東側に畦2がある。畦2は北端から1.4m南下して東側に折れ曲がっている。畦1の西側に水田1771があり、畦1と畦2の東側に折れた部分に囲まれる中は水田1772である。また畦2に囲まれた北東側は水田1773である。このトレンチの畦は下層の中世水田の畦と比較して太く大きい。畦1はトレンチ中央で攪乱で切断されているが、南北に続く。畦1は畦幅の太い箇所が約1.3mを測り、細い部分は30cmを測る。高さは約6～8cmである。断面形状は台形状である。畦2は畦1より細い。畦の幅は約15cm～25cmである。畦の高さは1～3cmである。足跡は水田1771に丸い偶蹄目類の足跡が散在している。水田1772の中に畦1に沿った南端付近で、鋤で掘り返して三角形に窪んだ跡が南北方向に1列に並んでいる。また水田1773の北端にも鋤跡が東西方向に1列並んでいる。

第4節 出土した遺物 (1996年度)

1996年度調査で出土した遺物は、遺物収納用コンテナ(39cm×60cm×15cm)で30箱と少ない。その大半が弥生時代中期の土器である。また遺構内出土遺物は土坑1171以外では出土量が少なく、小破片が多い。報告は事実報告を中心とした。弥生土器の編年・形態分類は寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年』近畿編II(1990年、木耳社)掲載の森田克行「摂津地域」に従った。また本文中の遺物番号は挿図番号で表記することとし、遺物の説明も挿図の掲載番号順に従って行うこととした。

出土遺物は弥生時代中期が中心であるが、古墳時代、奈良・平安時代・中世の遺物も出土している。遺物は遺構出土遺物から述べ、次に各層出土遺物について触れている。各層出土遺物はIV層、III層、II層の中で1Aトレンチから順に配列している。しかし少量の新しい時代の遺構出土遺物はそれぞれのトレンチの遺構内出土遺物に組み込んでいる。従って弥生時代遺物が大半をしめる遺物挿図の中にわずかに新しい時代の遺物が混じった形で報告している事をおことわりしておく。

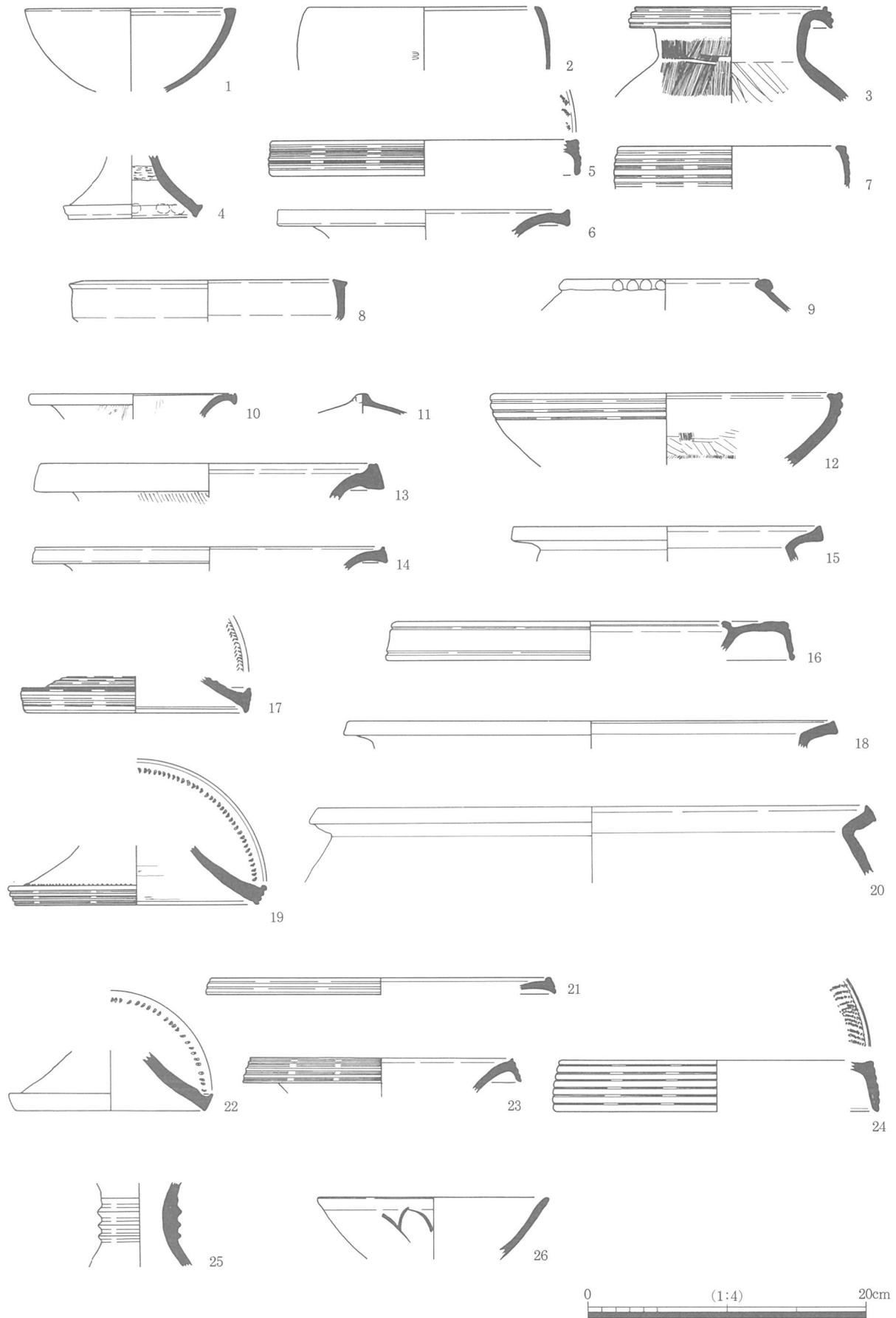
1 土器

弥生土器では中期IV様式の土器が大半である。この他V様式かと思われる土器がある。古墳時代では布留式土器、須恵器、土師器がある。以後奈良時代、平安時代の須恵器、土師器があり、鎌倉室町時代では瓦器碗、瓦質土器、陶磁器などが出土している。

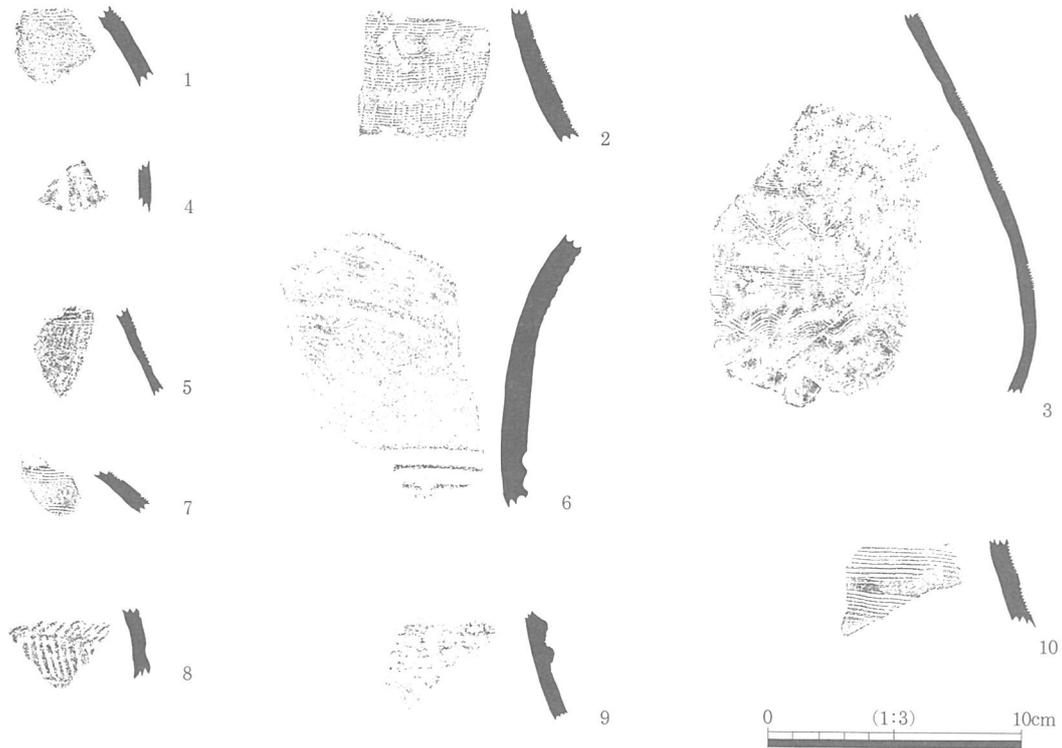
(1) 遺構出土遺物

1) 1Aトレンチ 遺構出土遺物 (挿図59～60)

土坑1263 (挿図59-1～7、60-2、3)



挿図59 1Aトレンチ 土坑 溝 ピット出土 弥生土器 青磁 実測図



挿図60 1Aトレンチ 土坑 溝 ピット出土 各層 弥生土器 実測図

59-1の鉢は口縁部内側が少し厚く突出している。口縁部上端は内側に少し傾斜している。59-2は無頸壺か鉢と思われる。外面に文様はない。壺59-3の壺は口縁部が鋭く屈曲して外側に広がっている。傾斜した口縁部に3条の凹線を施している。59-5の壺は口縁部が垂下して5条の凹線を施している。口縁部上面に扇状文を施している。59-6の壺は口縁端部を上方に少し摘み上げている。59-7は無頸壺口縁部か鉢口縁部である。口縁部外面に凹線を5条施している。60-2は壺体部の拓本である。簾状文が認められる資料である。この簾状文も整美なものではなくて、間隔や傾きにばらつきが認められる。今回簾状文資料の出土は非常に数少ない。60-3は壺体部である。上部から直線文と波状文が交互に現れる。体部中位に施された波状文は波形の軸が左側に傾いているが最下段の波状文は正弦波で描かれている。土坑の出土資料も数量が限られて、時期比定が困難であるが、敢えて言えばⅣ-3様式であろうか。

土坑1512 (挿図59-8・9)

図59-8は鉢か高杯の口縁部である。口縁端部は外側に少し傾斜して、外側と内側に摘み出している。59-9は無頸壺の口縁部である。口縁部に1条の突帯を巡らして円形浮文を貼りつけている。

溝1258 (挿図59-10~20 60-6、7)

壺、鉢、壺蓋、甕、高杯等が出土している。壺はすべて無文である。59-10の壺は口縁端部が水平より少し下側まで屈曲している。59-11は蓋で小さな摘み部分である。59-12は口縁部から体部へ内側に屈曲してゆく坏部の浅い高杯である。口縁部外面に凹線文を3条施している。口縁部上端面は少し窪んで、内側に少し摘み出している。59-13は壺の口縁部である。屈曲した口縁端部は上方に厚く盛り上がる。端面は外側に少し傾斜している。59-14は壺の口縁部で屈曲した口縁部が外側に伸びている。端面は凹線にならないが、ナデによる窪みが認められる。59-15は甕の口縁部である。中型甕で口縁端部を上方に少し摘んでいる。59-16は高杯の口縁部である。口縁端部は垂下する。垂下した外端面は外面の上下端にそれぞれ1条の凹線を施している。鉢部の内側上端にある突帯は内側に少し傾斜している。59-

-17は高杯か或いは脚付き鉢の脚の端部である。下端部は上下に摘み出している。端部にはナデによる浅い凹線が認められる。端部を摘み出した脚裾部との間の窪んだ位置に刺突による羽状文を施している。この上部に凹線文を3条施している。59-19は高杯の脚端部である。端部に端面を作りここに3条の凹線文を施している。端部と裾部の間の窪みに内側から斜め方向に刺した刺突文を間隔を詰めて施している。59-18は甕の口縁部である。直径30cm以上を測る大型甕になる。口縁端部は端面を作り上下に心持ち摘んでいる。59-20も大型甕である。口縁部は少し内湾している。口縁端部は上方に摘みあげている。60-6は壺頸部の拓本である。下方に幅広い凹線が施されている。60-7は刺突文を方向を違えて2列に施し、羽状文を作る。これらの土器群は時期比定は難しいが敢えて言えばⅣ-3様式であろう。

溝1258付近出土遺物（挿図59-21～24）

溝1258検出時に溝の周辺から土器片が集中して出土した。これらの土器をここに取りまとめている。59-21は壺の口縁部である。口径は大きい器壁は薄い。口縁端部は上方に少し摘み、下部が外側に出た傾斜を示している。口縁端部に2条の凹線を施している。59-22は脚端部である。脚端部と裾部の間の窪みに59-19と同様刺突文を施している。59-23は壺の口縁部である。口縁端部は下方に垂下して下部が外側に出た傾斜を示している。垂下した端面に4条の凹線文を施している。59-24は壺の口縁部である。口縁端部は下方に長く垂下してこの部分に6条の凹線文を施している。また口縁部上面に刺突による櫛描列点文を並べている。

ピット1483（挿図59-25）

59-25は短頸壺の頸部である。断面三角形突帯を4条貼りつけている。体部の形状、口縁部の形状は分からない。東奈良遺跡の今回の調査ではこのような断面三角形突帯を持つ資料は数少なく10個体に満たない数量である。いずれの資料の色調も褐色で胎土も砂粒質である。今回出土した他の遺物と比較しても胎土・色調とも全く異質である。恐らく搬入品と考えられる。

1 A トレンチ遺構出土遺物 拓本

ピット1298（挿図60-1）

60-1は直線文と波状文を描いている。

ピット1327（挿図60-4）

60-4は壺の体部である。櫛描刺突文で少し引っ張った簾状文状になっている。

ピット1494（挿図60-5）

60-5は直線文と波状文である。

2) 2 A トレンチ遺構出土遺物（挿図61～70）

ピット出土遺物

ピット477（挿図61-1）

壺の蓋である。摘みはしっかりとして、上部中央は窪んでいる。

ピット553（挿図61-2）

61-2は壺の口縁部である。口縁部は上下に少し摘み、垂直近い端面を作る。端面に波状文を描いている。また口縁上部にも同じく波状文を描いている。体部上半は直線文が見られる。

ピット449（挿図61-3、4）

61-3は壺の口縁部である。口縁端部は上下に少し摘み出している。口縁端面は下方が少し外側に出るような傾斜がある。端面には凹線文を施している。口縁上部には波状文を描いている。波形は波の軸

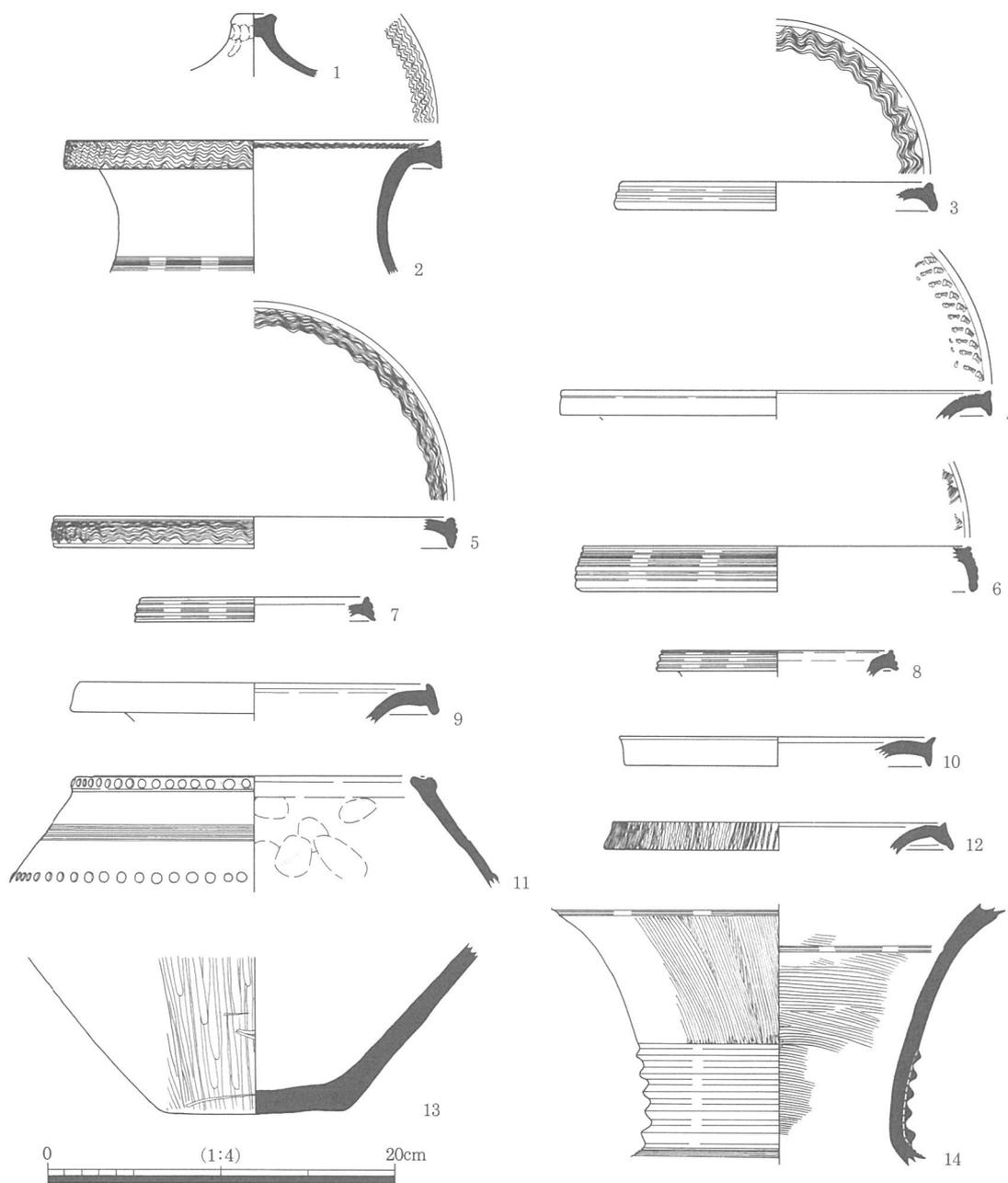
が少し傾いている。61-4も壺の口縁部である。口縁端部を上下に少し摘み出している。端部外面に強くナデたらしい痕が1条浅い窪みを作っている。口縁上部に扇状文か或いは刺突文とも言えるような文様が垂線方向から少し角度を振って描いている。外側の方が少しだけ刺突の幅が広い。施文原体に欠けた箇所があるために文様が2つに別れている。

ピット797（挿図61-5）

61-5は壺の口縁部である。口縁端部を上下に少し延ばしている。端部は少し中央が膨らんでいる。先に2条の凹線を描き、この上に重ねて上下2条の波状文を描いている。口縁上部に波状文を2条描いている。

ピット821（挿図61-6）

61-6は口縁端部は下方に長く垂下している。口縁端部外面に6条の凹線を施している。口縁部上面



挿図61 2 A トレンチ ピット出土 弥生土器 壺 実測図

に扇状文を施している。この扇状文は少し広がった形態を示している。

ピット607（挿図61-7）

61-7は壺の口縁部である。口縁端部を上下に摘み出している。ここに3条の凹線文を施している。

ピット1070（挿図61-8）

壺の口縁部で端面に3条の凹線を施している。

ピット305（挿図61-9）

61-9は壺の口縁部である。口縁端部を上下に拡張している。端部外面は中央がナデの為か少し窪んでいる。端面は無文である。

ピット660（挿図61-10）

61-10は壺の口縁部であるが口縁端部を上下に鋭く摘み出している。端面は無文である。

ピット79（挿図61-11）

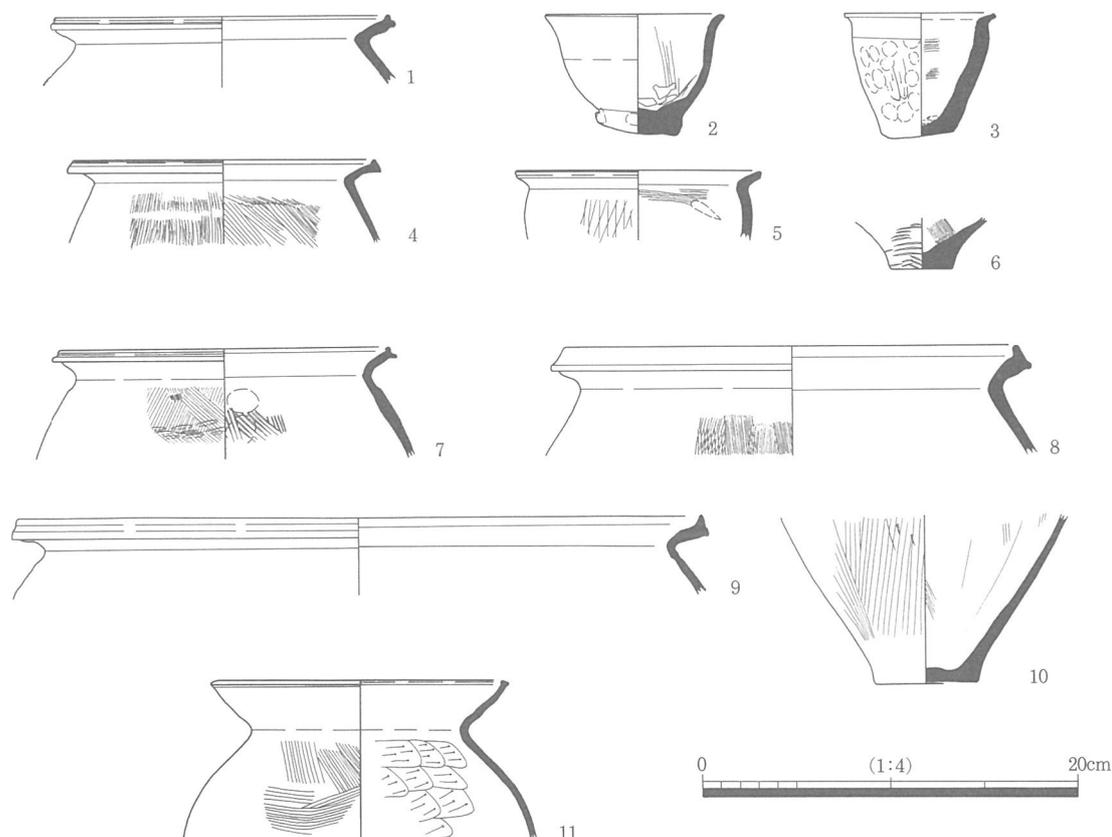
61-11は無頸壺の口縁部である。口縁部に1条の突帯を巡らして、この上に円形浮文を貼りつけている。体部上半に直線文、竹管文を描いている。

ピット243（挿図61-12）

61-12は壺の口縁部で上下に拡張しているが、下方に大きく延びている。口縁端部外面に縦方向の刻み目文を櫛状工具で施している。

ピット1172（挿図61-13）

大型壺の底部である。底部外面に丁寧なへら磨きを施している。



挿図62 2 A トレンチ ピット出土 弥生土器 土師器 甕 実測図

ピット417 (挿図61-14)

61-14は壺の頸部である。下部に三角形突帯を5条貼りつけている。土器の色調が明るい褐色、胎土も砂粒質で焼成も少し弱い。59-25と同じく搬入品のようなものである。

ピット80 (挿図62-1)

62-1は小形甕で、口縁端部を上方に摘み上げている。端面に1条凹線を入れている。口縁部はくの字状に鋭く屈曲している。

ピット1070 (挿図62-2、図版27-c)

62-2はミニチュアの甕である。口縁部が外側に曲線を描いて屈曲している。底部が突出している。

ピット232 (挿図62-3)

62-3もミニチュアの甕である。口縁部が外側に短く屈曲している。

ピット399 (挿図62-4)

62-4は小形甕で、口縁部内側を上方に摘み上げている。

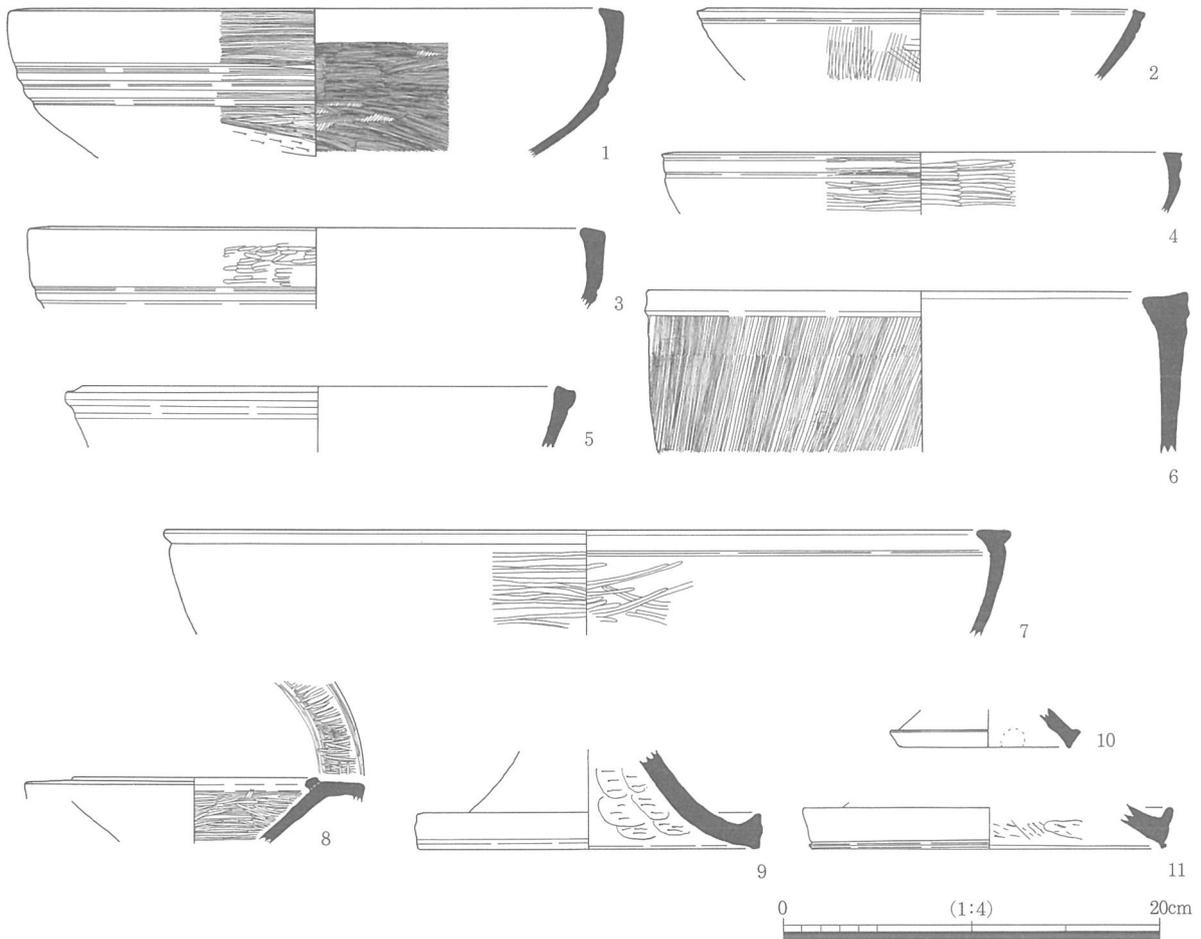
ピット460 (挿図62-5)

62-5は小形甕の口縁部であるが、口縁端部に面を作らず丸く収める。

ピット1080 (挿図62-7)

62-7は小形甕の口縁部である。口縁端部は上方に摘み上げて、端面に1条の凹線文を施している。

ピット913 (挿図62-8)



挿図63 2 A トレンチ ピット出土 弥生土器 鉢 高杯 実測図

62-8は中型甕で、口縁端部を内側上方に丸く摘み上げている。

ピット498（挿図62-9）

62-9は大型甕であるが、器壁が薄い。口縁部は上方に摘み上げている。口縁端面はナデのため中央が少し窪んでいる。

ピット334（挿図63-1）

63-1は高杯の口縁部である。口縁端部は少し外側に傾いた平坦面を作っている。体部外面には3条の凹線文を施している。体部外面の底部付近はヘラケズリを施している。

ピット787（挿図63-2）

63-2は高杯の口縁部である。口縁部は外側に大きく開いた形状である。口縁上端部は中央が少し窪んでいる。口縁端部外面上部に1条の凹線文を施している。

ピット331（挿図63-3）

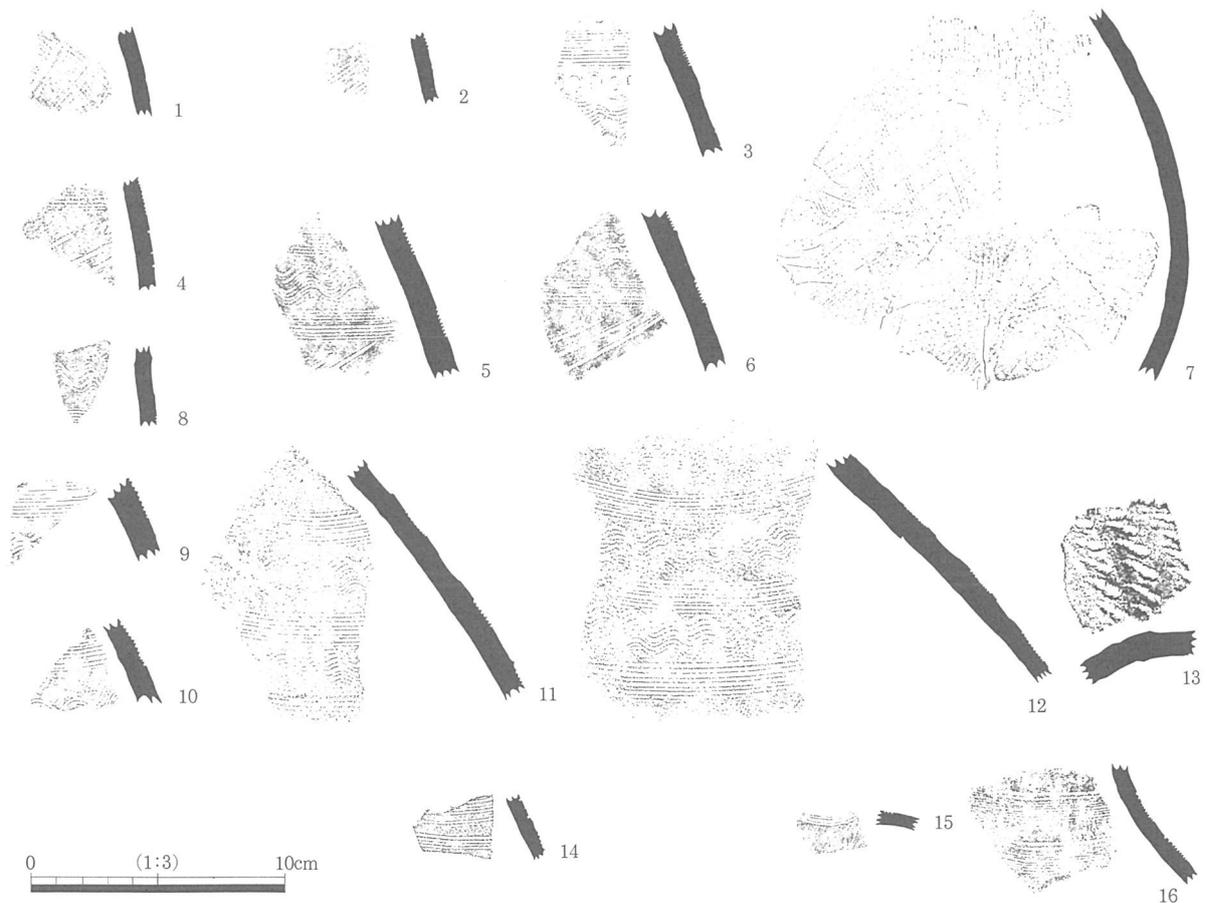
63-3は鉢か高杯の口縁部である。口縁部は厚い造りで内側に少し突出している。口縁部から体部への転換点に2条の凹線文を施している。

ピット641（挿図63-4）

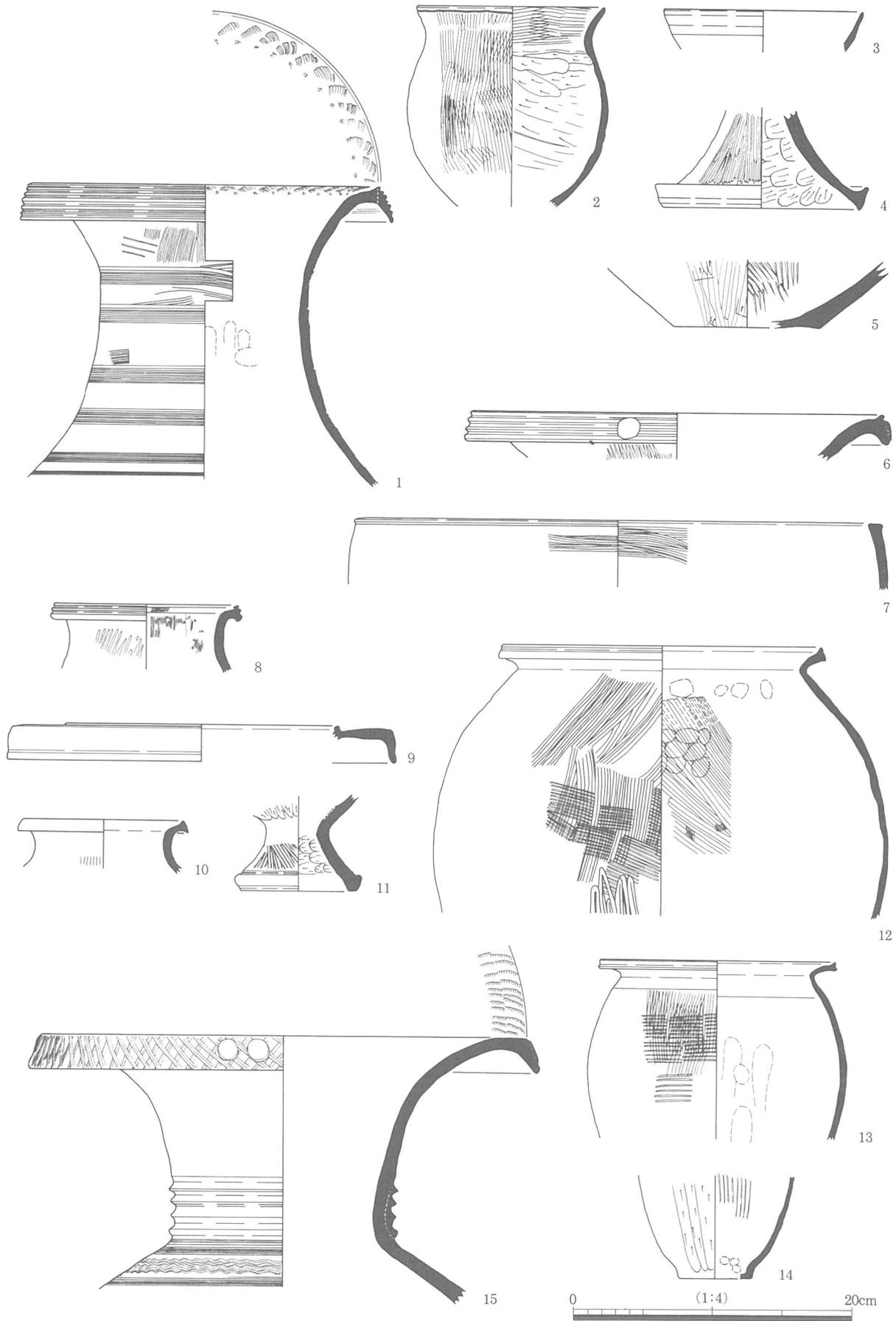
63-4は高杯の坏部である。口縁端部は内外に少し摘み出している。口縁端部外面に2条の凹線文を施している。

ピット87（挿図63-5）

63-5は高杯の坏部である。口縁端部は外側に傾斜している。端部は1条の突帯を巡らし、この下が



挿図64 2 A トレンチ ピット出土 弥生土器 実測図



挿図65 2 Aトレンチ 土坑 溝 ピット出土 弥生土器 土師器 黒色土器 実測図

少しナデのため窪んでいる。

ピット567（挿図63-6）

63-6は鉢の口縁部である。厚い器壁で、口縁上部は心持ち内側に傾斜して、内側に少し突出している。口縁端部外側に低い突帯を貼り、この下に1条の凹線がある。焼成も非常に良好で、硬く焼けている。

ピット423（挿図63-7）

63-7は鉢の口縁部である。口縁端部は内外に横方向に摘み出している。口縁部外面に1条の凹線が施されている。口径の大きなものである。

ピット1046（挿図63-8）

63-8は高杯の坏部である。垂下部は欠損している。水平な口縁部にはヘラミガキを行っている。坏部内面も緻密なヘラミガキである。

63-9、63-10、63-11は脚端部である。

2 A トレンチ ピット出土遺物 拓本

ピット1080（挿図64-1）

64-1は斜格子文である。左上右下方向の格子が後に描かれている。

ピット769（挿図64-2）

64-2は斜格子文である。拓本で右上左下方向の格子が後に施されている。

ピット711（挿図64-3）

64-3は直線文と波状文を施している。その間に竹管文を横方向に並べている。この配列が2列ある。このような配列の文様は非常に少ない。

ピット618（挿図64-4）

64-4は直線文と下部に斜線文が見えている。この斜線文も非常に数少ない。この斜線はヘラ状工具で描いているようである。

ピット600（挿図64-5）

64-5も斜線文が施されている。その上部に波状文、直線文が施されている。

ピット618（挿図64-6）

64-6も斜線文はやや間隔が狭い。この上に直線文、波状文が施されている。

ピット748（挿図64-7 図版41-b）

64-7は流水文である。横方向の直線文を描いた上に縦方向の流水文を描いている。その下に斜格子文を描き、その下は何の施文も認められない。

64-8、64-9、64-10、64-11、64-12は波状文と直線文の組み合わせ資料である。波状文も波高や波長、波の軸の傾斜など様々な要素で微妙に違った波形を示している。

ピット813（挿図64-13）

64-13壺の口縁部である。扇状文を3列施している。

ピット1070出土の64-14、ピット1015出土の64-15、ピット779出土の64-16は直線文の例である。

ピット258（挿図65-1）

65-1は壺である。太い頸部から口縁部に向かって外反し、口縁端部は下方が少し外側に出た傾斜を示している。ここに6条の凹線を施している。体部は頸部の上部から直線文を間隔を開けて施している。器壁は薄く焼成も良い。

2 A トレンチ 土坑、溝出土遺物

溝374 (挿図65-3, 4, 5)

65-4は高杯か鉢の脚部である。脚柱部から曲線を描いて脚端部に下る。外面にヘラミガキを施している。

土坑379 (挿図65-6・7)

65-6は壺で頸部から斜め上方に延びて口縁部に至る。口縁端部は上方に少し摘み、下方に伸ばしている。口縁端部外側に3条の凹線を施している。65-7は鉢の口縁部である。口縁端部は少し丸みをもっている。口縁端部の膨らみの下に1条の窪みが見られる。

土坑588 (挿図65-8~11)

65-8は壺で、口縁部は端部に近づくと鋭く外側に屈曲している。口縁端部は上下に伸ばし2条の凹線を施している。65-10は同じように大きく頸部上端で屈曲している。口縁端部外面に施文は見られない。65-9の高杯は水平口縁を持ち、端部は大きく垂下して下部に1条の凹線を施している。65-11の脚部は短い端面を作っている。脚部外面に荒いハケメを施している。

土坑900 (挿図65-12~14)

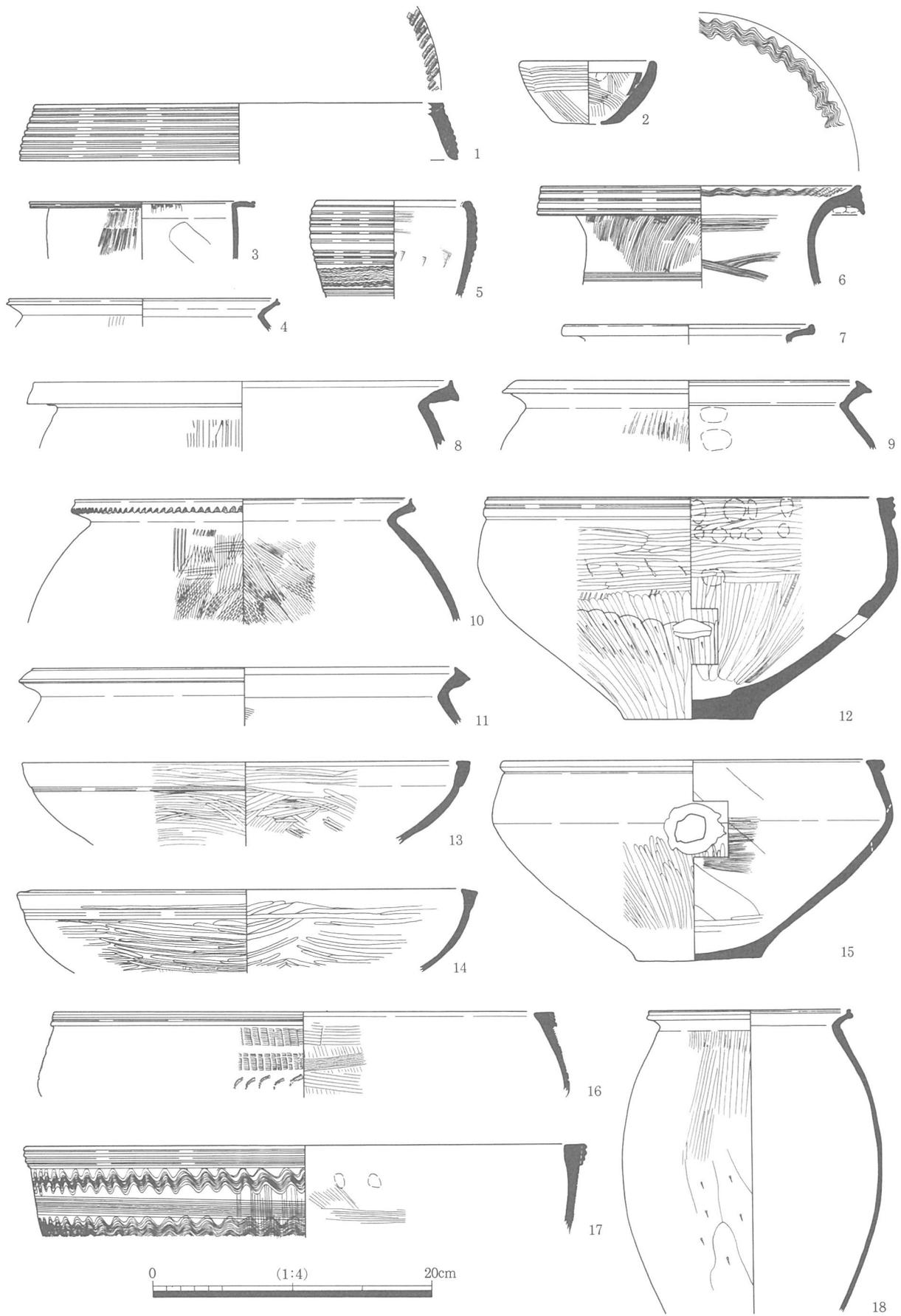
65-12は中型甕で口縁部は上方に少し摘み上げている。口縁部はくの字状に外反する。体部は胴が張り出した形態である。65-13は小形甕である。口縁端部を上方に摘み上げて外面に垂直な端面を作っている。65-14は甕底部である。この土器の底部は非常に薄く体部の器壁の厚さのまま続いている。

土坑903 (挿図65-15)

65-15は壺である。口縁端部は斜め外方向に垂下している。この外側端面に斜格子文を施して、円形浮文を2個貼りつけている。口縁部上部に櫛状工具による刺突文を2列施している。頸部に断面三角形突帯を貼りつけている。体部の上半部に直線文、波状文、直線文を施している。器壁が厚く、胎土は精良で色調が淡赤褐色を示して他の東奈良出土土器と異なっている。搬入品の可能性がある。

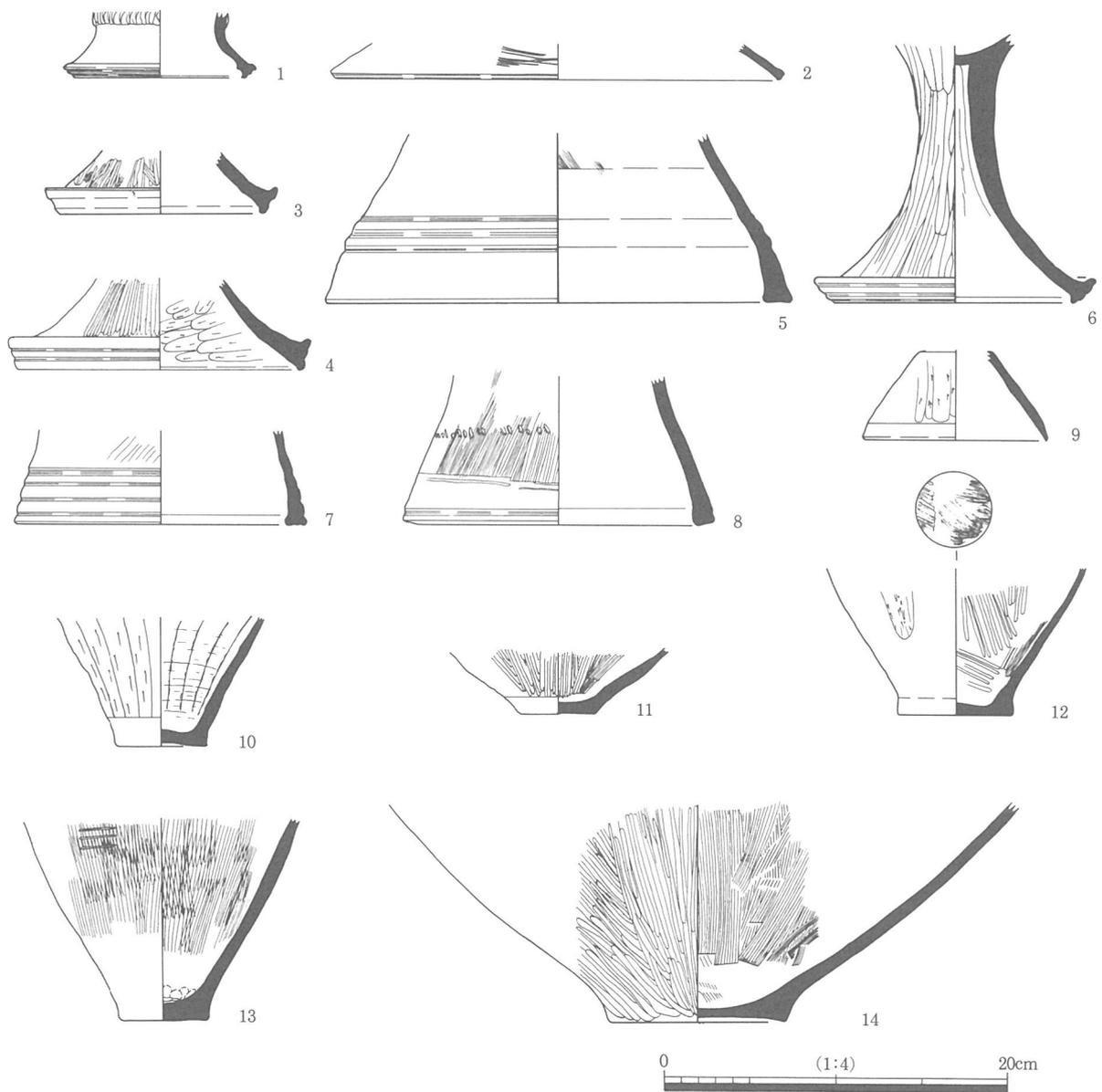
土坑1171 (挿図66・67)

この土坑は今回報告する中で最も多量の土器を出土した。良好な一括資料である。66-1は壺口縁部で口縁端部は下方に垂下している。端面は下部が外側に出た傾斜を示して、8条の凹線を施している。また口縁部上面に扇状文に似た櫛描文を口縁端に沿って描いている。66-2はミニチュアの鉢である。底部には焼成前に穴が開けられている。66-5は細頸壺の口縁部である。口縁上部に9条の凹線を描いている。凹線の下に波状文を描いている。66-6は壺の口縁部で、口縁端部外面に3条の凹線、端部上面に波状文を描いている。66-3は小形甕である。口縁部が体部から折れ曲がり、水平方向に伸びる。口縁端部を上方に摘み上げている。66-4は小型甕の口縁である。口縁端部を上方に摘み上げている。東奈良遺跡出土の小形甕では口縁端部を上方に摘み上げる形態が大半を占めている。66-7も小形甕であるが口縁端部を上方に摘んでいるが丸みを帯びている。66-8,9,10,11は中型、および大型甕である。これらの甕は上下に少し摘み出して端面を作る。この口縁端部の形状も大きく傾斜するもの、垂直に近いものなどさまざまな種類がある。66-10は口縁部端面下部に刻み目を施している。66-12,15は鉢で、口縁端部に1条の突帯を巡らしている。66-12は口縁端部に凹線を施こし、体部中位に焼成後の穿孔がある。66-15も焼成後の穿孔を持っている。66-13,14は高杯坏部と思われる。口縁部が厚く作られて、1条の凹線を口縁部から少し下がった位置に施している。66-16は鉢で口縁部と体部が区別できる形態である。口縁部に突帯を巡らして、この下に2条の簾状文と1条の扇状文を描いている。66-17の鉢は

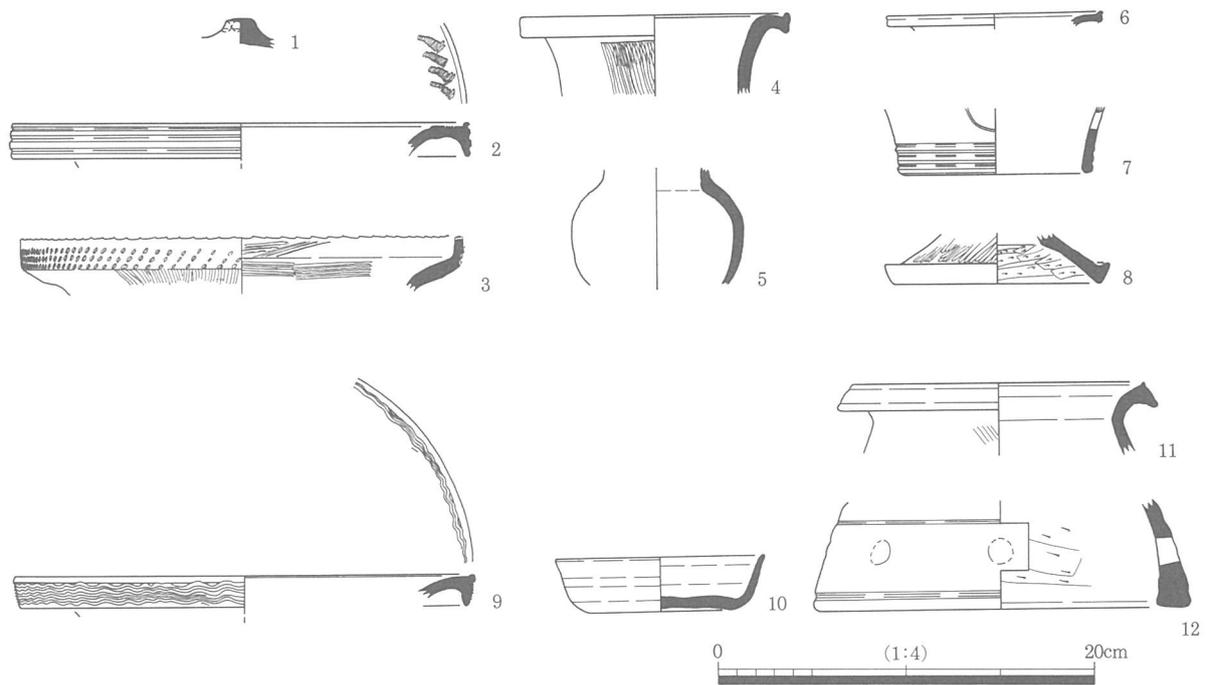


挿図66 2 A トレンチ 土坑1171出土 弥生土器 実測図(1)

口縁部が垂直に立った形態で、口縁部に1条の突帯を巡らして、この上に凹線を3条巡らしている。体部には装飾が施されて、波状文、直線文、波状文を描いている。67-6は高杯の脚部で、裾部に端面を造り3条の凹線を施している。脚部は曲線状に裾部へ広がっている。67-1は高杯の裾部である。脚部中に指頭ひねり圧痕文突帯を持っている。脚端部には端面を造り凹線を施している。67-2は裾部が大きく広がる。高杯や鉢の脚部と考えるより、蓋の端部の可能性もある。67-3,4の高杯は外面に脚端部を折り返して端面を作っている。67-5,7,8は器台の脚部である。67-5では凹線が外面に3条施されている。また67-8の器台では下端部に1条凹線が認められる。67-7も下端部付近に凹線が4条認められる。67-9は小型台付き壺の脚部である。脚端部は下方に摘んでいる。67-10,12,13は小形甕の底部である。67-11,14は壺底部である。これらの資料から推測すると土坑1171から出土した土器は大半は摂津Ⅳ-3様式を示して、一部分摂津Ⅳ-2様式が少し入っていると理解される。これらの土器の中には搬入土器が数少ないのが特徴である。



挿図67 2 A トレンチ 土坑1171出土 弥生土器 実測図(2)



挿図68 2 A トレンチ 溝781、823、824、825出土 弥生土器 須恵器 実測図

溝823 (挿図68-1~8)

68-1は蓋である。摘みも小さい。68-2は壺の口縁部で端部は上下に拡張している。端部上面に扇状文を描いている。また外側端面に3条の凹線を施している。68-3は近江地方から搬入された甕口縁部である。口縁部が受口状に作られて、ここに列点文を施している。68-7は台付き鉢の脚部と思われる。

溝824 (挿図68-9)

壺が1点出土している。68-9で図示した。口縁部外面に波状文を描いているが、口縁端部上端が少し膨らんでいる。また口縁部上部にも波状文を描いている。

溝825 (挿図68-11, 12)

68-11は壺の口縁部である。口縁端部は無文である。68-12は台付き鉢脚部は内湾した形態で、下端と少し上部に2条の凹線を描いているが、退化が著しい。下端から3~4cmの所に円形の孔が開けられている。下端部は非常に厚い造りである。

土坑781 (挿図68-10)

68-10は須恵器坏身である。V層上面の遺構からの出土で、7世紀後半から8世紀前半のものである。

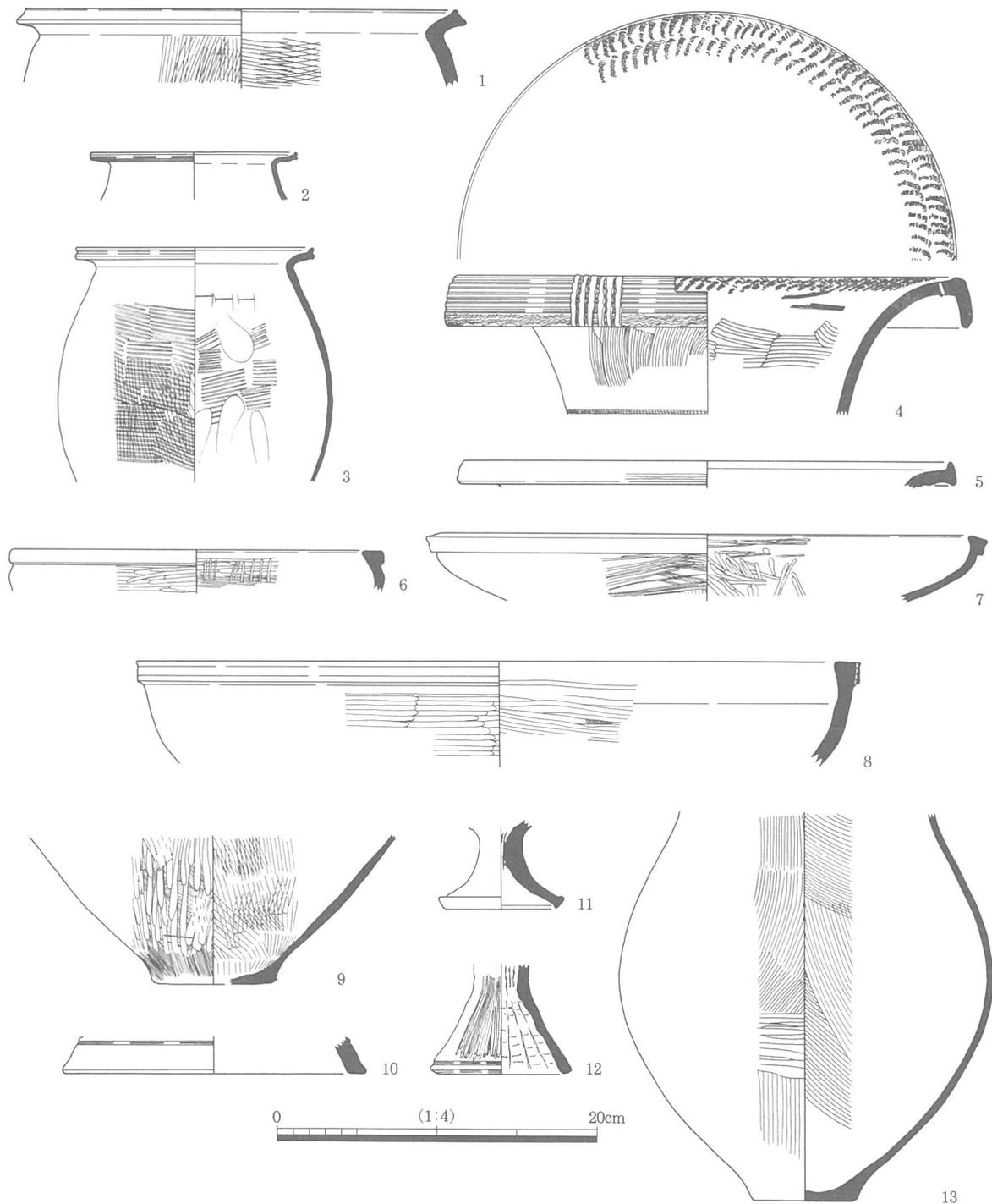
土坑968 (挿図69-1~13)

土坑は比較的多くの土器が出土している。69-4は広口壺で、口縁部は下方に大きく垂下している。端部に凹線が4条あり、凹線の下部に波状文も施されている。凹線の上に棒状浮文を5本1単位で貼りつけている。口縁部上面に扇状文を2列描いている。口縁端部の少し内側に小さな孔が3つ開けられている。破片の体部の下端に刺突文か列点文らしい文様が見える。69-13は壺の底部で胴長の形態で底部が突出している。69-2,3は小形甕で口縁端部を上方に摘み上げている。69-3は外側に1条の沈線を施している。体部外面に叩き目の痕が見えている。69-6,7,8は高杯の口縁部で口縁端部外側に突帯を貼りつけている。体部外面に沈線が無い。69-11は高杯の脚部、69-12は脚部端に折り返しがない。69-10は器台脚部で凹線が1条見えている。この遺構出土遺物は全体的に文様が退化して69-4以外は新しい

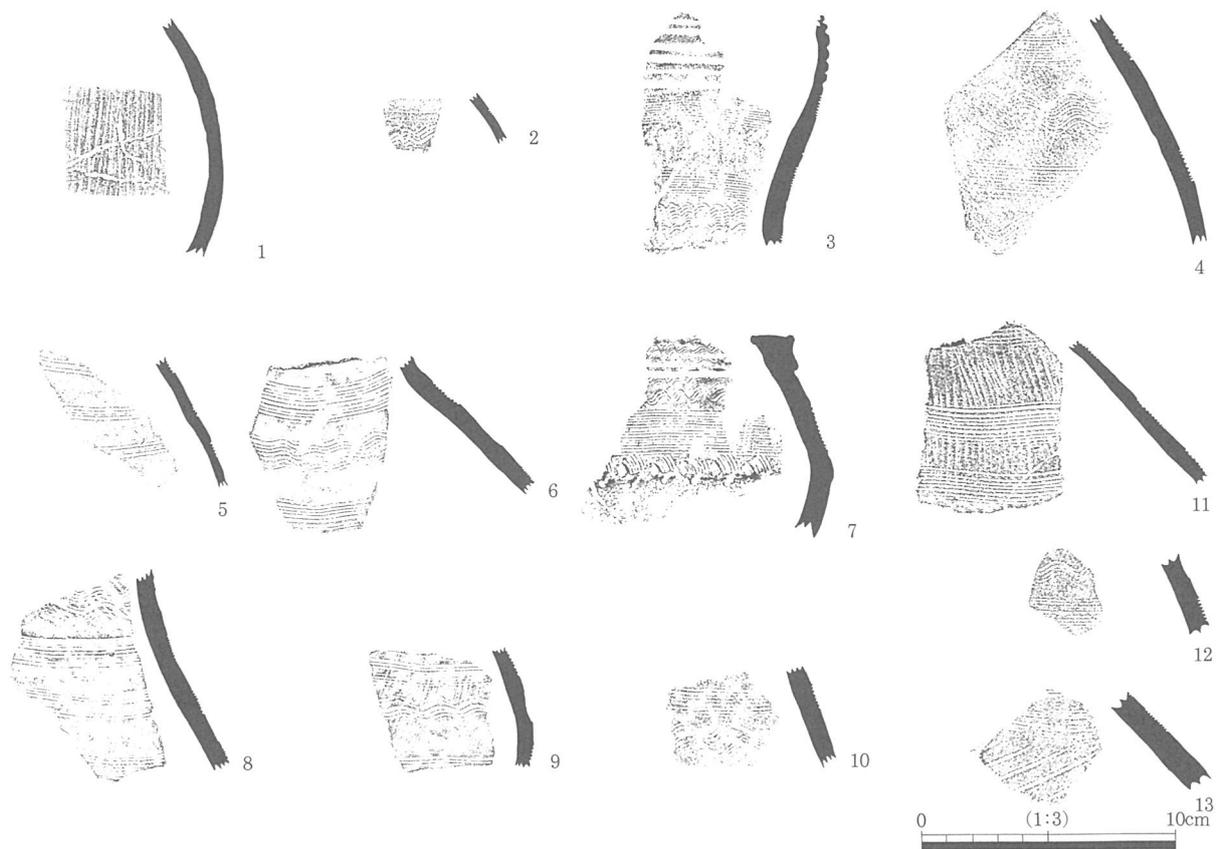
様相を示している。69-4の壺も古い時期のようだが摂津Ⅳ-3様式期まで残っている。全体的に摂津Ⅳ-3様式の時期と考えたい。

2 A トレンチ 遺構出土遺物 拓本（挿図70～73）

70-1は壺体部に描かれた絵画である。割れ目に重なってわかりにくいですが、蛇行した線を描いている。70-3は細頸壺の口縁部である。口縁端部に凹線文を施して、この下に直線文、波形が片寄った波状文、直線文、円弧を描いたような波状文、列点文があり、ほとんど類例を見ない資料である。他には波状文、直線文、扇状文、斜線文がある。70-7は鉢の口縁部である。口縁端部に突帯を巡らして、ここに波状

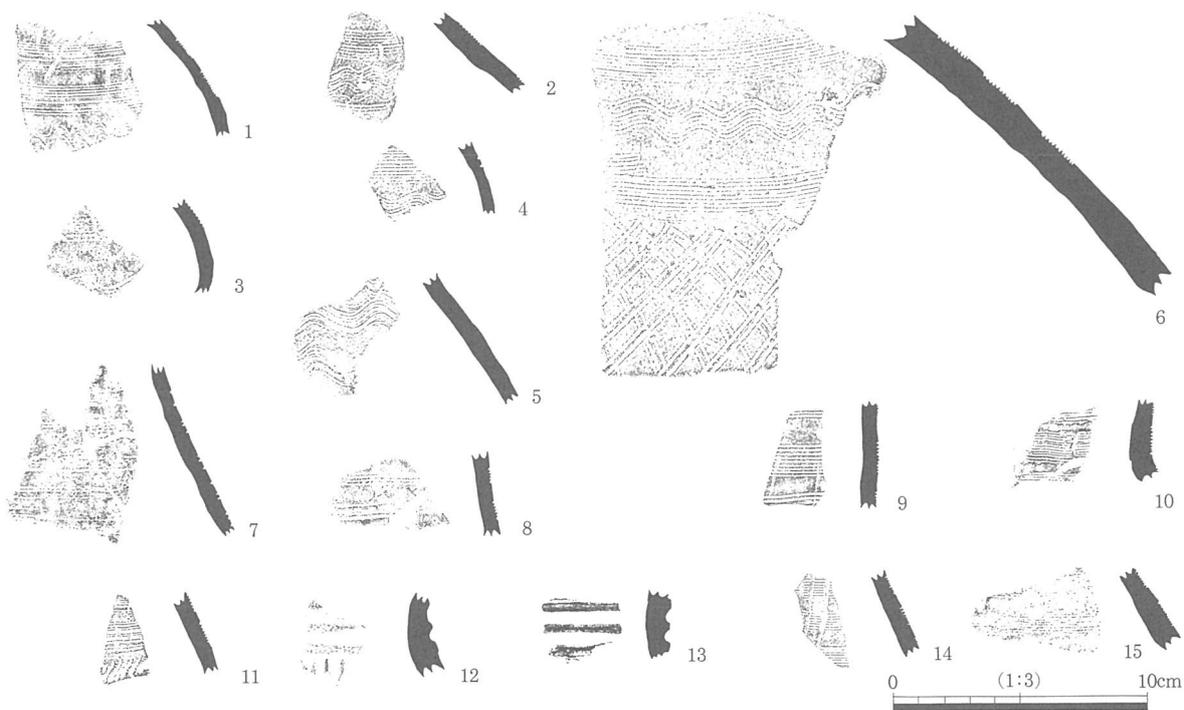


挿図69 2 A トレンチ 溝968出土 弥生土器 実測図



挿図70 2 Aトレンチ 土坑 溝出土 弥生土器 実測図

文を描く。体部は同じく波状文、直線文、扇状文を施している。鉢の体部に扇状文を施す例は数少ない。図71に掲載した遺物は波状文、直線文、斜格子文が大半を占めるが、扇状文、簾状文、凹線文も少し見られる。溝出土遺物拓本では直線文や斜格子、簾状文、波状文などが見られる。72-2,3では簾状文を



挿図71 2 Aトレンチ ピット出土 弥生土器 実測図

描いている。

溝824 (挿図72-15~17)

72-15は2条の凹線文でこの間に波状文を施している。他2点は直線文である。

溝825 (挿図72-8~14)

拓本は波状文、直線文、斜格子文が見られる。

土坑916 (挿図72-18~20)

拓本は直線文、斜格子文、円形浮文が見られる。

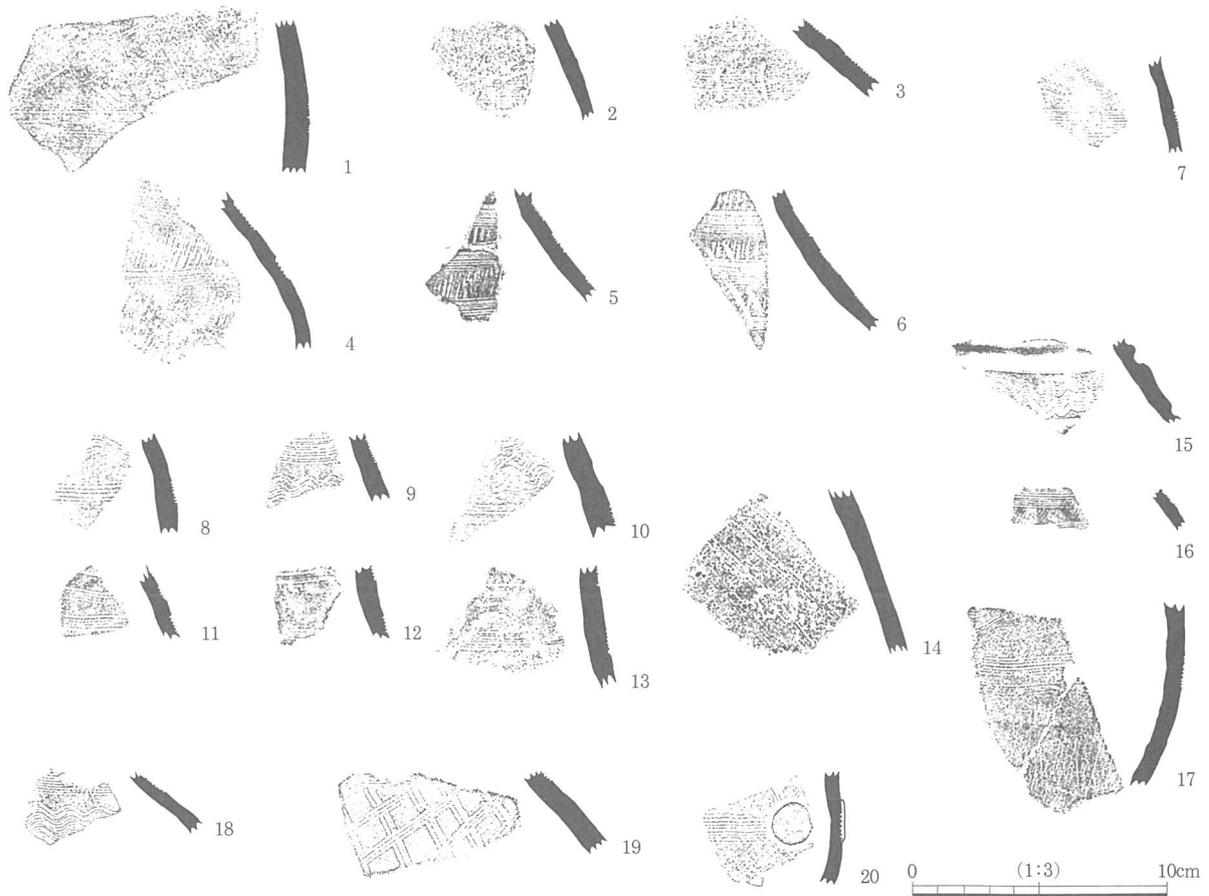
土坑1171 (挿図73-1~5、7、8、10~21)

挿図73は土坑1171出土遺物拓本である。73-1は壺上部に簾状文、扇状文、直線文を施している。簾状文最下段と扇状文の間に円形浮文を2個貼りつけている。73-2は壺上部で波状文、直線文、斜格子文、直線文、広がる幅の狭い羽状文が施されている。そして左上に1個円形浮文が貼りつけられている。73-6,7,8は斜格子文である。73-3,4は円形浮文が貼られている。大きさに違いがある。73-5は簾状文である。73--9~14は波状文である。波形は波高が高いもの、低いもの、波長が長いもの短いものなど様々な種類が認められて、文様を使い分けされていたかも知れない。73-15~21は直線文である。73-18では直線文が7条続いて施されている。

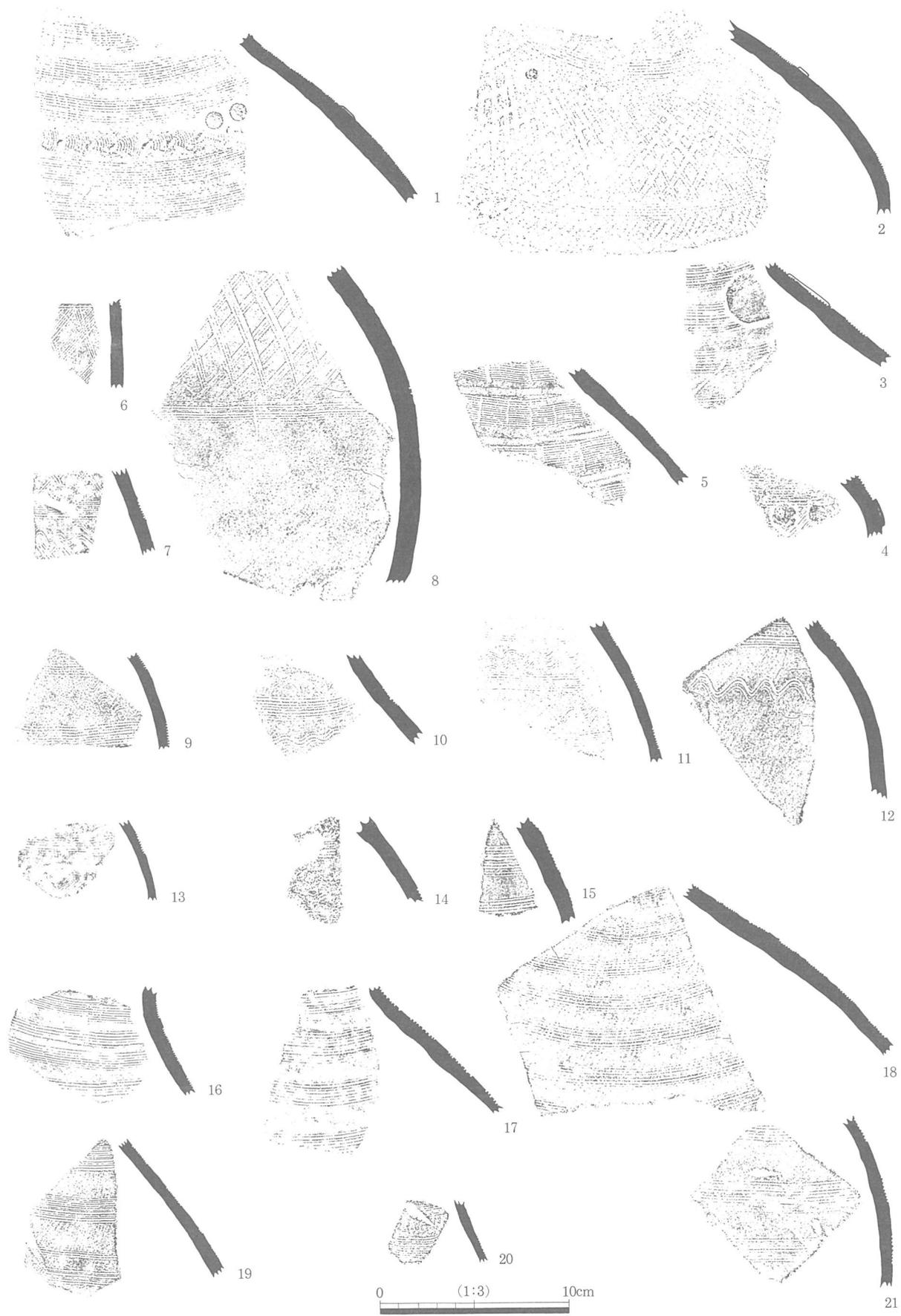
古墳時代以降の新しい時代の遺構出土遺物を以下述べる。

ピット1070 (挿図62-6)

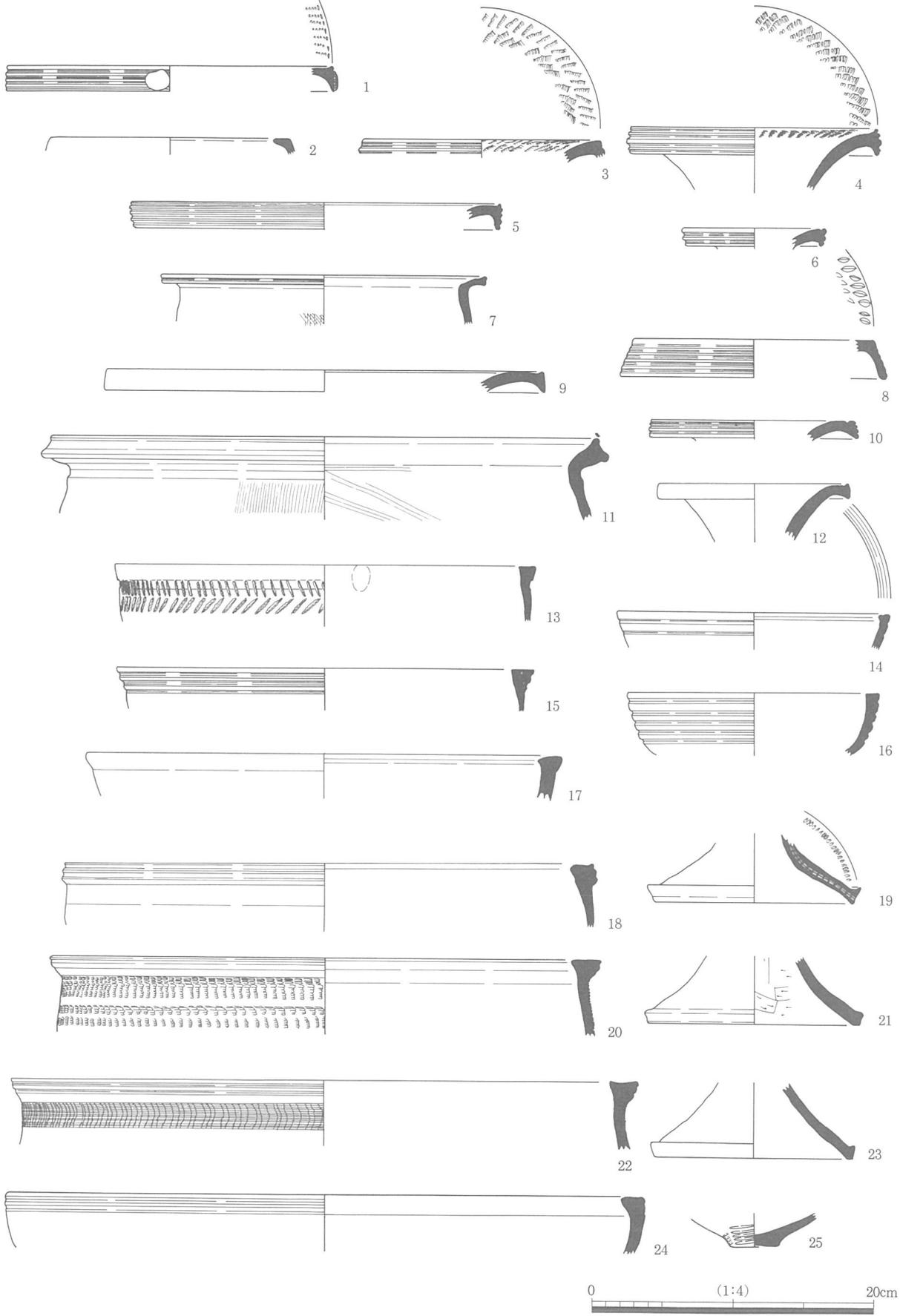
62-6は甕底部である。底部は平坦で、外面に叩き目痕跡を残している。62-11は布留式甕の口縁部で



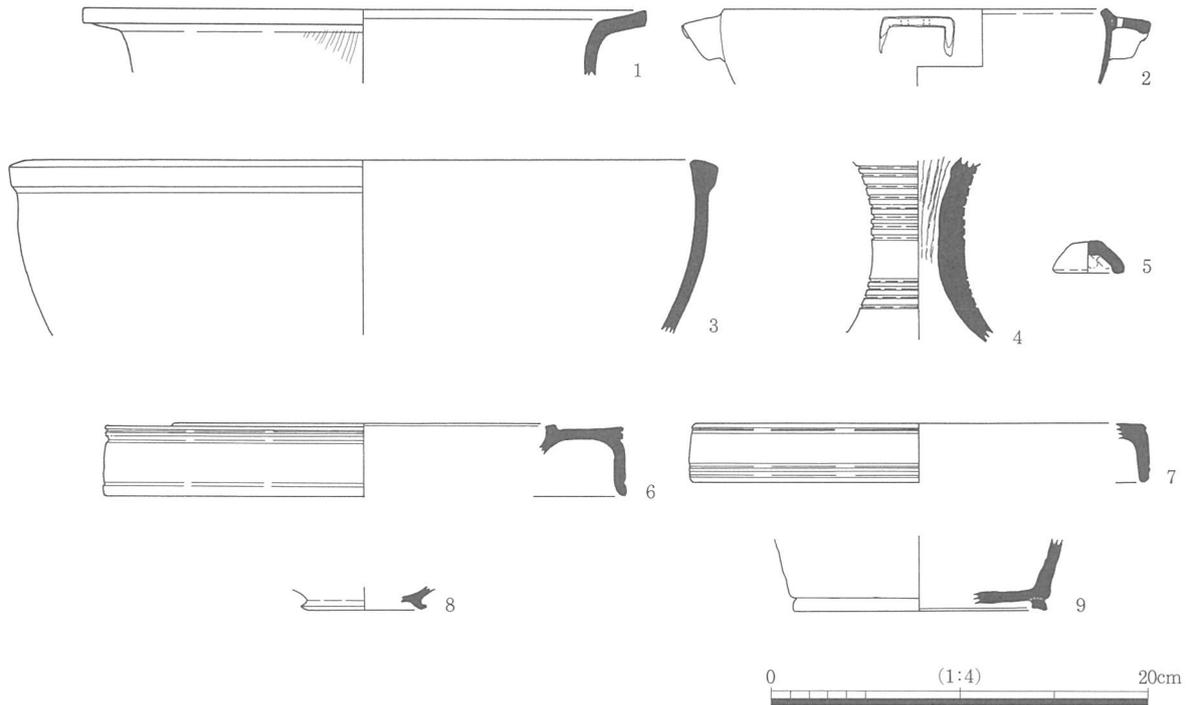
挿図72 2 A トレンチ 溝 落込出土 弥生土器 実測図



挿図73 2 A トレンチ 土坑出土 弥生土器 実測図



挿図74 1Aトレンチ IV層出土 弥生土器 実測図



挿図75 1 A トレンチ IV層出土 弥生土器 須恵器 瓦器 実測図

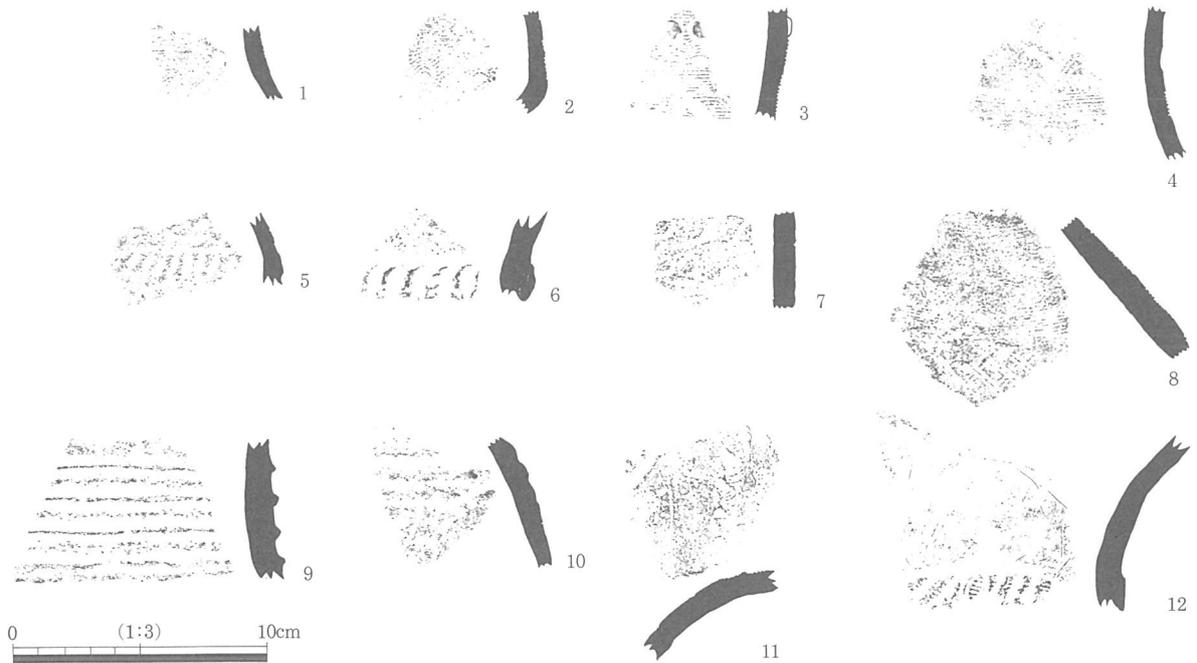
ある。口縁端部はわずかに外側に傾斜し、そして内側に少し摘み出している。頸部は丸みを帯びて屈曲している。体部内面の削りは頸部の屈曲点より下方から行っている。体部外面調整は斜めハケ調整で、叩き目は見えない。

溝1178 (挿図59-26)

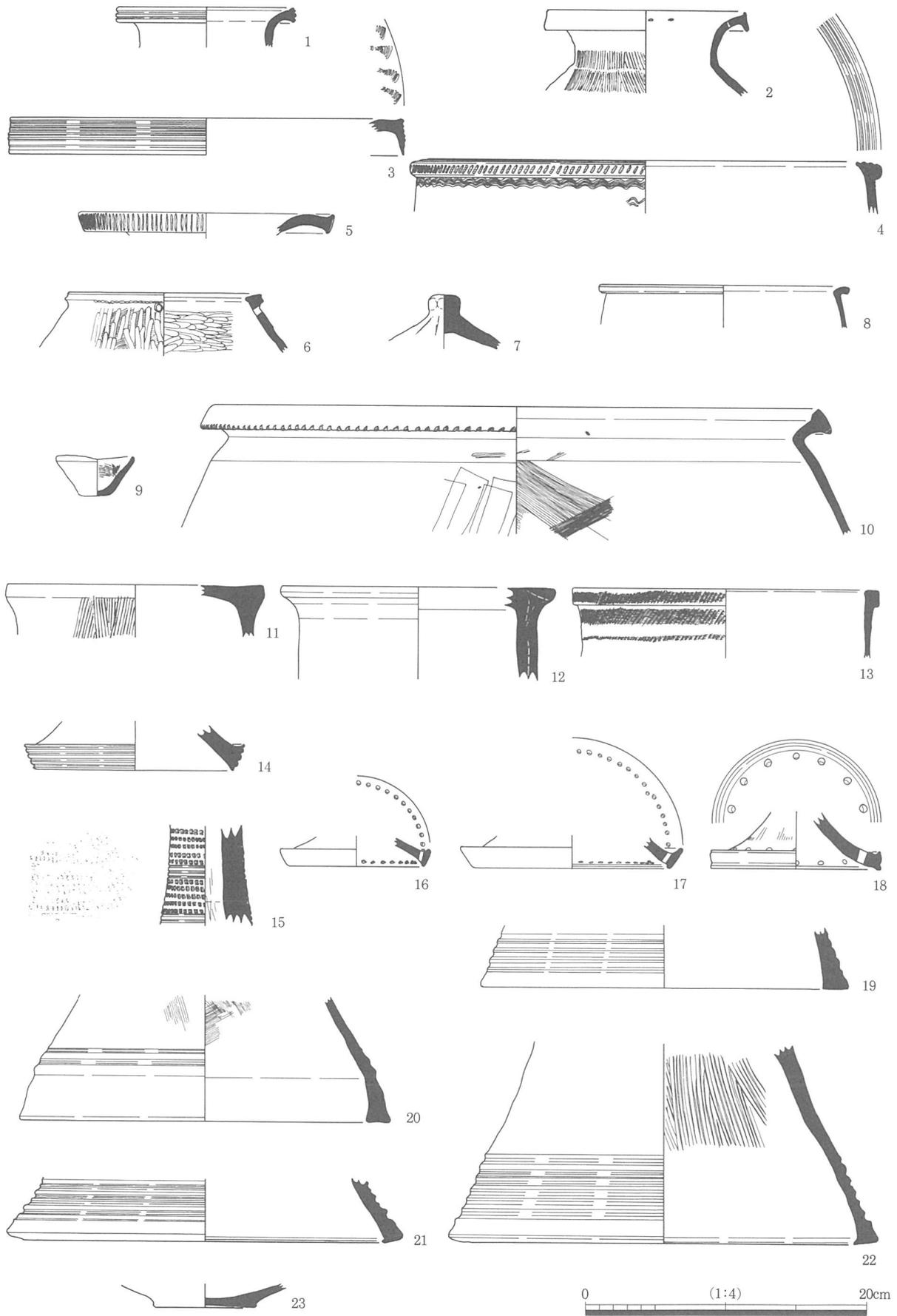
中世 II-2面の遺構から青磁碗が出土した。にぶい黄色で体部外面に花卉を押し出している。

溝374 (挿図65-3)

65-3は黒色土器の口縁部破片である。



挿図76 1 A トレンチ IV層出土 弥生土器 実測図



挿図77 2 A トレンチ IV層 III-2層出土 弥生土器 実測図

(2) 各層出土遺物

1) IV層 出土遺物

1 A トレンチ (挿図60-8・9、挿図74・75)

この層は弥生土器と須恵器、瓦器碗が出土している。瓦器碗がIV層から出土するのは上層の遺物が踏み込みでIV層に入ったと考えられる。

IV層出土 弥生土器 拓本

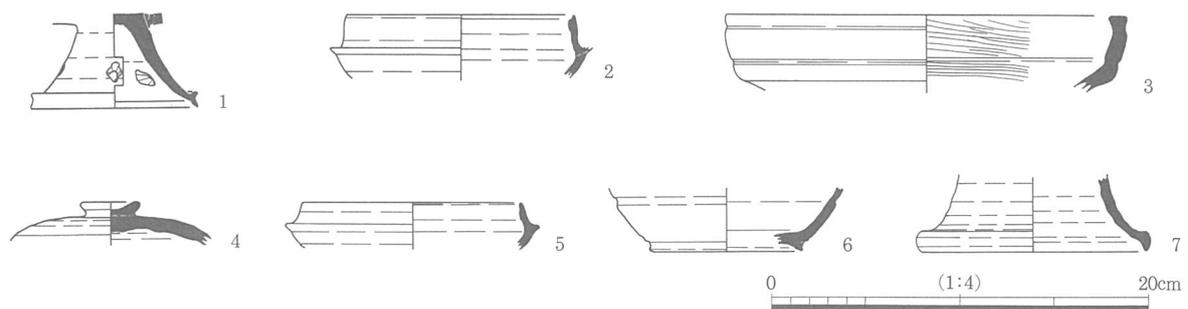
60-8は羽状文である。壺体部にハケメ状工具で刺して横方向に施している。壺の口縁内部には例を見るが壺の体部の例は少ない。通常口縁内部に見られる羽状文は細かな竹管を横方向1列に並べて刺突している。壺体部の羽状文は先端が薄く横幅のあるハケメ状工具で刺突して羽状文を作っている。施文する原体が口縁部と体部で違っているようだ。60-9は壺頸部に施された幅の広い凹線文である。凹線の間は通常はナデているが、この土器は幅の狭い簾状文をそれぞれの凹線文の間に施している。あまり見る事の少ない土器である。色調は灰褐色である。

IV層出土 弥生土器

74-1~6,8~10,12は壺の口縁部である。74-2は無頸壺口縁部である。74-1,3~6,8,9,10,12は広口壺口縁部である。74-1,3,4,8は口縁部上面に扇状文か刺突文を施している。そして口縁部外面に74-1,3~6,8,10は凹線文を施している。74-1は円形浮文を貼りつけている。74-7,11は甕口縁部である。74-7は口縁端部をほとんど摘み上げていないが、外面に1条の凹線を施している。74-11は大型甕である。74-13~18,20,22,24は高杯か鉢口縁部である。大半の資料は口縁部付近が厚く作られるか、或いは突帯を貼りつけている。74-14,15,16,18,24は口縁部外面に凹線文を施している。突帯上に凹線文を施すものには74-15,18がある。74-20,22は大型鉢の口縁部突帯下に簾状文を描いている。脚端部は3点掲載した。74-23は端部を折り返している。74-21は端面を作るだけである。74-19は端面を作り上方に摘み上げるもので端部が折り返して作る窪みの中に刺突文が刻まれている。74-25は甕か壺の底部であるが、体部外面調整は底部先端まで叩き痕が見えている。75-2,3は鉢である。75-2は把手が付いている。また75-3は鉢口縁部に突帯を巡らして体部外面は無文である。75-4,6,7は高杯である。高杯坏部の垂下した部分に2条か3条の凹線が施されている。75-4の脚柱部は曲線を描いて、ここに凹線を上部に8条、下部に4条施している。75-5はミニチュアの蓋であろうか。内面は指頭圧痕が残って未調整である。

奈良時代、中世の土器

75-8は瓦器碗の高台部分である。高台は外側に張り出している。75-9は須恵器の坏である。口縁部への立ち上がりは垂直に近い。高台は口縁部直下に位置している。奈良時代後半期の資料である。



挿図78 2 A トレンチ IV層出土 弥生土器 須恵器 実測図

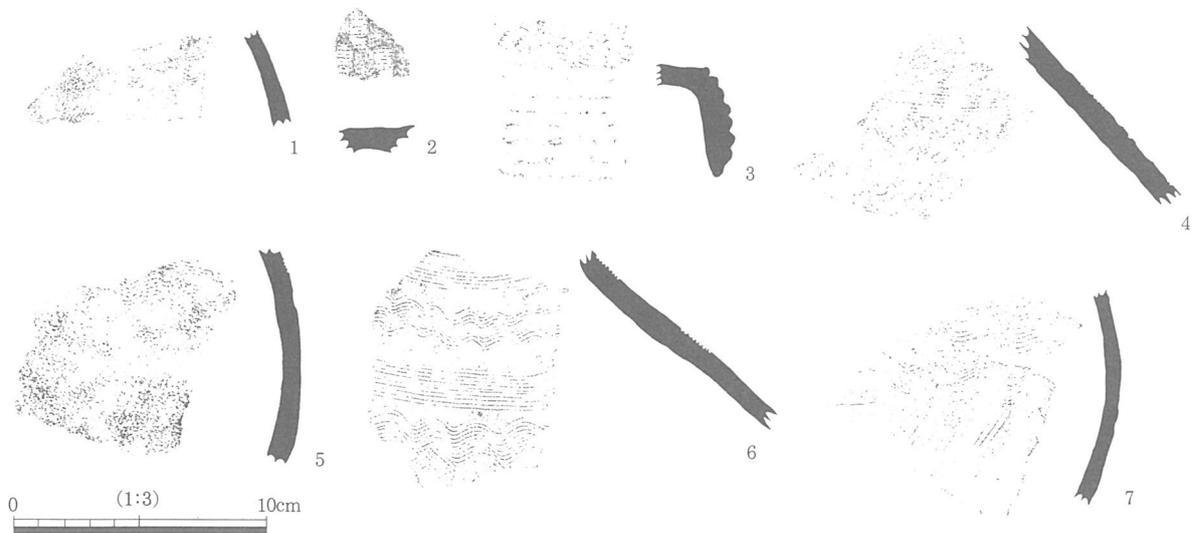
1 A トレンチ出土 弥生土器 拓本 (挿図76)

76-1~4,8は波状文である。波形は76-4が波長、波高とも最も大きい。また76-8は波高が非常に低い。76-2は波長が短い。波状文の組み合わせは直線文が多い。76-5は上部に凹線を施して、斜め方向の櫛描列点文を作る。76-6,12はハケ状工具による圧痕文突帯である。技法的に76-12は突帯も高くてしっかりした文様である。76-7は壺外面に施された扇状文である。このような壺外面の扇状文は数少ない。76-9,10は凹線文である。76-11は壺口縁部内面の扇状文である。

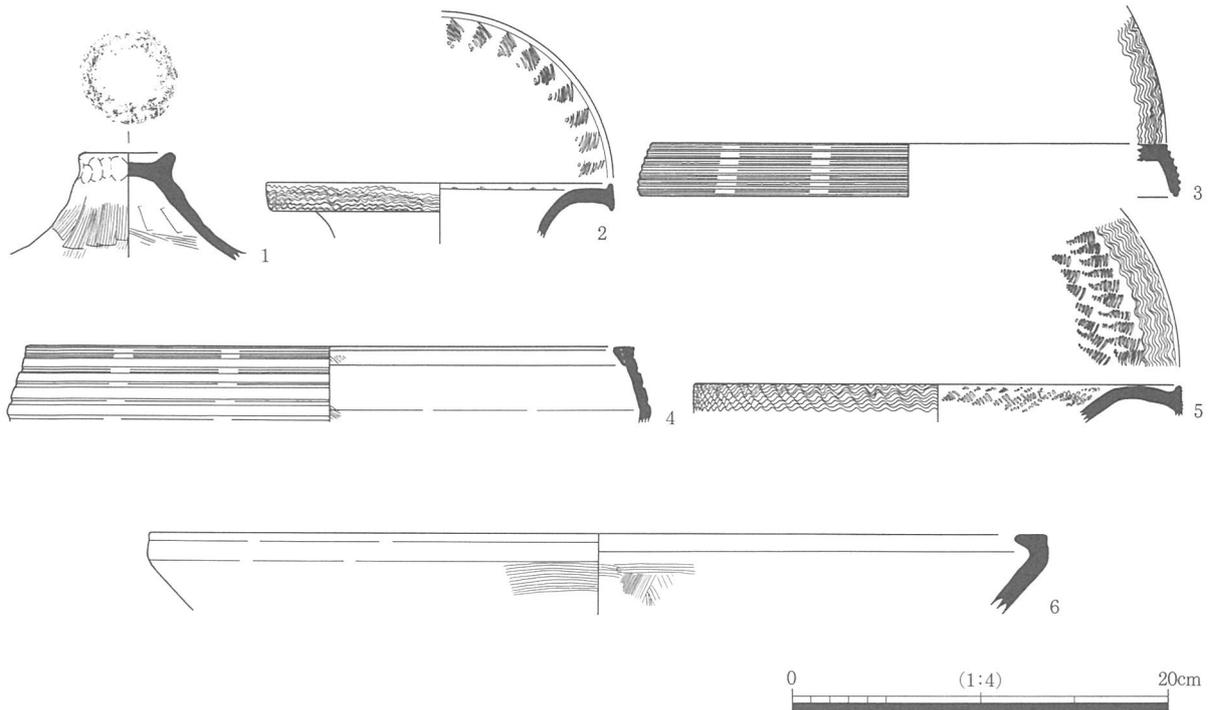
2 A トレンチ出土 遺物 (挿図77・78)

この層から弥生土器の壺、蓋、甕、台形土器、鉢、器台等の他に古墳時代以降の新しい土器が少し出土している。須恵器は高杯脚部、坏身、坏蓋がある。

弥生時代の壺は5点出土している。大半が広口壺であとは無頸壺である。77-1は広口壺で口縁部外面に凹線文を施す。77-2は広口壺で口縁部端部外面は無文である。77-3も広口壺で口縁部上面に扇状文を描き、外面に凹線文を施している。77-5は広口壺で口縁部端部外面に縦の刻み目文を描いている。77-6は無頸壺で口縁部に1条の突帯を貼りつけている。口縁部突帯直下に1個の円孔が開けられている。77-7は蓋で摘み部分は長い。甕は2点ある。77-8は小型甕、77-10は大型甕である。77-8は口縁端部を上方に摘み上げずに丸めている。77-9はミニチュアの鉢である。口縁部は丸みを帯び、体部は断面逆台形状である。77-11,12は台形土器と呼ばれるものである。この土器は通常土器作製時に使用する台と考えられている。77-13は鉢の口縁部である。この土器はチョコレート色を示して、角閃石を多量に含んでいる。口縁部外面に突帯を貼りつけて、この上に簾状文を施し、体部外面にも簾状文を施している。生駒西麓地域から搬入された土器である。77-14,16~18は脚端部である。16~18は端部近くに貫通した透かし孔を並べている。77-15は高杯脚柱部である。筒状で上部が少し細くなる。中心からずれた位置に穴が開けられている。器壁は厚い所と薄い所がある。均等な厚さではない。成形前の粘土塊折り返し作業痕跡が窺えない。表面が部分的に赤く変色している。脚柱部外面に文様を施している。外面に刺突文を1個づつ横1列に刻んでいる。文様列が上下5列づつある。1、4、5列目と2、3列目は施文原体を天地逆方向に変えて刻んでいる。上段と下段とも天地逆転の配列は同じである。2つの施文帯の間は凹線文が3条、下部には2条施されている。凹線文で区画している。77-19~22は器台形土器脚部である。これらの資料には幾条もの凹線が施されている。数多いものに77-19,21,22がある。



挿図79 2 A トレンチ IV層出土 弥生土器 実測図

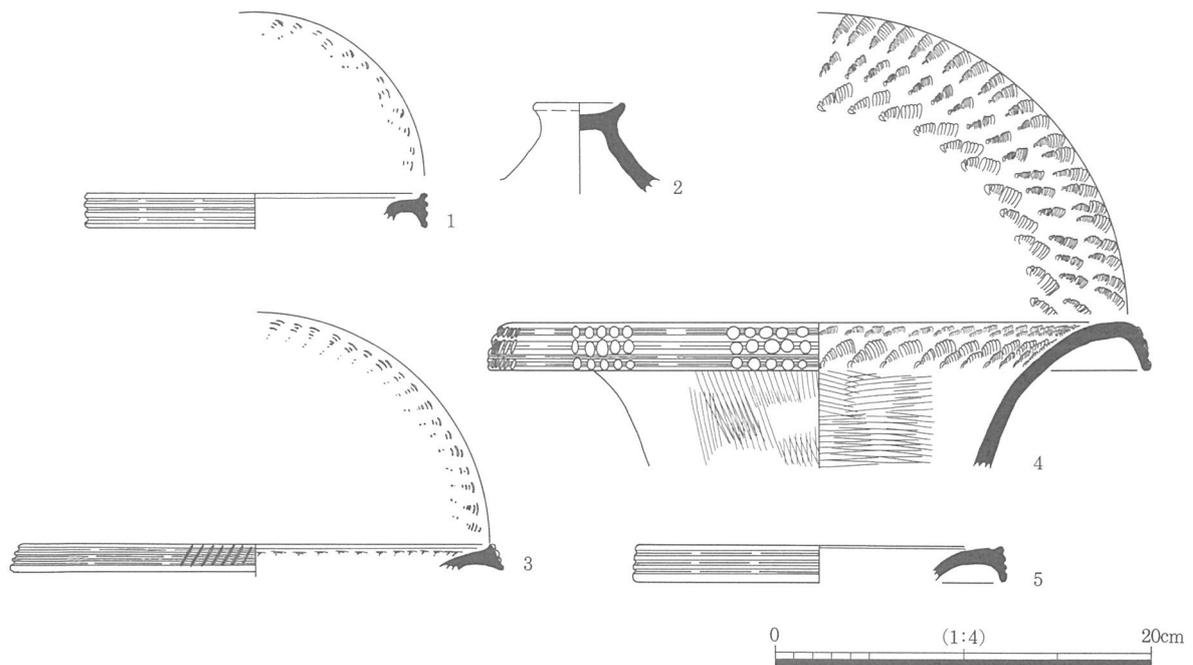


挿図80 3 A トレンチ IV層出土 弥生土器 実測図

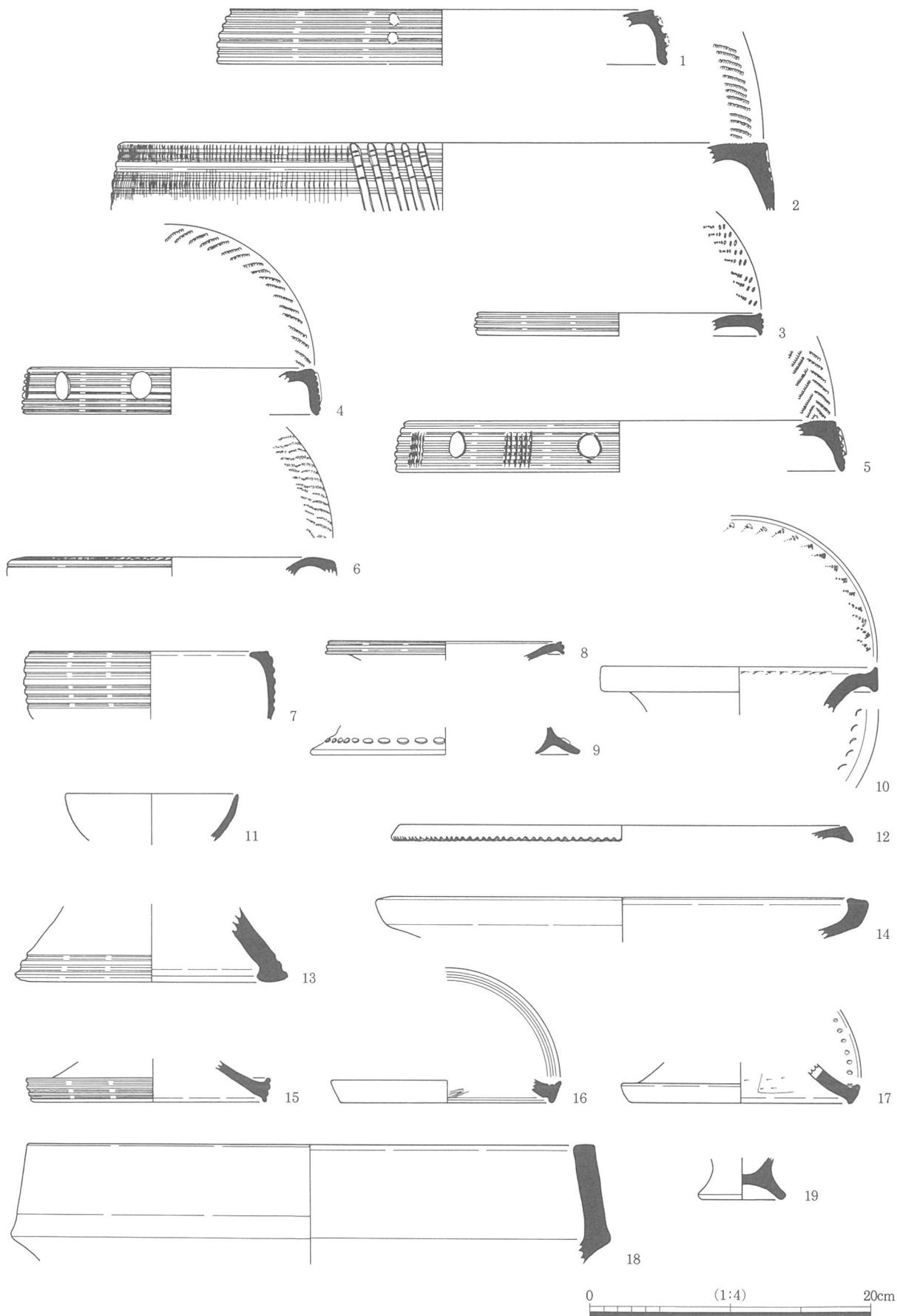
数少ないものに77-20がある。77-23は生駒西麓産と考えられる鉢の底部である。底部外面にヘラミガキを行っている。78-3は内側に湾曲した口縁部を持つ弥生土器高杯である。口縁部は上部が2か所ナデで窪んでいる。

古墳時代以降の土器

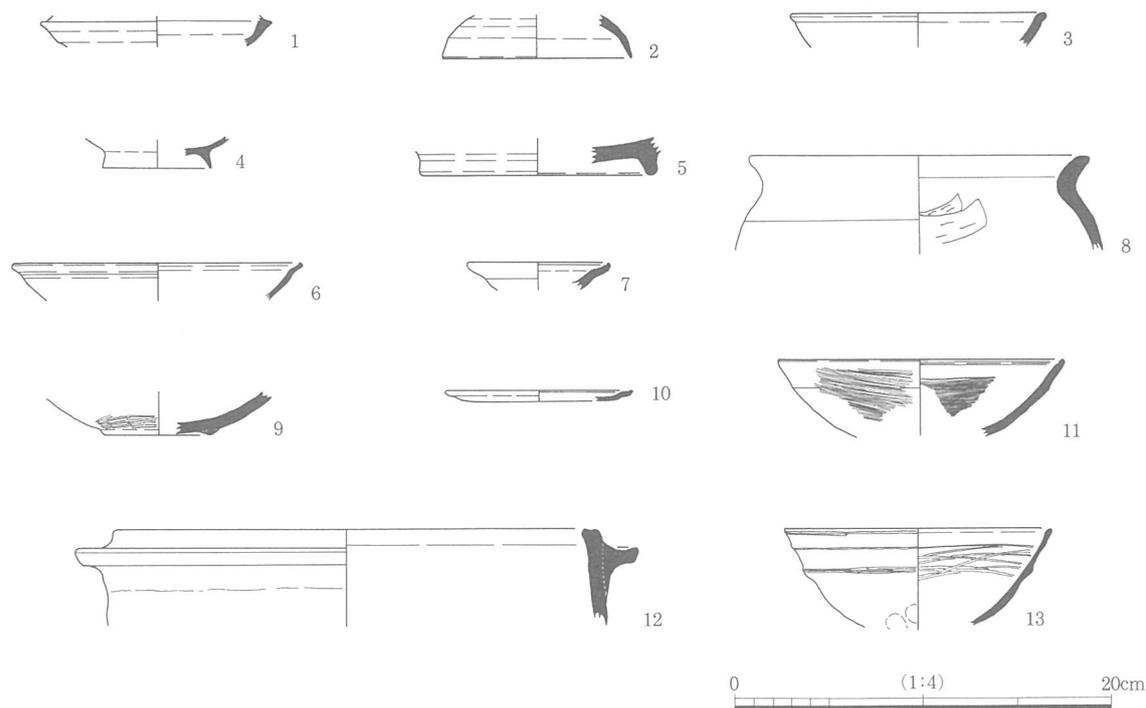
78-1は須恵器高杯脚部である。短脚1段透しである。脚端部は横方向に摘み出して端面を作る。脚部中位に両端が丸みを帯びた菱形の透かし穴を開けている。脚端部は上方に鋭く摘み上げている。5世紀中頃と推測される資料である。78-2は須恵器の坏身である。この資料は立ち上がり部先端が斜め



挿図81 5 A トレンチ IV層出土 弥生土器 実測図



挿図82 1 A トレンチ III-2層出土 弥生土器 実測図



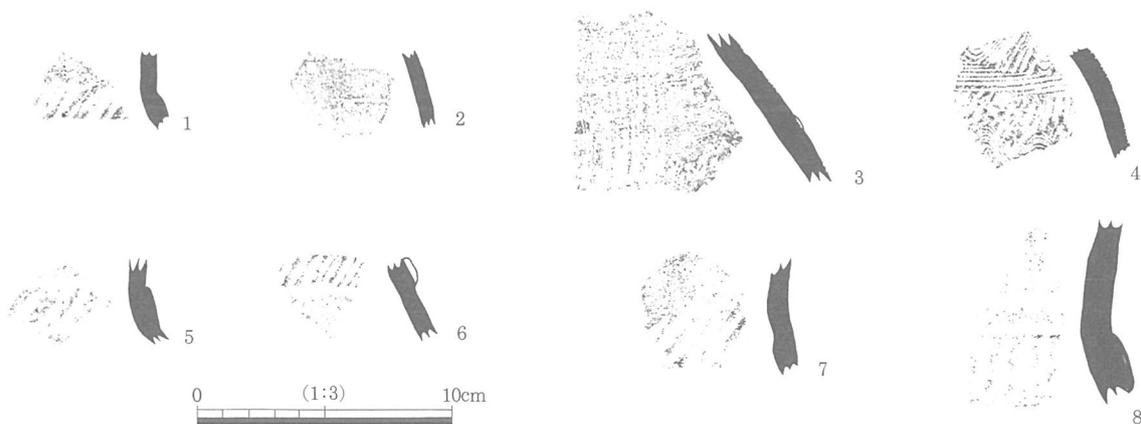
挿図83 1 Aトレンチ III-2層出土 須恵器 土師器 黒色土器 瓦器 実測図

方向に傾斜している。受部は水平である。従って先の78-1の資料より少し新しくなる。中村編年Ⅰ型式4段階であろうか。78-4は須恵器坏蓋である。摘み中央が大きく窪んでいる。78-5は須恵器の坏身である。中村編年Ⅱ型式3段階頃である。78-6は奈良時代須恵器坏身である。口縁部はやや内側に湾曲しながら上方に立ち上がっている。口縁部外側中位に窪みがある。奈良時代から平安時代の資料と思われる。78-7は高杯脚部である。脚端部は内側に湾曲して丸みを帯びた形態を示している。

2 Aトレンチ出土 弥生土器 拓本（挿図79）

79-2は壺で、口縁部上面に施文がある。これは扇状文に似るが櫛で平行に引っ張ったような施文である。79-3は壺口縁部で下方に垂下してその外側に凹線文を施し、上部に扇状文を描いている。79-4は壺体部である。上部に波長が短く波高も低い波状文を描き、この下に直線文1条、扇状文を2条施している。壺体部に扇状文を施す例は東奈良遺跡では非常に数少ない。79-6は波状文と直線文の組み合わせの下側に格子目文を描いている。79-7は波状文の下に斜線文を描いている。

3 Aトレンチ出土 弥生土器（挿図80）

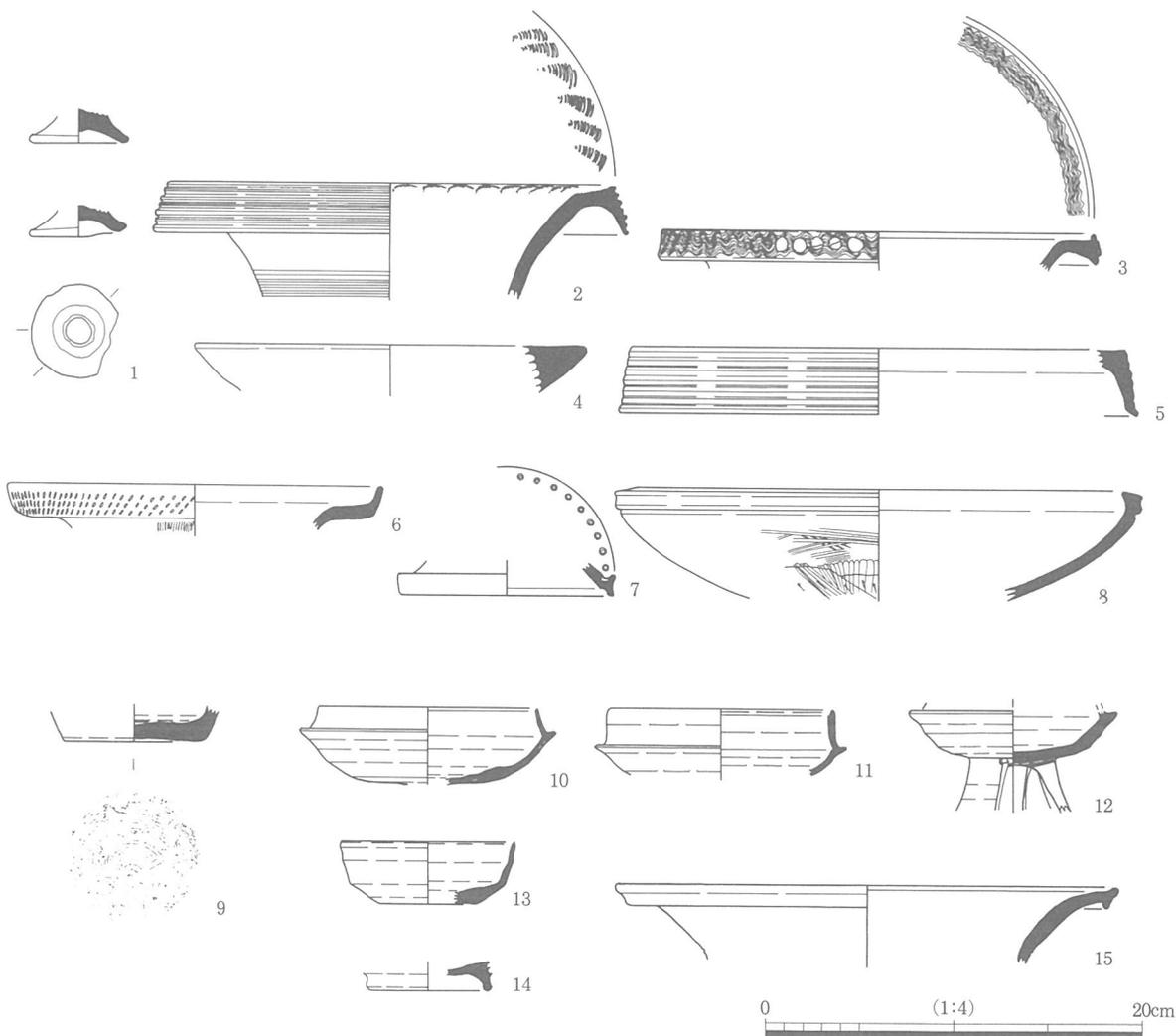


挿図84 1 Aトレンチ III-2層出土 弥生土器 実測図

80-1は蓋形土器である。摘み部分は中央が大きく窪んで、傘部も大きく開いている。天井部に格子状の文様が残っている。80-2は壺の口縁部である。口縁端部は上下に少し摘み出して、外側に垂直な端面を作っている。ここに波長の短い波状文を描いている。口縁部上面に扇状文を描いている。80-3は壺の口縁部である。口縁端部は下方に長く垂下している。ここに凹線文を7条施している。口縁部上面に波状文を描いている。80-4は鉢である。口縁部は少し内側に傾斜して端部を内側に大きく突出させている。口縁部から体部へ大きく屈曲する形態である。口縁部外面に凹線文を5条施している。80-5は壺である。口縁端部は上下に伸ばしている。口縁端部外面には波形の軸が傾いた波状文を描いている。また口縁部上面は3列の文様が描かれている。外側から波状文1条、扇状文2条描かれている。80-6は鉢である。口縁部は短く、斜め内側に傾斜した体部に続く。口縁端部内側は摘み出している。大型の鉢である。

5 A トレンチ出土 弥生土器 (挿図81)

81-2は壺蓋形土器である。摘み部分は中央が窪んで、周囲が突出している。傘部は曲線を描いて開いている。81-3は壺口縁部である。口縁端部は凹線文を施して、ここに斜め方向の切れ目を数条縦に入れてある。口縁部上面は扇状文を描いている。81-4は装飾が多い壺である。口縁端部は下方に長く垂下してこの外側に凹線を4条窪ませている。その上に縦に3個横に5列の円形浮文を一組として一定



挿図85 2 A トレンチ IV層 III-2層出土 弥生土器 須恵器 土師器 実測図



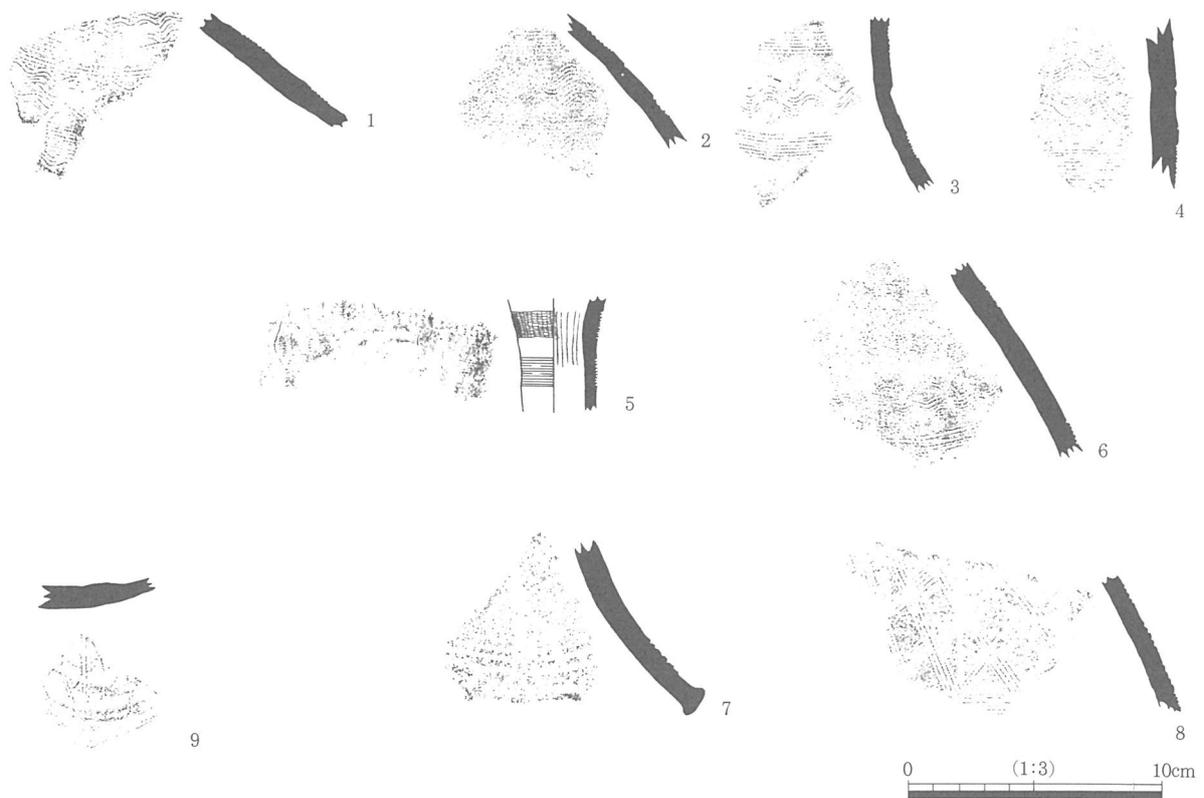
挿図86 2 A トレンチ III-2層出土 弥生土器 実測図

間隔に貼りつけている。以上のように搬入土器が少ないのはこのムラが独自に交流していなかった事を示す。

2) III-2層 出土遺物

1 A トレンチ 出土遺物 (挿図82・83)

82-1は壺である。口縁部が下方に垂下してここに凹線文を6条施し、その上に縦に2個円形浮文を貼りつけている。82-2は大きな壺の口縁部である。下部が少し外側に出た傾斜を示して、ここに先に5条の凹線文を施し、この上から縦の刻み目を緻密に施す。そして5本以上の棒状浮文を一組にして一定間隔に貼りつけている。口縁部上面に刺突文を施している。82-3の壺は口縁部外面に凹線文と上面に扇状文を施す。82-4の壺は口縁部外面に凹線文と円形浮文、上面に刺突文を施す。82-5の壺は口縁部外面に凹線文と円形浮文と縦の刻み目を入れて、上面に羽状文を施している。これらの壺口縁部は非常に似た文様や施文を行っているが微妙にすべて違っている。82-7は無頸壺で口縁部外面に凹線文を6条緻密に施している。82-8の壺は口縁部が下方にあまり伸びず、ここに2条の凹線文を施している。このような口縁部が下方に垂下する部分が少なく、また凹線文の条数が少ない壺口縁部は数が少ない。82-9は鉢の下方に器台が接続した形で作られた土器である。接続した器台の口縁部が下方に飛び出して、この部分に円形浮文が並んで貼りつけられている。82-12は大型甕で口縁端部の端面下端部に刻み目を施している。82-14は高杯で口縁部が短く体部が浅い形状である。82-13は器台である。脚部先端に凹線文を施して内側に厚くなっている。82-15~17は高杯の脚部である。脚端部を上方に摘み上げた端面を作り、端面に凹線文を入れたり、摘み上げた間に小さな円穴を幾つも開けたものなどがある。82-19は小型の台付き鉢脚部である。82-18の大型壺口縁部は内側に折れ曲がって内側に少し傾斜している。この形態の壺も数少ない。



挿図87 2 A トレンチ III-2層出土 弥生土器 須恵器 実測図

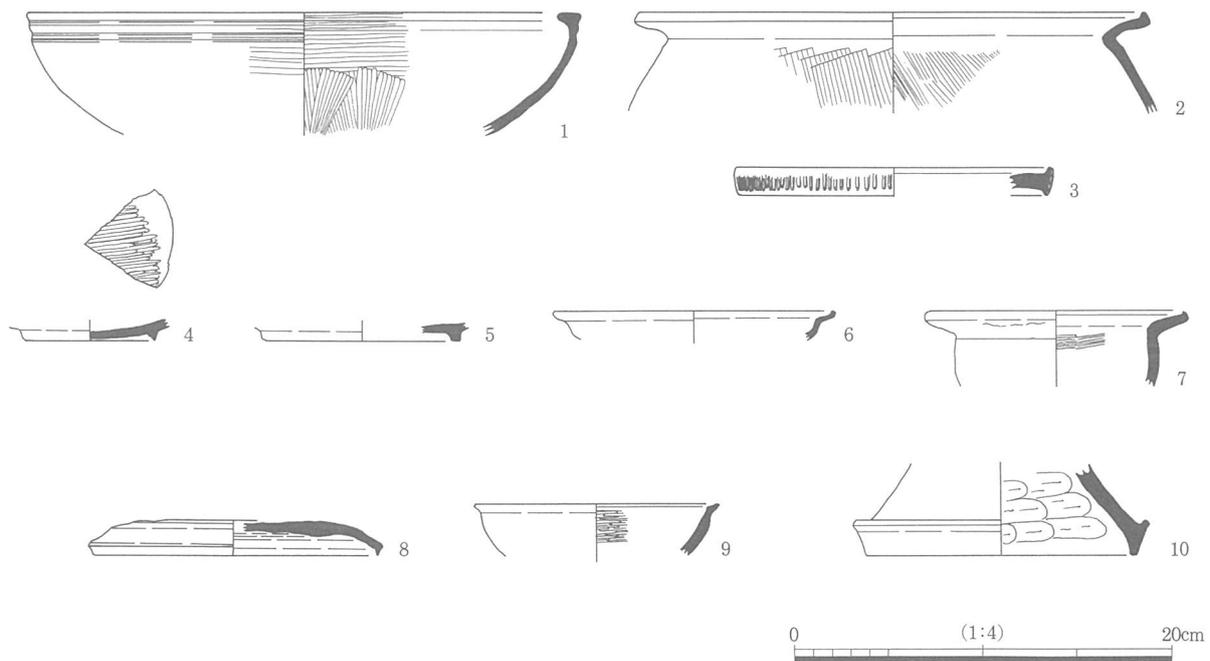
83-1~13は弥生時代以降の遺物である。出土した遺物は古墳時代6世紀頃の須恵器坏身、坏蓋、平安時代土師器碗、土師器甕、黒色土器碗、土師器小皿、鎌倉時代瓦器碗、土師器羽釜である。

1 A トレンチ出土 弥生土器 拓本 (挿図84)

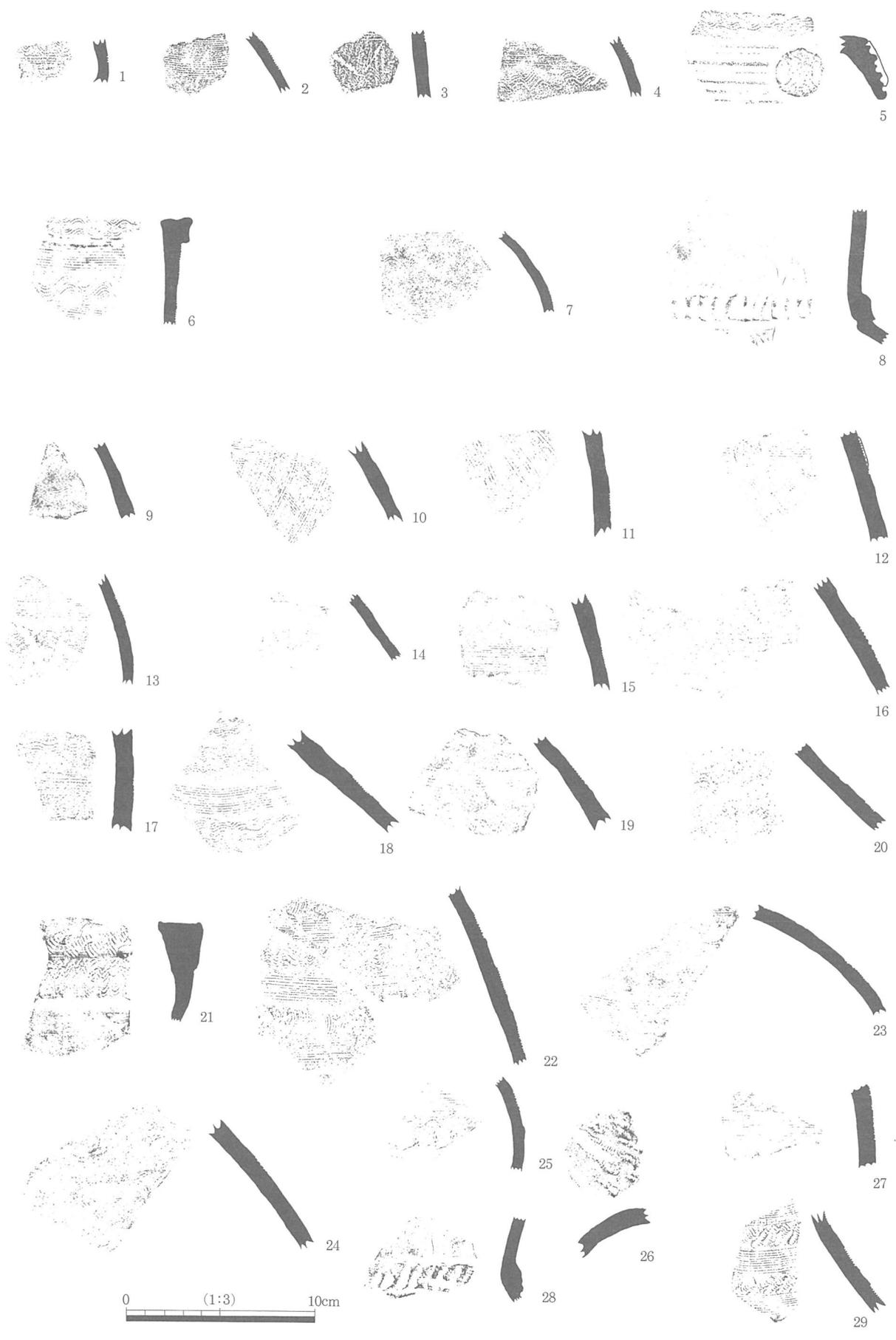
84-1,5,6,8は圧痕文突帯の拓本である。この資料は84-1のように板状工具で突帯に斜め方向に刻み目を入れるものが多い。しかし84-7は土器の器壁に刻み目を施して突帯のふくらみが認められない。ここに示す拓本は刻み目突帯幅や高さ、傾き、間隔、深さがどれをとっても少しずつ違っている。84-3,4は直線文や波状文の例である。整美な84-4の資料もあれば波高が非常に低くて波長も短い84-3もある。波状文一つでも微妙に構成要素が違っている。84-3では小さな円形浮文を左端に貼りつけている。84-2は線刻絵画文土器である。高床式建物の屋根のひさし部分のような絵が描かれている。

2 A トレンチ 出土土器 (挿図85)

85-1は小形の高杯か鉢をのせる脚部と思われる。85-2の壺は頸部から急な傾斜で口縁部の垂下した部分に続く。口縁部端部は下方に垂下し、凹線文を施している。また、口縁部上面に扇状文を描き、頸部外面に直線文を施している。85-3の壺は口縁部が頸部から屈曲して上面が水平な面を作っている。口縁部外面に波状文を施してその上に円形浮文を5個貼りつけている。口縁部上面に波状文を描いている。波状文は波形の軸が少し左側に傾いている。85-4は台形土器である。この土器は土器作製の作業台である。85-5は壺で口縁部が下方に垂下している。口縁部外面に凹線文を描いている。85-6は近江地方の甕である。口縁部が受口状を示す。口縁部下部が横方向に伸びて水平な部分を作り、口縁部上部が外上方に伸びている。口縁部上部の外面に斜め方向の列点文を施している。近江地方からの搬入品と思われる。今回の調査では遺構内から出土した1点とあわせて合計2点近江地方の甕が出土している。85-7は高杯脚端部で下端部は折り返して端面を作っている。折り返した窪みの中に小さな円穴が等間隔で開けられている。この資料の円穴は下まで貫通していない。85-8は高杯坏部である。口縁部は円弧を描きつつ底部に至る曲線状を示している。口縁部外面に突帯を持ち、突帯の上下端が突出している。85-9以降は古墳時代、奈良時代、平安時代の資料である。



挿図88 3 A・4 A・5 A トレンチ III-2層出土 弥生土器 須恵器 土師器 黒色土器 実測図



挿図89 2A・3Aトレンチ 溝 IV層 III-2層出土 弥生土器 実測図

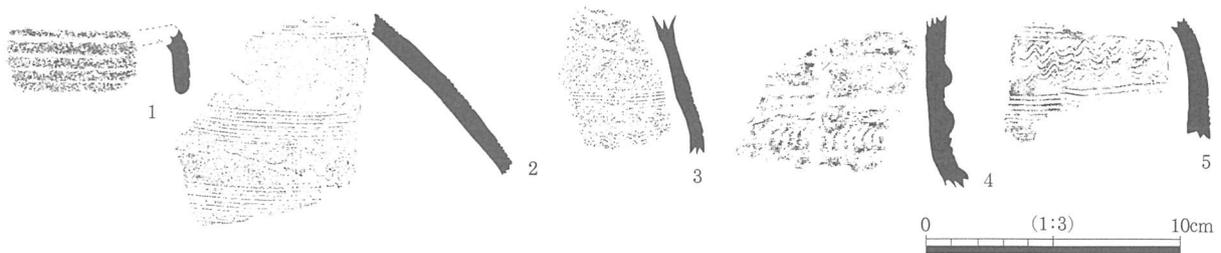
85-9は須恵器の壺底部である。平底は糸切り痕が認められる。85-10は須恵器坏身である。立ち上がり部が少し内側に傾き、先端に端面が無い形態である。中村編年II型式4段階頃であろうか。85-11は須恵器坏身である。立ち上がり部先端は内側に傾いた端面が付く。中村編年II型式2段階頃であろうか。85-12は須恵器短脚1段3方透かし高杯である。坏部は立ち上がり部が欠損している。85-15は須恵器の甕である。口縁部先端外側に1条の突帯を持つ。口縁端部付近で微妙に屈曲する形態を示している。断面の色調は赤紫色で焼成も良好である。この土器の形態は初期須恵器以降継続して出現するので時期の特定は難しい。85-13は須恵器坏身である。この土器は7世紀半ば頃の須恵器である。

2 A トレンチ出土 弥生土器 拓本 (挿図86・87)

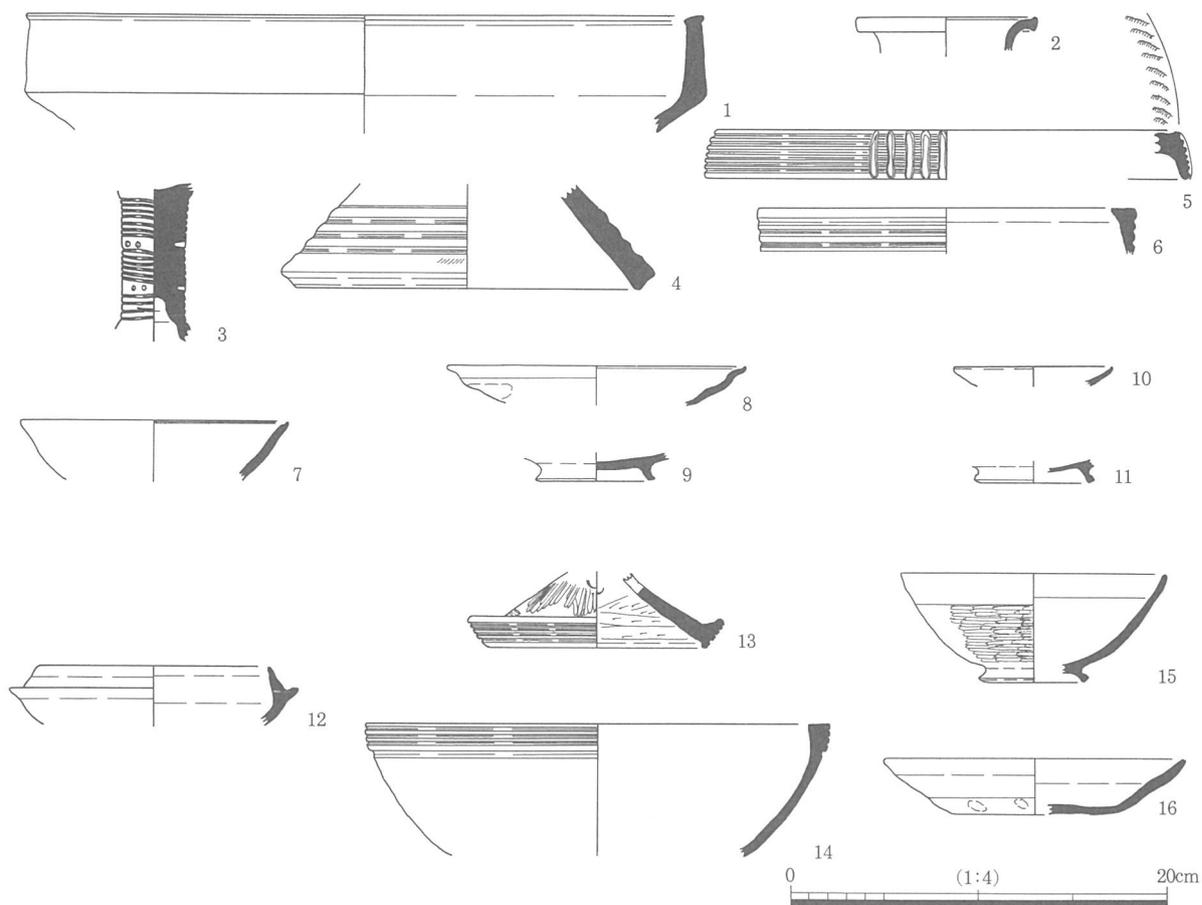
86-1は壺口縁部である。口縁が垂下した外側に上下2列の櫛状工具で斜め方向に刻みを入れて、その上に上下2列の円形浮文を貼りつけている。色調は茶褐色である。一見簾状文に見えるが停止間隔が短く、その間に櫛を引いた痕が認められない。86-2~4は凹線文に円形浮文、棒状浮文を貼りつけた資料である。これらの資料の凹線文は5、7、8条の多条数を示している。凹線も浅いものから深いものまである。86-5~8は凹線文である。浅くて多条の86-5、深くて窪みが大きい86-7など同じ凹線文と表されている文様にも微妙な表現の違いが数多くあって細かな情報を表していた可能性がある。86-9は幅の広い凹線で、86-10は突出部が高い三角形貼り付け突帯文で、突出部が尖っている。このような幅が広く、深い凹線の資料もある。86-11は幅があるが浅いものである。86-12,14は突出部が台形状に鋭い形で、谷部も鋭く窪んでいる資料である。この場合は突出部が緩やかな曲線で構成される凹線文と違った印象を与える。86-14は凹線下部が深くなる形態で、86-9,10などの印象と違った印象で、少し退化した形態なのであろうか。86-13が断面三角形状貼り付け突帯である。凹線文の丸みを強調した印象と違って稜線の鋭さが目についたきつい印象を与える。86-16は壺体部である。頸部に凹線文を施し、その下に体部文様が続く。この土器は摂津に通有の直線文と波状文が見られ、斜格子文が波状文を挟んで2帯施されている。最下段は2帯の波状文で締めくくっている。2帯の斜格子文の上部に円形浮文を貼りつけている。斜格子文は左上右下の斜め線が後に描かれている。

86-17,19~23は指頭圧痕文突帯か刻み目圧痕文突帯である。86-18は刻み目を体部に施す。86-19,20は突帯にハケ状工具で左側から斜め方向に刻み目を入れている。ハケの痕跡が刻み目の中に残っている。86-21は大型甕の頸部である。ヘラ状工具で刻み目を入れている。86-22は刻み目圧痕文突帯である。刻み目は非常に間隔が狭くて、鋭い工具を使用して刻んでいる。86-23も同様である。

87-1~4,6は波状文と直線文の組み合わせ資料である。87-4の波状文は波長が長く、波形の軸が少し左側に傾いている。87-1では波高や波長が小さくなった形状を示している。87-6は波が低く波長が短い資料である。87-5は細頸壺の頸部である。頸部上段に簾状文が施されている。87-7は高杯の脚部で



挿図90 2 A トレンチ IV III層出土 弥生土器 実測図



挿図91 1 A・2 A・3 A・4 Aトレンチ IV層 III層 III-1層 III-1・2層出土 弥生土器 須恵器
 黒色土器 土師器 瓦器 実測図

ある。この先端部分は少し上下に摘み出している。この先端部外面に天地逆転したV字を横に並べて文様を描いている。これは弥生時代中期の吉備地方の高杯脚端部に見られる矢羽根状の透かし孔を線刻で表現したものと推測される。87-8は斜格子文で左上右下方向の斜線が後から刻まれている。東奈良遺跡出土土器では逆方向の例もある。87-9は古墳時代須恵器坏身の底部に線刻されたヘラ記号である。破片なので全体が分かるまでには至らないが、5本の線が刻まれている。

3 A、4 A、5 Aトレンチ出土 土器 (挿図88)

88-1は鉢である。口縁端部は内側に大きく突出している。口縁端部外面は2条の凹線文が施されている。土器は口縁部から曲線を描いて底部に続く。88-2は中型甕である。口縁端部は上方に摘み上げている。88-3は壺口縁部で縦の刻み目を施している。88-10は高杯脚端部である。端部は折り返して端面を作っている。

奈良時代では88-5の須恵器の坏高台部分がある。88-7は土師器甕である。口縁部が外側に広がり、体部は肩が張らず寸胴の形態を示す。88-8は須恵器坏蓋である。摘みは欠損している。口縁部先端へ率直に伸びる。奈良時代前半期の資料である。88-9は黒色土器碗の口縁部である。口縁部は内側に傾斜した端面を作っている。内面はヘラミガキを施している。88-4は黒色土器碗で、内黒である。この資料の胎土はチョコレート色を示して、内面ヘラ磨きをしている。88-6は土師器で器壁が薄いものである。口縁端部は上方に丸めて端部を作る。口縁部は上下2段に屈曲している。

3) 遺構、IV層、III-2層 出土遺物 拓本 (挿図89)

2 A・3 A トレンチ

89-1は溝824出土で波状文と直線文が描かれている。89-5は同じ遺構から出土している壺の口縁部である。垂下した口縁部外面に6条の深い凹線文を描いている。この上に円形浮文を貼りつけている。円形浮文の上に内行花文のような列点の円弧を四方から描いている。このような円形浮文は類例を見ない。89-2,3,4は溝944出土である。直線文、波状文を描いている。

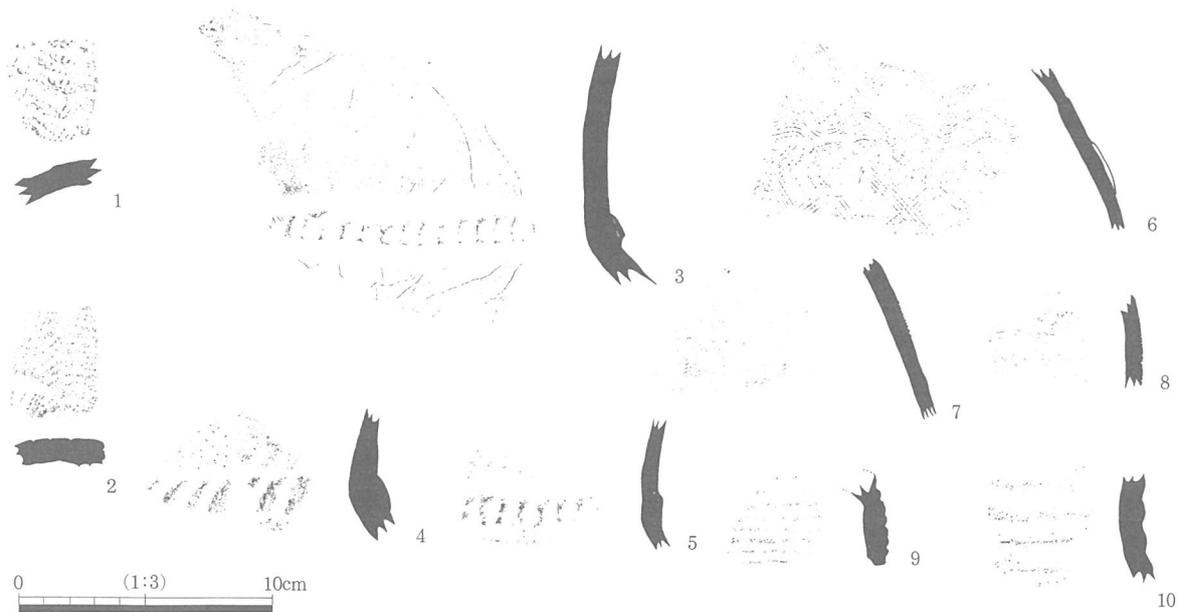
IV層と層位不明資料が89-6~8である。89-6は鉢口縁部である。垂直の口縁部に外側に突帯を貼りつけている。突帯外面に波状文、体部に直線文、波状文を施している。89-7は同じく直線文、波状文を描いている。89-8は壺頸部である。頸部に突帯を貼りつけこの上に指頭圧痕を左側から刻んでいる。

III-2層から出土した遺物は89-9~29である。89-9~12は斜格子文である。右上を後に描く例と左上を後に描いている双方の例が見られる。また斜格子の線は2条と4~5条の2種類ある。東奈良遺跡は2条の細かい斜格子文はほとんど見ない。89-13~19,23は波状文と直線文の組み合わせ資料である。89-15,16の波状文は波高、波長がともに大きく櫛の歯の間隔が等間隔なので整美に見える。波状文を並べた拓本の2列と89-23は右から左に、上から下へと順に配列した。右上の89-16の資料は最も波高が高く、波長が長い資料を配列した。89-21,22,24~27,29は扇状文を集めた。扇状文は鉢口縁部の上端面、壺上面に多くあり、そして壺体部に少数施されている例を見ることができる。扇状文も様々な種類があって、89-22は扇が大きく開いた形状を示す。89-24,25はほとんど開かず刺突文と言えるような扇状文もある。

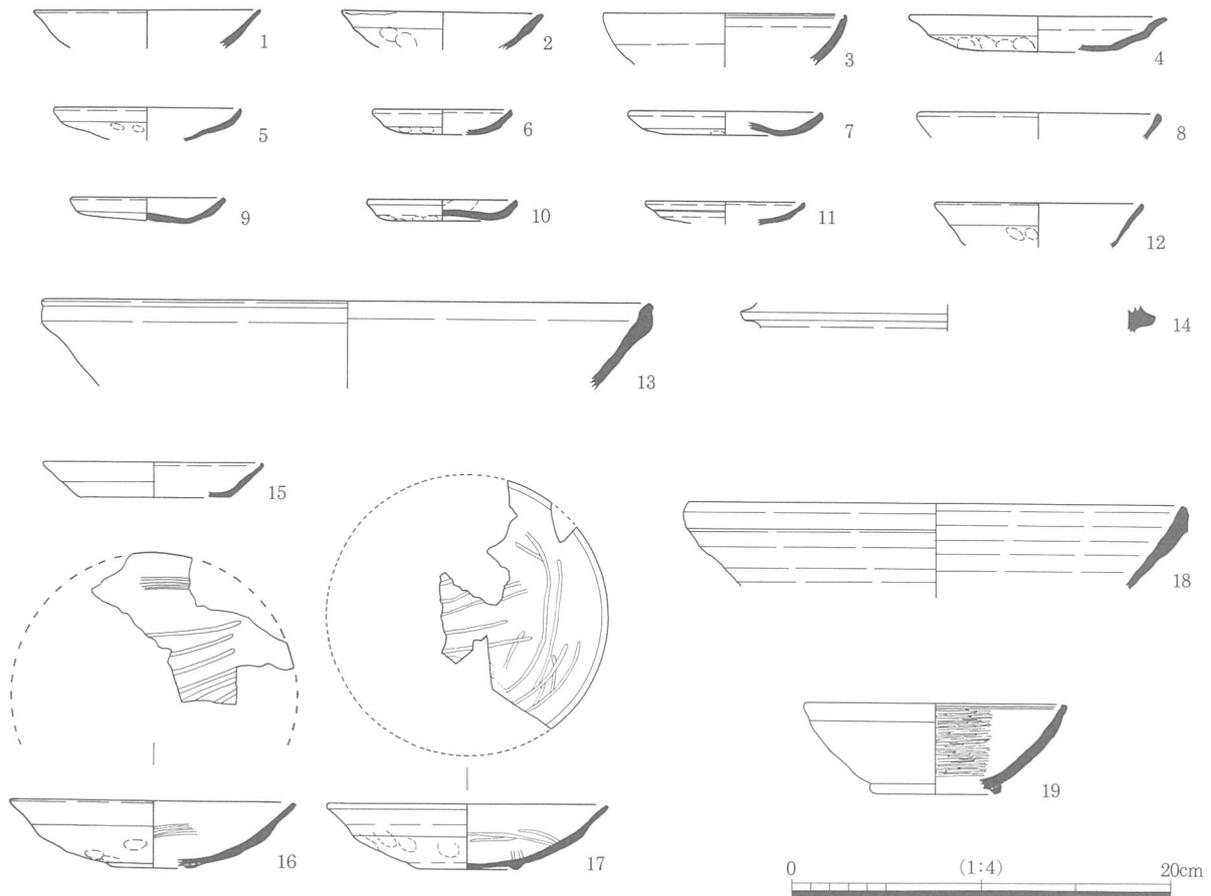
4) IV層、III層 出土遺物

2 A トレンチ出土 弥生土器 拓本 (挿図90)

挿図90は側溝掘削時に出土した層位が分からない資料を集めている。90-1は壺口縁部の凹線文で、窪みは浅い。90-2は壺体部で直線文が3条並んでいる。90-3は直線文、波状文が描かれている。90-4は壺頸部で幅が広い断面三角形貼りつけ突帯を持つ。突帯下段にヘラ状工具か爪先で斜線と縦線を交互に刻んで、羽状文を作っている。90-5は波状文と直線文である。波状文は上部が尖った半円を繋げたような波形である。この波状文もあまり見ない形態である。

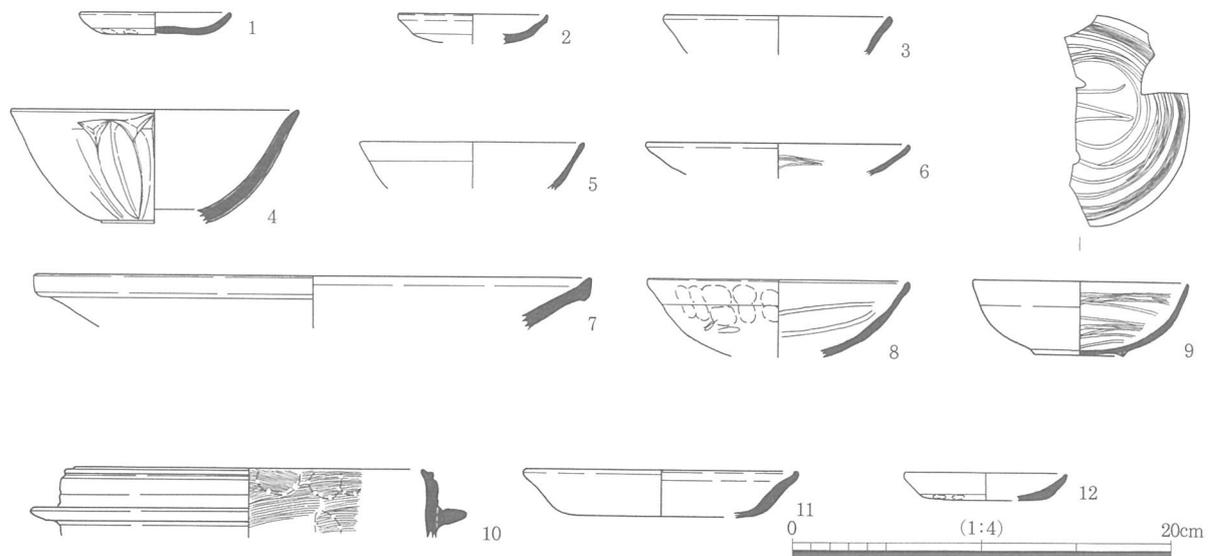


挿図92 2 A トレンチ III-1層出土 弥生土器 実測図



挿図93 1 A・3 A・4 A・5 Aトレンチ III層 II-2層出土 須恵器 土師器 瓦器 実測図
1 A、2 A、3 A、4 Aトレンチ 出土遺物 (挿図91)

91-1は壺口縁部である。垂直な上部口縁部と斜め内側に傾斜した下部口縁部とからなる。口縁端部は内側に少し傾斜し、外側に少し摘み出している。91-2は壺口縁部である。屈曲した口縁端部は無文である。91-5は口縁端部が垂下している。ここに凹線を6条施している。その上に棒状浮文を5本縦に貼りつけている。口縁部上面に刻み目文を描いている。91-3は高杯脚部である。この部分に凹線文



挿図94 1 A・3 A・4 Aトレンチ II-1層 I層出土 須恵器 土師器 瓦器 瓦質土器 青磁
実測図

を上から7条、6条、4条施している。各凹線の一組の間に円形刺突を2個1組の単位で四方に施している。91-4は器台脚端部である。凹線を4条施している。91-6は鉢の口縁部である。口縁部付近が急に厚くなる。外面に凹線を3条施している。91-7は瓦器碗の口縁部である。口縁部は外上方に伸びている。口縁部内側に1条の沈線が見られる。91-8は土師器の皿である。口縁部から体部へS字状に屈曲している。精良な胎土である。この2つの資料は平安時代末期頃であろうか。91-10は土師器小皿である。91-9は瓦器碗の高台部である。高台は高く外側に踏ん張った形態である。91-11も瓦器碗である。この土器の高台も高く外側に少し張り出している。III-1層は瓦器碗出現期の丁寧な作りの高台を持った資料が出土している。IV、III層出土は91-12の須恵器の坏身がある。この資料は中村編年II型式5段階頃の資料である。91-13は弥生土器の高杯脚端部である。端部は折り返して端面に凹線文を施している。91-14は高杯坏部である。口縁部外面に突帯を貼りつけ、この外面に3条の凹線文を施している。口縁部から体部へ曲線状に続く形態である。91-15は黒色土器碗である。深い器形で体部外面は丁寧なヘラミガキを施して、体部内面はナデている。高台は大きく外側に広がった形態である。外面は黒色、内面は茶灰色である。通常黒色土器と違って薄い色調である。瓦器碗が出現していい頃である。91-16は土師器鉢か大皿である。口縁部は少し屈曲しながら外上方に延びている。胎土は精良で色調は灰白色を示す。これらの資料のうち91-9,11,15,16がIII-1層の時期を示しているようだ。

5) III-1層 出土遺物

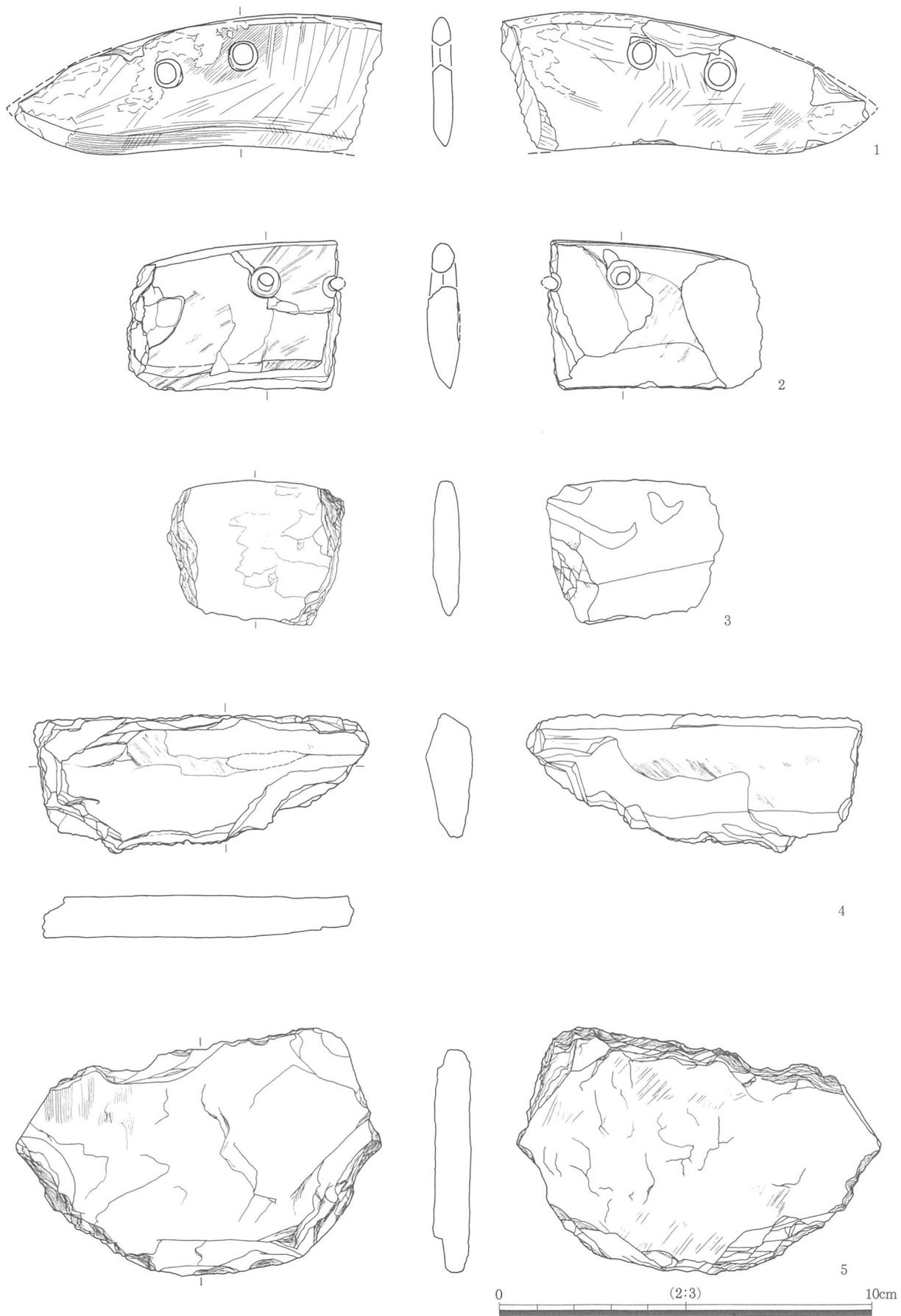
2 A トレンチ 出土 弥生土器 拓本 (挿図92)

92-1のみIII、II層出土で壺口縁部上面である。垂下した口縁端部は欠損するが、口縁部上面に扇状文を3列施している。92-2は壺の口縁部上面である。文様は櫛状工具で刻み目文を2列角度を違えて刻み、羽状文を描いている。92-3は壺頸部である。土器は頸部に幅の狭い突帯を貼りつけてここに指頭圧痕文を施している。92-4,5は壺頸部である。頸部の突帯は貼りつけている。突帯上に刻み目や指頭圧痕が施されている。92-4は突帯に刻み目を施している。92-5は指頭圧痕で突帯を窪ませている。92-6は斜格子文で上下2帯斜格子文を施して、この間に波状文を描いている。波状文の下に円形浮文を貼りつけている。この資料は先の86-16と同一個体かも知れない。92-7は波状文、直線文を施している。92-8は波状文と直線文が見えている。92-9は壺口縁端部である。口縁端部に浅くて幅の狭い凹線文を施している。92-10は幅が広く浅い凹線文である。

6) III層、II-2層 出土遺物 (挿図93)

1 A、3 A、4 A、5 A トレンチ 出土遺物

93-1~3は瓦器碗である。摂津地域では瓦器碗の形態と調整で作られながら、色調が黒色を示さず灰白色を示す土器がある。その口縁部である。93-4~7,9~12は土師器小皿である。歪んだ形態を示すものもあるが通常はやや平坦な底部と外上方に伸びる口縁部からなる。93-8は瓦器碗である。口縁部先端は少し厚く作られている。93-13は東播系の須恵器こね鉢である。口縁端部が外側に厚くなり、口縁端部内側が少し窪んでいる。93-14は土師器羽釜の鏝である。体部が欠損して鏝だけ出土している。93-15は土師器小皿である。口縁端部は内側に屈曲している。器壁は非常に薄い作りである。93-16は瓦器碗である。器高は低く体部外面のヘラミガキも消失している。底部内面の暗文は平行に描いている。93-17も瓦器碗である。この資料は器高が低く、体部外面のヘラミガキが消失している。内面底部は平行した暗文を数本描き、内面は螺旋状の暗文が数本描かれている。93-18は東播系の須恵器こね鉢である。口縁端部外側は垂直に近い端面を作っている。93-19は瓦器碗である。口縁端部内側に1条の沈線を入



挿図95 1A・2A・5Aトレンチ出土 石庖丁 石庖丁未製品 実測図

れている。内面は緻密なヘラミガキを施している。高台は外向きに付けられているが、断面形状は逆台形である。この土器の年代観が問題となるが、この土器を瓦器碗と理解すると器壁が厚い物として理解すれば初期の瓦器で不都合はない。一方土師器碗と理解すれば瓦器碗出現以前ではないかと推測できて少し古い年代観となる。瓦器碗として考えれば12世紀頃の年代観となろうか。この土器は河内地域では見る事の少ない資料である。

7) II-1層、I層 出土遺物 (挿図94)

1 A、3 A、4 A トレンチ中世IIの水田面上層から出土した遺物である。瓦器碗や土師器小皿、青磁碗、須恵器こね鉢などである。1 A トレンチの出土遺物が最も多い。94-1,2は土師器小皿である。口縁部は外上方に伸びる。94-3は土師器碗口縁部である。94-4は青磁碗である。花卉が陰刻されている。口縁部へ曲線状に立ち上がってゆく。94-5,6,8,9は瓦器碗である。この層から出土している瓦器碗は高台が断面三角形になる形態である。体部内面の暗文は簡略化して疎らに施している。94-7は東播系の須恵器こね鉢である。口縁端部は垂直な端面を作る。94-12は土師器小皿である。口縁部は率直に外上方に伸びている。94-11は土師器皿である。口縁部は外上方に伸びて、わずかにS字状を示している。94-10は土師質羽釜である。口縁端部外側に1条の沈線を持つ。鏝は外側に直線状に伸びている。

2 石製品等 (挿図95~99)

(1) 石庖丁 (挿図95)

石庖丁は破損品と未製品が出土した。破損品は刃部と直交方向に折れている。当遺跡で未製品から完成品に仕上げていたようだ。

95-1は凝灰岩製の石包丁である。1 A トレンチから出土している。片側が欠損している。残存する側は尖っている。背部は外湾した曲線を描き、刃部は内湾している。体部両面は研磨して調整している。窪んだ一部を除いて研磨痕が認められる。研磨は幾つかの方向が見られて、幾度か研いでいるようだ。刃部は片側に稜を作っている。背面は断面方向に丸みがある。紐穴は2穴で紐擦れが刃部側に認められる。紐穴は両側から開けている。2つの紐穴を結ぶ線は刃部と角度が平行にならない。紐穴の位置から推測すれば、石包丁の中央に紐穴が開けられていたのではなく、片側に寄った位置に開けられていたようだ。片側が欠損しているが長い部分が失われたのではなく、短い部分が無くなっているようだ。また片側端が尖った石庖丁はあまり見ない形態である。石材の破損面は観察すると片側に折れ曲がった形で残っている。折られたような痕跡がある。石庖丁は落下した時の衝撃で破損したのではないようだ。

95-2の凝灰岩製の石包丁は両端が破損している。背部は少し外湾状を示して刃部は直線を示す。残存している形態から両端が長方形であったと推察される。石庖丁は板状に剥がれて窪んだ部分をほとんど研磨していない。背部は断面形態で丸みを持つ。刃部は片側に2段の稜を作った片刃である。紐穴は紐擦れの痕が横方向に残っている。厚みのある石包丁である。研磨痕跡はほぼ一定方向に認められる。

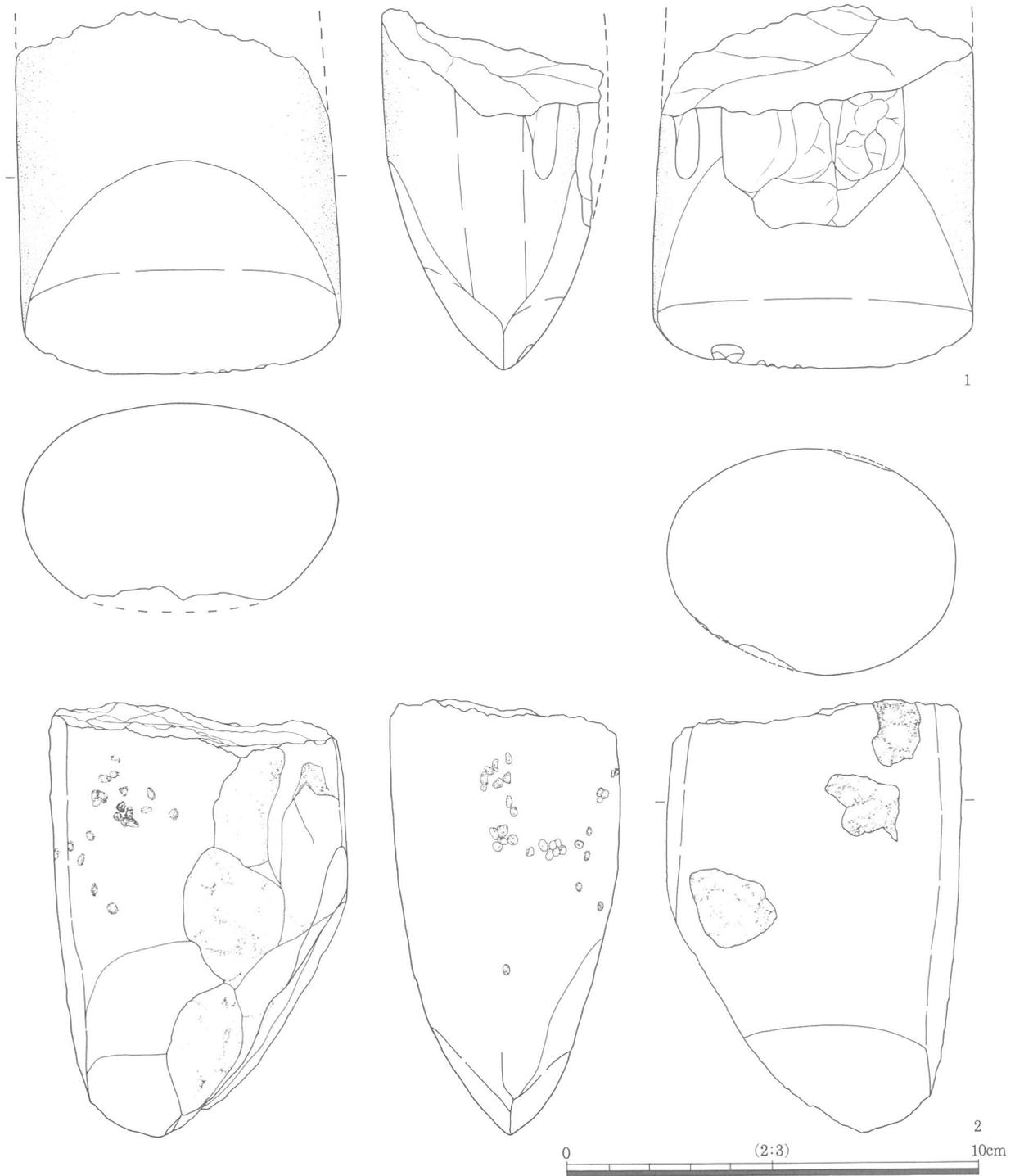
95-3はやはり両端が欠損した石包丁である。背部は少し外湾する曲線を描いて、刃部は直線状を示す。刃部は鋭い稜線を作った片刃である。石材は薄く剥がれる緑色片岩を使用している。残存している部分には紐穴は認められない。残存した形態から推測すると紐穴の位置が少し片側に寄っていた可能性がある。

95-4は頁岩か粘板岩製の石包丁未製品である。背部は直線状で刃部は曲線を描いている。石庖丁は片側が尖り反対側が四角形状の形態を作ろうと意図していたようである。完成品は95-1の形態を意識

していたようだ。背部に近い部分が最も厚く作られている。片側が厚く片寄った形態を意図しているようである。

95-5も石包丁未製品である。背部は直線状、刃部は曲線を描く形態を意図していたようである。体部はすでに擦傷痕が全面に見られて、一定程度の細部仕上げの段階に入っていると考えられる。この石包丁の未製品は比較的大きな形で出土している。未製品は刃部を削って幅をせまくする工程を行わない段階で廃棄されたようだ。

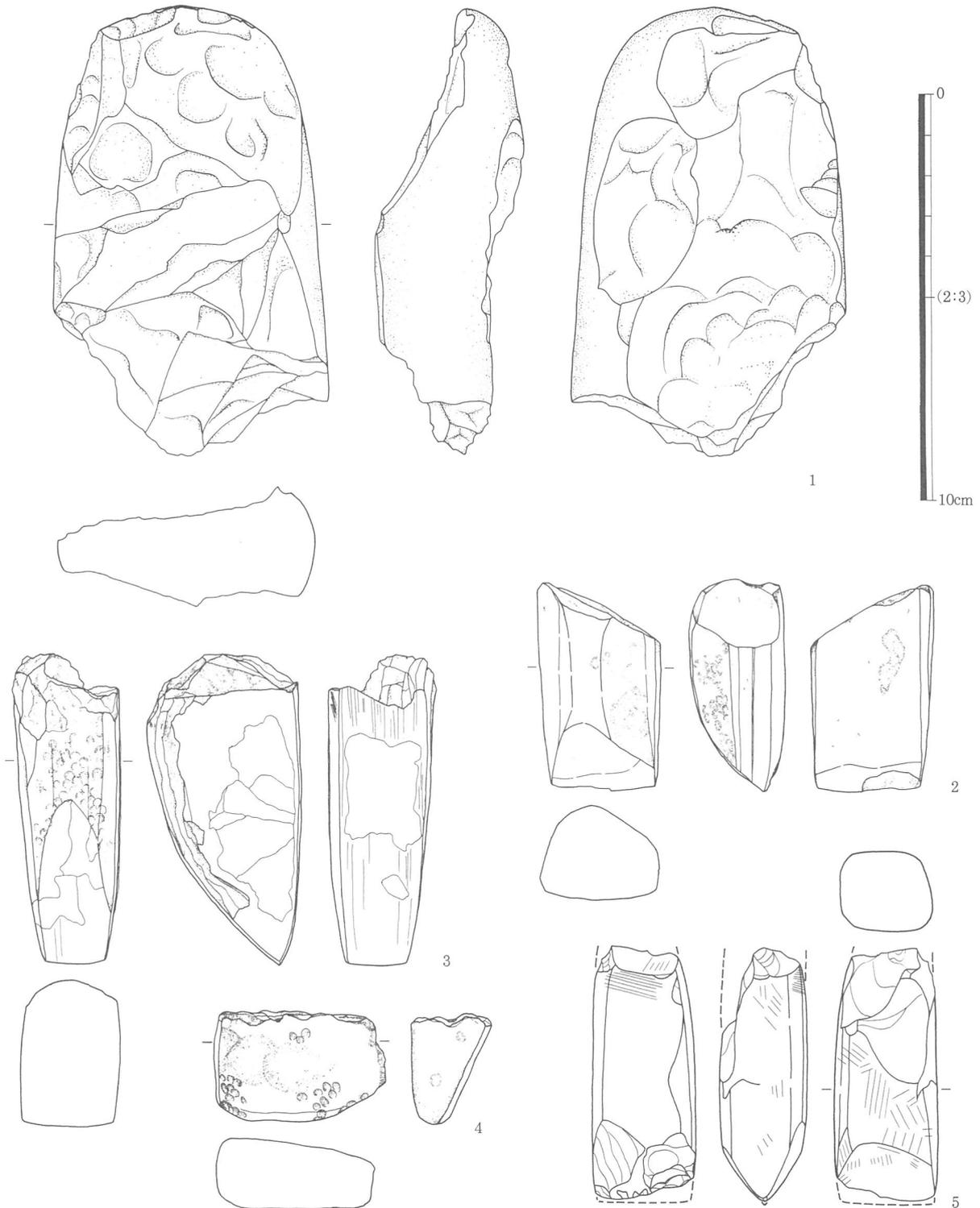
(2) 石斧類 (挿図96・97)



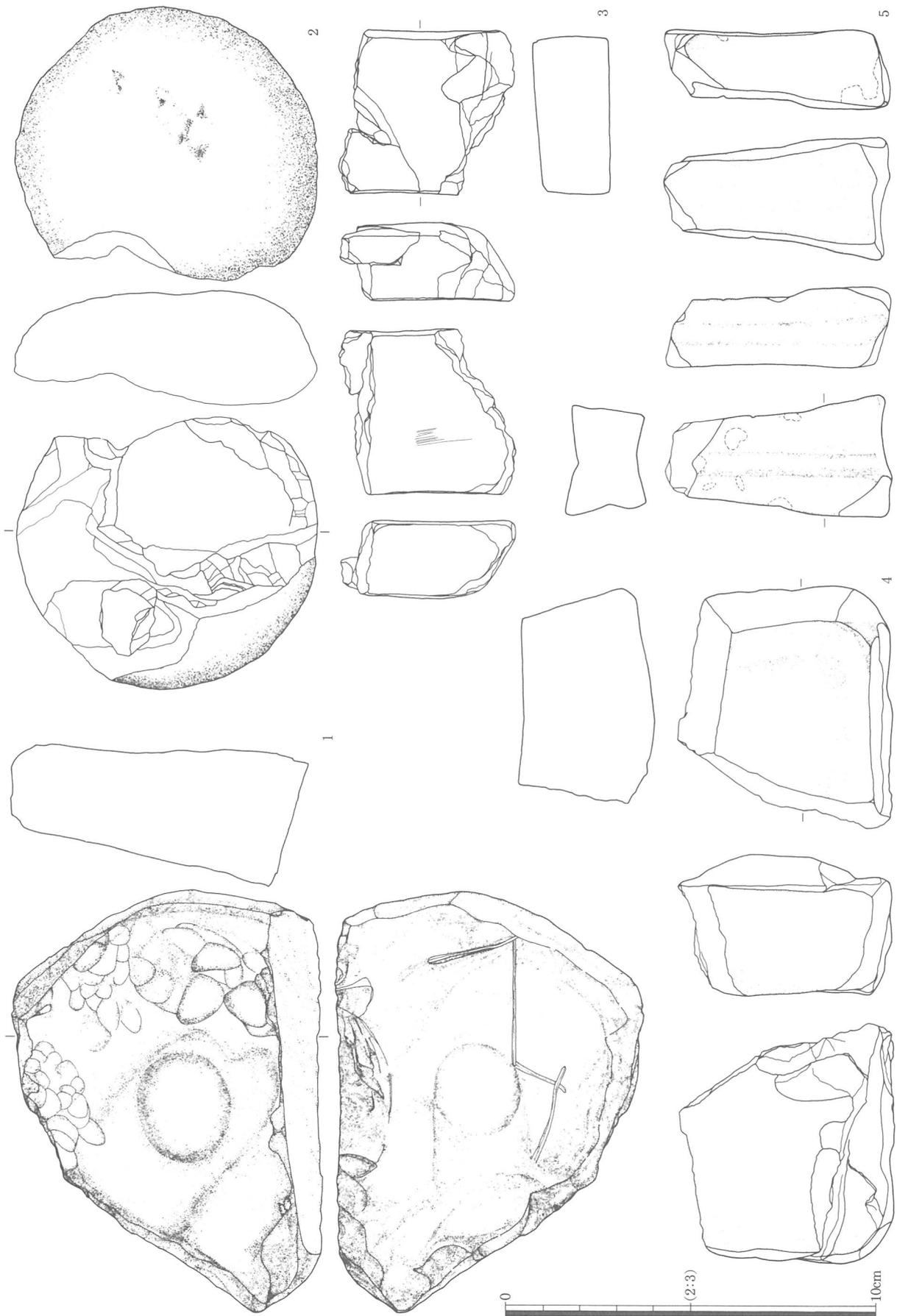
挿図96 2A・5Aトレンチ出土 太型蛤刃石斧 実測図

石斧は破損した物ばかりで完形品は出土していない。刃部や基部が摩耗や破損していることから、使用中に破損しているようだ。

96-1は閃緑岩製の太型蛤刃石斧である。基部が欠損して、刃部が残っている。厚みがある断面を示す。基部の長さが欠損して分からないが、石斧は大型で重量があったようだ。刃部幅約8 cmを測る。厚みも5 cm前後を測る。刃部は中央部分で見れば先端から2 cm付近で甘い稜線を作り、5 cm付近に稜線を作って体部に続く。刃部は平面的に見れば緩やかな曲線を描いて両側に上がってゆく。刃部は破損した



挿図97 1 A・2 Aトレンチ出土 太型蛤刃石斧 柱状片刃石斧 柱状両刃石斧 扁平片刃石斧
実測図



挿図98 1A・2A・3Aトレンチ出土 敲石 砥石 実測図

箇所が少ない。

96-2は安山岩製の太型蛤刃石斧である。この石斧は基部と刃部の片側が欠損している。石斧の刃部は片側が刃先から5 cm程上から削り出している。もう一方の側は刃先から2.5 cm程削りだしているだけである。両側の刃を削り出す位置が違っている。両側面の稜線も蛇行していて整美な作りではない。両側面の稜線は縦に通らず蛇行している。体部外面は小さな凹凸が幾つか認められる。これは敲打痕が残っているのかも知れない。体部断面は長円形である。

97-1は玢岩製の太型蛤刃石斧である。石斧は刃部が欠損し、基部両面が剝離している。従って残存している面は両側面である。平面形は基部から刃部へ少しづつ幅が広がる。基部はやや丸みを帯びている。挿図97-1の左側の図に掲載した面の剝離は、刃部から受けた垂直方向の打撃による剝離と基部から垂直方向の打撃も受けて剝離しているようで、2方向から大きな打撃を受けている。また挿図97-1右側の剝離も基部に受けた打撃のようだ。

97-2は柱状片刃石斧である。石斧は基部が欠損している。石斧は刃部を水平に置いて断面形で見ると片側が細くなっている。一方が細く片寄った台形状を示す。挿図97-2の左下の断面図は最大幅は左側に寄った位置にある。断面図では右側面が長く、左側面が短い。断面形状は左右対称にならない。このような断面形状なので刃部も左右対称形ではない。背部は刃先から少し削り出して基部に続く。腹部は曲線状を描きながら基部に続く。刃部は2段に屈曲している。腹部に敲打痕が幾つか認められる。全体に研磨痕が残り、研磨時の稜線が幾つか認められる。石斧は片方の側面に縦線が1本刻まれている。

97-3は頁岩製の柱状片刃石斧である。刃部は残存しているが基部が欠損している。刃部は背部から刃先へ短く削り出している。腹部は大きく2段に屈曲して刃先に向かう。柱状部は背面から腹面へ曲線を描いて少し細くなっている。平面形は刃先付近が少し細くなる。挿図97-3の左側の図で腹面に敲打痕が見られる。敲打で成形した後に刃部を作り出している。腹部片側が破損している。背部と腹部及び両側面とも縦方向の研磨が緻密に行われている。

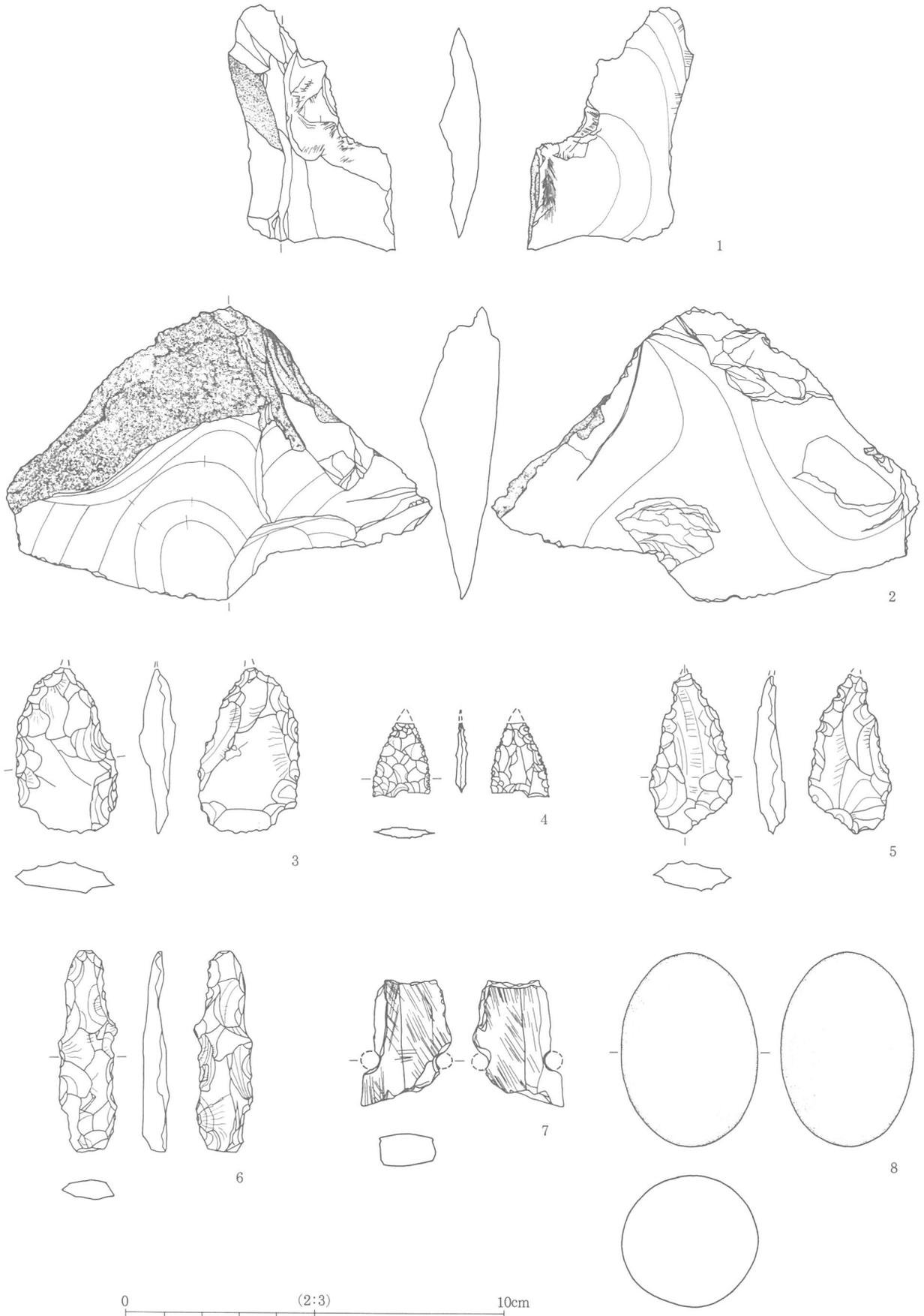
97-4は花崗岩製の偏平片刃石斧と思われるものである。刃部の先端だけ残存している。刃先は磨耗したのか相当丸みを帯びている。刃は水平で片側側面も垂直である。刃先端部は現状は傾いているが元は平坦であったようだ。刃部は背部から直線で刃先に続き、腹部も直線状に刃先に続く。断面形状は片側が厚く、一方は薄くなる。刃部に敲打痕が幾つか認められる。

97-5は凝灰岩製の小形柱状両刃石斧である。両側面を見れば基部は少し幅が狭く刃部へ曲線を描きつつ広がる。基部端は欠損している。石斧側面は基部と刃部近くと同じ厚さである。断面形状は四角形状で片側に少し歪んでいる。刃部は刃先から約2 cm程上がった位置から削り出している。しかし断面形状が歪んでいるので刃部も左右対称にならない。刃部先端は刃こぼれがひどく、片側の刃部は欠損している。

(3) 敲石、砥石 (挿図98)

砥石も金属を研ぐ砥石と攻玉用の砥石の2種類出土している。しかし玉の未製品や原料が見あたらないので、攻玉用の砥石の出土した意味は分からない。この他に実測図を作製しなかったが写真図版に掲載した紅廉片岩が相当量出土している。

98-1は砂岩製の敲石である。上部は山形を示し、側面は平坦で一定幅である。側面に1箇所指押さえの痕跡が残る。下端は平坦な面を作る。指痕部分は親指と他の指で挟んで叩いて使用していた。下端面は摩耗している。



挿図99 1 A・2 Aトレンチ出土 サヌカイト剥片 サヌカイト石核 石鏃 石鏃未製品 角錐形石器
磨製石剣 投弾 実測図

98-2は砂岩製の敲石である。平面形が円形で、上下に圧縮された球形を示している。また平坦に近い側の中央部付近が一部窪んでいる。石器は片側が欠損していた。欠損した部分は横から打撃を受けて破損したようだ。

98-3は凝灰岩製の砥石である。平面形が長方形で両端が欠損している。断面形状は長方形で、片側が心持ち薄くなっている。両面と両側面は摩耗しているので、各面とも使用しているようだ。一部分に擦傷痕が残っている。この砥石の時代は弥生時代から中世まで考えられる。

98-4は砂岩製の砥石である。長方形に長い形態であるが半分以上は欠損している。台形状の上部全面が磨耗し、中央が窪んでいる。側面は斜め上方内側に傾いている。底部は平坦でなくて少し突出している。

98-5は砂岩製の砥石である。この砥石は平面形が台形状である。断面形状も台形状である。側面は上方内側に傾斜した斜面を作る。砥石は左端の中央部分が1段窪んでいる。また左から2番目の図の側面も窪んでいる。また右から2番目の図も中央が曲線的に窪んでいる。左側2つの図の溝状の窪みは幅が約7mmを測る。この砥石は管玉や勾玉を研ぎ出していた可能性がある。

(4) 石鏃、石剣、その他(挿図99)

サヌカイト剥片も一定量出土している。母岩から剥離した大きな剥片も出土している事から大きな母岩が運び込まれていたようだ。また調整時の剥離片も出土していて、この集落でサヌカイトの母岩から必要な石器類を作製していたようだ。また磨製石剣は銅剣型で破損して小片になっている。しかしこのような磨製石剣が当集落から出土した意味は大きく、中心的集落のみならず周辺の集落にも磨製石器が使用されていた事を物語っている。

99-1は二上山製のサヌカイト剥片である。剥片の一部分に母岩の風化した部分が残っている。両面から打撃を受けた痕跡を残している。挿図99-1の右側の図は左側から打撃を受けている。また左側の剥片も母岩の風化した部分を残している。母岩はあまり大きな石材ではなかったようだ。

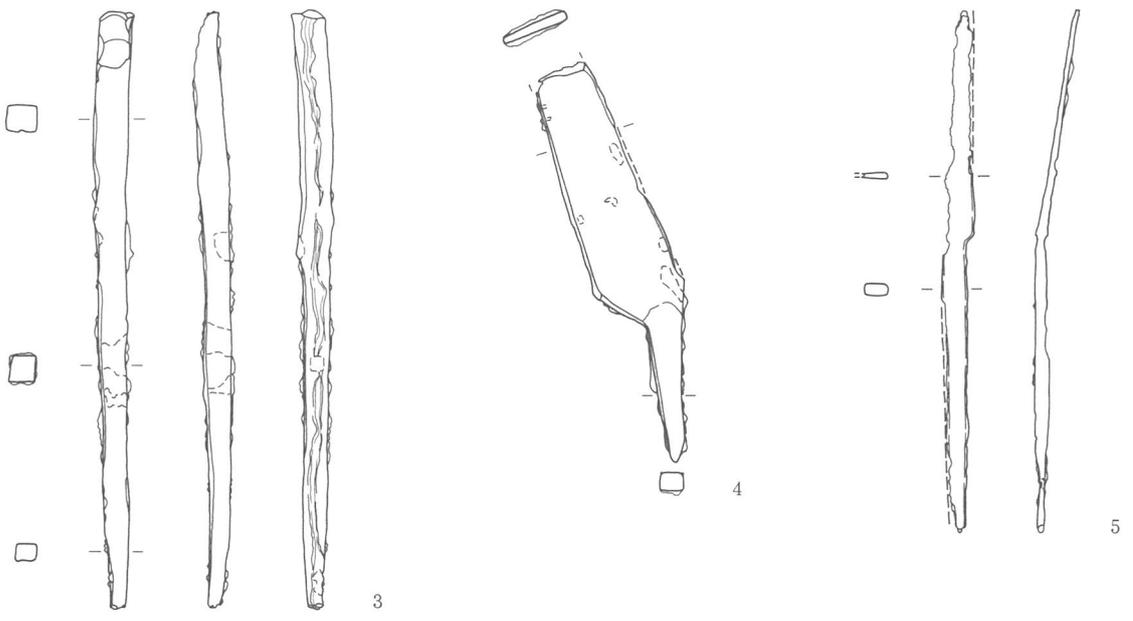
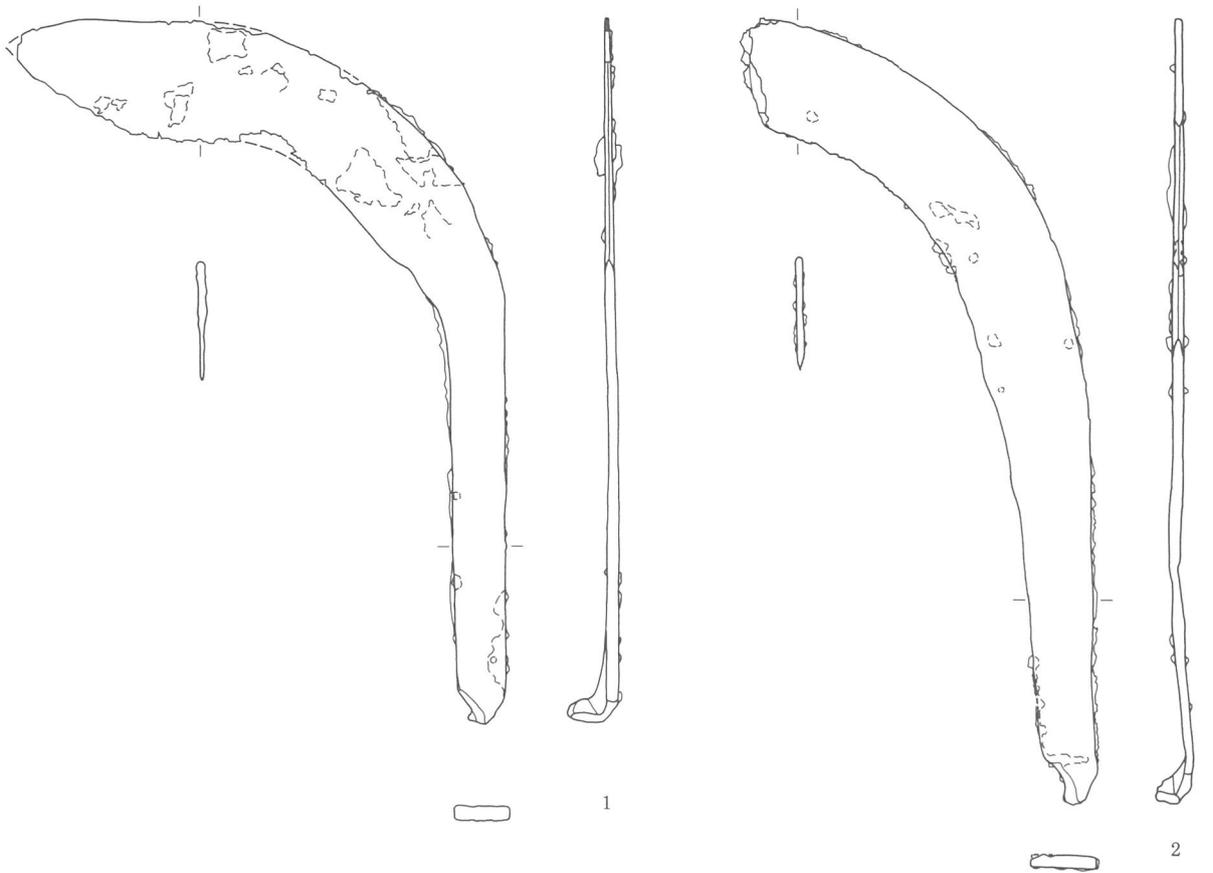
99-2は二上山製のサヌカイト剥片である。大型の剥片である。母岩から割り出した大きな剥離片で、片側に風化した面が広く残っている。この剥片は打面調整を幾つか受けている。剥片には何らかの石器に加工される意図が認められるようだ。

99-3はサヌカイト製の石鏃未製品である。基部は風化した未調整面が残る。両面から打面調整を行っている。中央の鏃が削り出される状態まで進んでいない段階で廃棄されたようだ。完成品はもすこし小さくて軽量であると思われる。

99-4はサヌカイト製の石鏃である。先端が欠損している。基部中央が少し窪んでいる。片側の基部が少し欠損している。石鏃は凹基である。両側面には押圧剥離を行ってぎざぎざな端面を作っている。厚さは非常に薄く軽い石鏃である。

99-5もサヌカイト製の石鏃の未製品である。未製品は両側面の押圧剥離が完成していない。中央の鏃の軸が曲がっている。これは完成途上の形態と思われる。

99-6は角錐状石器と呼ばれるものである。この石器は表面の風化が進行している。他のサヌカイト製石器類の表面が黒味を帯びた色調を示すのに、角錐状石器の色調は灰白色を示している。石器の時期は古く縄文時代の可能性が考えられる。石器は挿図99-6の上部が薄く作られて片側に少し湾曲している。湾曲した側は窪んでいる。下側部分は厚みがある。上下の境目が両側に少し飛び出している。基部は素材の表面が調整されずに残っている。成形は大きく外側から剥離したあと、細かな部分を剥離して



0 (1:2) 10cm

挿図100 1 A・2 A・3 A・4 Aトレンチ出土 鉄鎌 鉄釘 刀子状鉄製品 用途不明鉄製品 実測図

整形している。

99-7は粘板岩製の磨製石剣の基部の破片である。銅剣を模倣した石剣で基部に2箇所穴が開けられている。剣の中央に丸みを帯びた鑄が縦に通る。表面には斜めや縦方向の研磨痕が見られる。復元すると幅が4～5 cmを測る大型の石剣となる可能性がある。

99-8は硬質砂岩の投弾である。平面形は長円形で断面形状は少し歪んだ円形に近い形である。

石材では実測図を作製していないが、赤色片石が出土している。これに良く似たものに紅簾片岩がある。専門家に鑑定して頂いた結果は、この片岩には紅簾片岩の結晶が見られないとの事で、赤色片岩と名付けられた。なお赤色片岩が出土した地点は2 A トレンチの弥生時代遺構面の数箇所とIV層中である。報告は大きな破片を選んで図版に掲載している(図版44-b)。写真以外に掲載した以外にも小さな破片が幾つか出土している。中には使用して摩耗した破片も見られる。

3 金属器(挿図100)

出土した金属器は新しい時代と思われる物が大半で、弥生時代に限定できる資料は出土していない。

100-1は中世の鉄鎌である。鎌は柄の部分と刃部を明瞭に区別して作られている。柄は直線的に作り刃部は内側に湾曲する。柄の基部は90度に折り曲げている。木質の柄に挟み込んで抜けないようなすべり止めが作られている。刃部は2つの湾曲する曲線が組み合わされている。刃部は柄から45度角で湾曲する。先端部分は柄と直交した角度で伸びている。刃部先端は刃先が曲線を描いて背部に近づく。刃部は柄から2～3 cm先端方向の部分から刃幅が広がる。幅が広がった部分から刃が付けられている。

100-2は中世の鉄鎌である。平面形は柄部と刃部が明瞭に区別できない古い形態を示している。柄部は下端から次第に幅が広がり、刃部と連続して先端へ続く曲線を描いている。刃部は余り曲がらず60度ほどの開いた形状である。刃先は欠損している。刃部は刃幅が変わらない。刃の厚さも刃先と背部とで同じ厚さである。基部は折り返して滑り止めを作っている。

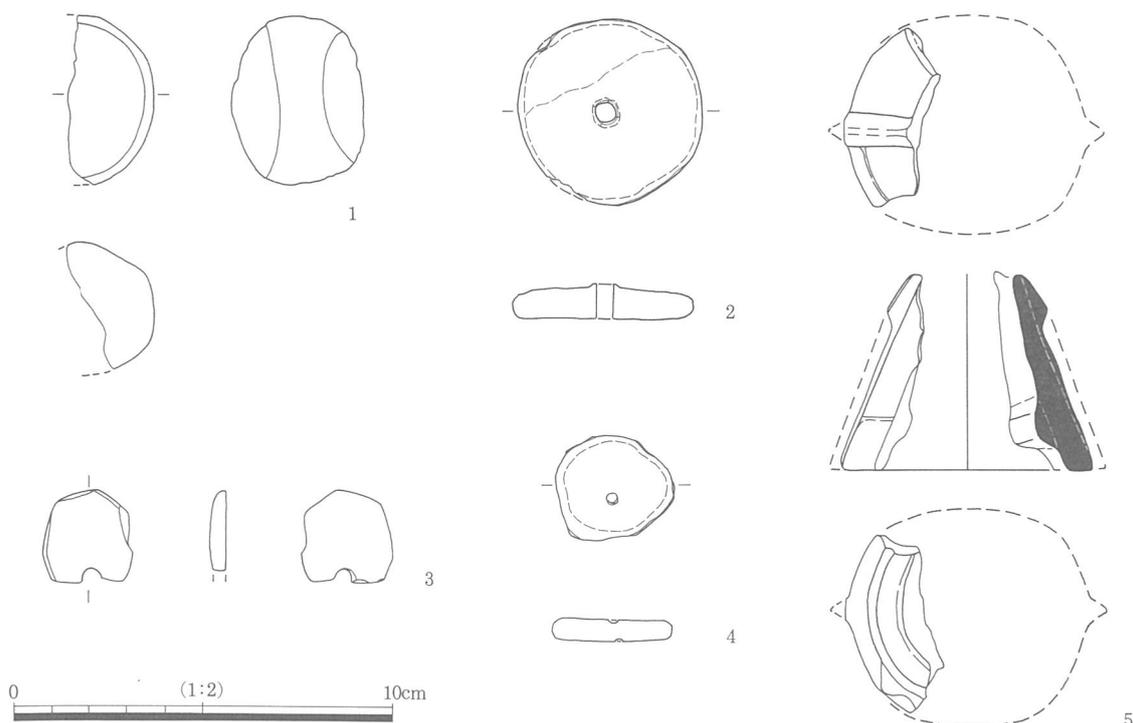
100-3は中世の鉄釘である。上部のL字状に折れ曲がった部分は欠損している。縦方向上部は断面四角形で1面のみ溝状の窪みが縦に認められる。先端部は少し細くなるが鋭利に尖っていない。上部端は折れて欠損した痕跡を残している。釘の縦長の一面に溝状の窪みが認められることから、鍛造の鉄釘の可能性はある。

100-4は中世の刀子状鉄製品である。柄は末端から刃部へ少し幅が広がりながら続く。柄の断面形状は四角形に近い長方形である。刃部は基部が最も幅広く、末端は幅が少し狭くなる。刃部断面は薄く作られている。刃部の片側が薄くなる状況は錆の上から観察できない。刃を作らないコテ状の工具の可能性もあるが、ここでは刀子状鉄製品としておく。

100-5は用途不明鉄製品である。これは平面形は直線状を示すが先端部と基部が少し位置がずれて繋がっている。基部の断面は厚く長方形を示す。全体に錆で一部欠損している。先端は少し細くなっている。先端部の厚さは基部より薄くなる。先端部は片側が薄くなり刃部を作っていた可能性がある。出土した状態は先端部と基部が少し折れ曲がっていたが元の形状は直線的であった可能性がある。

4 土製品(挿図101)

土製紡錘車や土錘か区別できない物や、土製紡錘車の他に銅鐸形土製品が出土している。この他にも用途不明の土製品があり、写真図版に2点掲載している。



挿図101 1 A・2 A・3 Aトレンチ出土 用途不明土製品 土製紡錘車 土製紡錘車未製品
銅鐸形土製品 実測図

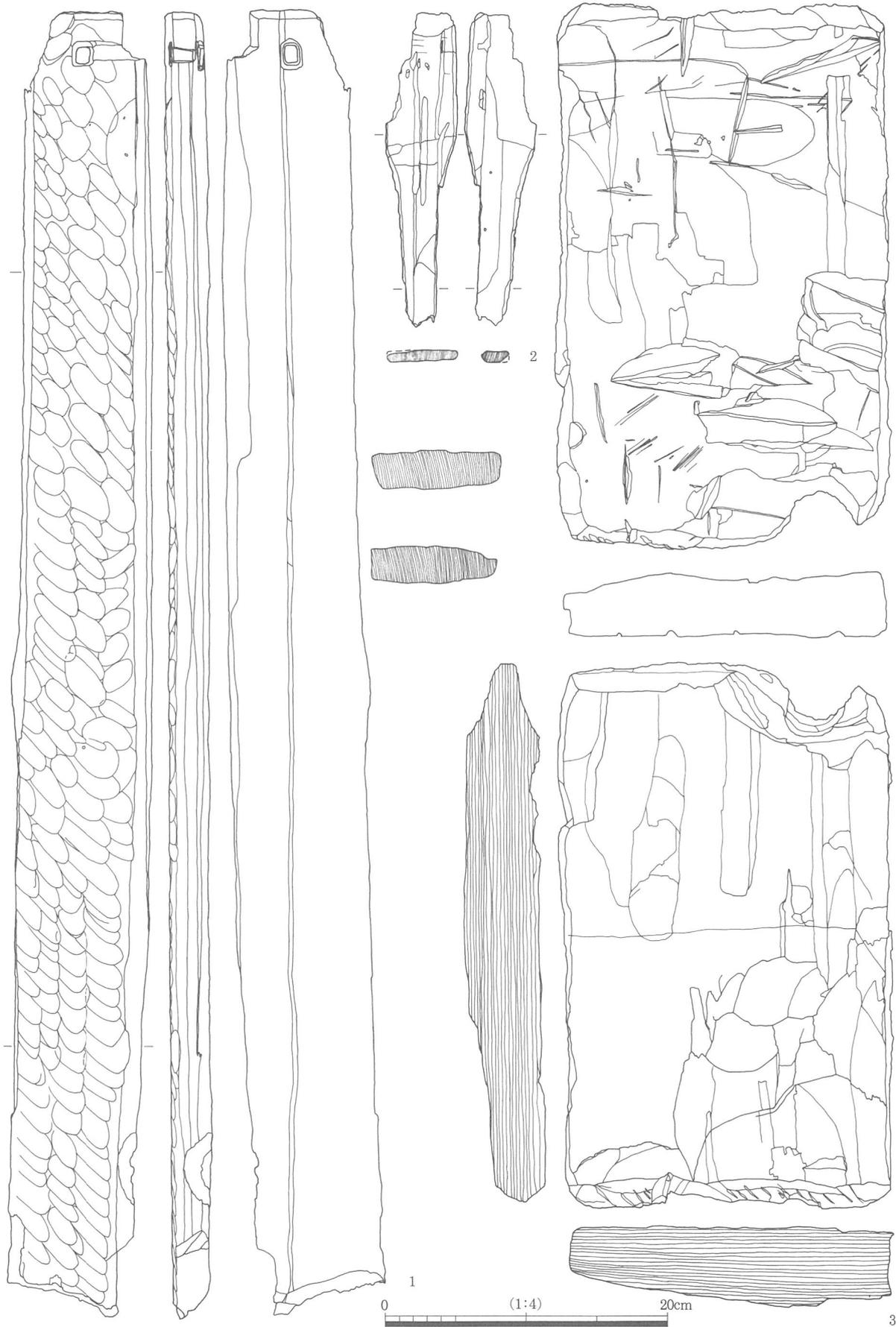
101-1は土製品である。形態は球形を、厚みを直径の半ばまで圧縮した、扁平な球形を示す。両側は緩やかな曲線を描く。横長に置いて縦に割れて半分が残っている。この遺物は欠損した部分のどの方向に孔が開けられていたかで、用途が違ってくる。挿図のように縦長に使用して孔が開いていれば土錘であるし、扁平な面に孔が開いていれば紡錘車として使用されていたと考えられるが、残存した資料では分からない。

101-2は土製紡錘車である。紡錘車は焼成前に紡錘車として使用する目的で作製している。紡錘車は円盤の中央に焼成前に孔を開けて、上下の面はナデて整形している。側面もナデている。円孔の際が少し盛り上がっている。孔は円盤の中心に位置している。

101-3は土器片を打ち欠いて隅丸五角形状に加工したものである。土製品は下端部が欠けている。下半部に孔を開けている。全体形状は下半部が欠損しているで分からず、孔がどのような位置に開けられていたか分からない。残っている部分から判断すると、孔は円盤の中心に開けられていたと考えられない。片側に寄った位置に孔が開けられていたようだ。これは紡錘車ではないようだ。

101-4は土器片を加工して変形した円盤状に作りだしたものである。平面形は角が丸くなった五角形状を示す。側面は研磨して丸めている。円盤は片側に寄った位置に穴を開け始めている。穴は貫通していない。形態的に穴が中心に位置せず、また円形でないことから紡錘車として使用する以外の用途で作り出したと考えられる。

101-5は銅鐸形土製品である。外形はかなり傾斜が緩やかである。他から出土している銅鐸型土製品と比較して外形の傾斜は緩やかである。鱗部分の破片と身の中央付近の2つの破片が出土している。挿図は鱗の部分を図化した。身は舞より下部しか残存していない。鱗は身の側面に下端部まで付けられていた痕跡が残っている。鱗の形態は舞付近のみ残存している。体部下付近の外側に横帯文を表すと思



挿図102 2A・3Aトレンチ出土 板状木製品 シャもじ状木製品 えぶり未製品 実測図

われる段差がわずかに片面に認められる。体部内面の下から5 mm 付近から上方に幅約1.5cmの突帯が貼りつけられている。この体部内面の突帯はもう一つの破片にも認められる。体部外面はハケが認められず、ナデで全体の調整を行っている。出土した破片からは体部部分的な破片しかなく鈕も欠損している。この銅鐸型土製品は内面突帯を作りだしたものとしては希有の例になる。東奈良遺跡で2例、倍賀遺跡で1例、茨木市内から銅鐸型土製品がこれまで出土している。

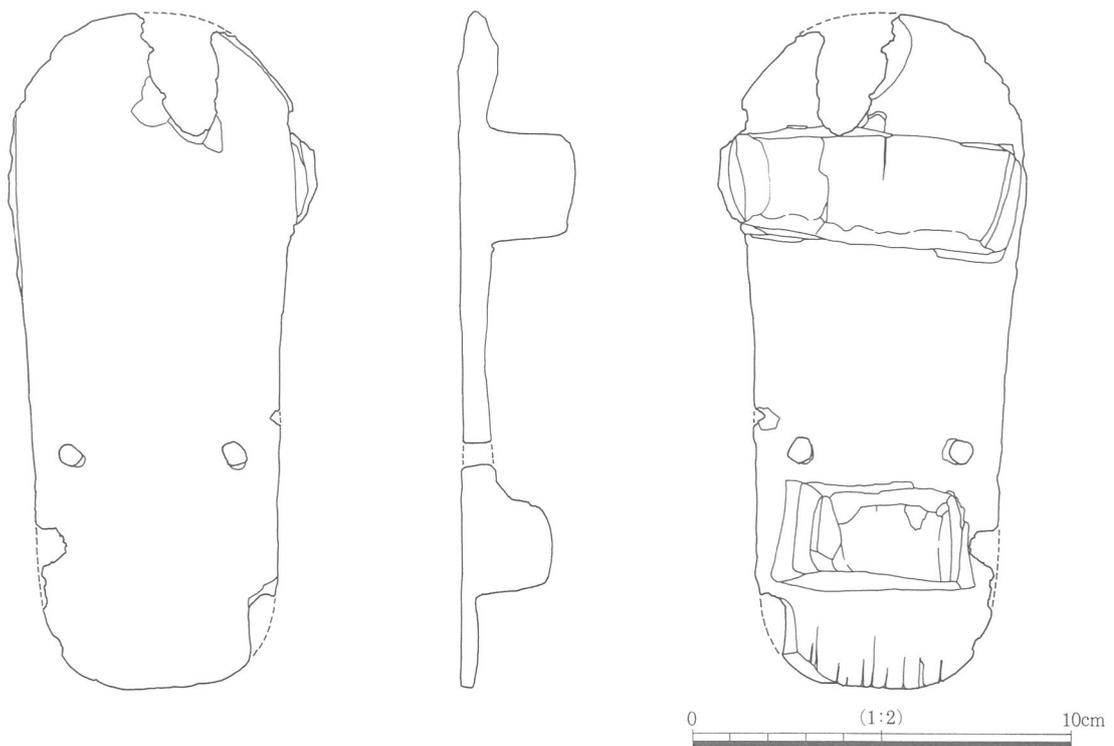
5 木製品 (挿図102)

4点出土している。3点は弥生時代、1点は中世である。

102-1は中世の用途不明木製品である。平面形は長い長方形である。ほぞ孔を開けていない側は切断されている。挿図102の下側である。左側の側面図の右端が大半外形を残している。この部分は丸みをもって表から裏に続く。反対側は割れて失われている。図左側の長円形が重なっているのはやりがんなの調整痕である。反対側にはみられない。調整した側が表面となる。裏側には端からすこし離れて段差がある。図の上側に四角形のほぞ孔を開けて貫通している。ここに表面を調整した側に浅い彫り込みを作って右の端に続いている。

102-2は弥生時代中期のしゃもじ状木製品である。下側に柄があり、上部は幅がひろくなる。上部は欠けた部分が多い。

102-3は弥生時代中期のえぶりの未製品と思われるものである。平面形は長方形である。一部分欠損している箇所がある。表面はやりがんなで削っているのがわずかに判明する箇所がある。この木材は厚さ4～5 cmに達する木材で、片側中央付近は盛り上がっている。側面は荒割りした状態で整形していない。木取りは板の平面と平行である。巨大な木材を使用して年輪の曲線があまり感じられない周辺材を



挿図103 1 A トレンチ出土 下駄 実測図

使用している。この材は中央部が盛り上がっている事と木取りが平面と年輪が平行な板材を作ろうとする意図がある。板の幅や厚みなどからえぶりの未製品と推測した。

103は中世の下駄である。中世III-1層出土である。下駄は残りの状態があまり良くなくて、欠損している箇所もある。下駄は板材と足葉は一木造りである。平面の幅は前部分は後部分より少し幅広くなる。そして親指の鼻緒の位置は左足用なので右側に寄っている。足の親指が接する部分は窪んでいて長期間使用していた事を示している。足葉は基部幅が接地部幅より狭い中世の下駄の特徴を示している。後葉は欠損してその特徴は分からない。

第5節 検出した遺構・遺物 (1997年度調査)

今年度の調査では、調査トレンチを4箇所を設定した。遺構面は、弥生時代が1面、中世が2面のあわせて3面を確認した。中世の遺構面は昨年度調査区で検出した遺構面に対応して、下層の遺構面を中世I、上層の遺構面を中世IIとした。調査トレンチごとに下層の遺構面から順に、検出した遺構と遺物について概要を記述する。

1 1Bトレンチ検出遺構 (挿図104・105, 図版48・49・53・55~57・60)

(1) 弥生時代 (挿図104, 図版49)

第V層上面で検出した遺構面である。風倒木痕2個、溝2条、ピット4個を検出した。

1) 風倒木痕

トレンチ中央部で風倒木痕2056、西端で風倒木痕2055を検出した。風倒木痕2056は不定形を呈する。風倒木痕2055は一部を検出した。両者とも樹木の根によって持ち上げられたとみられる第V層系土が、約0.4mの高まり状に残る。

2) 溝

トレンチ北東隅で溝2064、北西部で溝2057を検出した。溝2064は真北に対して西に振れを持つ。溝2057は弧を描く。性格は不明である。

3) ピット

直径0.15~0.3mのものがある。ピット2058には柱痕跡が残る。遺物は出土していない。

(2) 中世I (挿図105, 図版57)

第III-1層上面で検出した遺構面である。水田跡、足跡を検出した。

1) 水田跡

トレンチ中央部で畦畔1条(畦畔2053)を検出した。南北方向に延びる。真北に対して東に振れを持つ。またトレンチ北部で畦畔を挟んで東側と西側に足跡を検出した。

2) 溝

トレンチ東部で南北溝1条(溝2052)とそれに連結する東西溝3条(溝2049~2051)を検出した。溝2052は畦畔2053から東へ約1.5mのところを位置し、東西溝の西端を限る。東西溝は約2mの等間隔で併走する。

(3) 中世II (挿図105, 図版60)

第II-2層上面で検出した遺構面である。トレンチ中央でL字状に2条の溝が並行する道路状遺構と畑